

DachurA

「登場人物」

エル・エインズワース

エインズワース家の一人娘。心優しく慎ましやかで、周囲の人間からとても慕われている。自身の誕生日パーティーで出逢った青年・セドリックと屋敷を抜け出すが――。

セドリック・アンドール

エルをエインズワース家から連れ出した、ブローカーを営む謎の多い美青年。

マーシャ・レイノルズ

セドリックの幼馴染。ブロンド髪に猫の様な縦長瞳孔が印象的な気さくな美女。

ライリー・ワトソン

雑貨屋の女主人。姉気質な女性。セドリックとマーシャとは昔馴染みらしい。

DachuRa 1st story-Ivy- II

XVIII Stormy night

窓ガラスを強く叩く豪雨に、家が揺れていると錯覚する程の暴風。

悪天候という言葉では言い表せない程の天気、一人恐怖心を抱いているのは六月の上旬、日も暮れ始める十八時頃の事だった。

ロンドンでは天気が不安定な街であり、悪天候は珍しく無い。九月頃になると天候も荒れやすくなり、嵐が頻繁に起こる様になる。

だが今は六月。嵐が起こるには早すぎる時期だ。

次第に強まっていく雨風に不安心を煽られながらも、セドリツクの帰りを待ちながら窓から外を眺めていた。

触れさせた掌から感じる、ガラスの振動。こうしてロンドンを包む分厚い雲を眺めていると、ふと「あの日」の事を思い出す。

それは、今日のように季節外れの嵐が訪れた、幼少期の事。

忘れもしない、恐怖の記憶。

——確か、あの日も今日と同じく日が暮れ始める、十八時頃だった。

する事が無く退屈で、雷雲を伴う暴風雨を窓から眺めながら一人屋敷の探索を行っていた。

まだ幼かった当時の私は好奇心旺盛で、両親やモーリスの言う事もあまり聞かなかった事を覚えている。

その所為だろうか。好奇心と僅かな悪戯心で、やっと背丈が伸びドアノブに手が届く様になったのを良い事に、入ってはいけないと言われていた父の仕事部屋に近付いてしまった。

強い雨風に、遠くで聞こえる雷鳴。

いくら父が冷酷でも、こんな嵐の日に娘が怖がついていたら共に過ごしてくれらるう。なんて安易な考えを抱いてしまったのは、私がまだ幼かったからだろうか。

父の仕事部屋の前。足が攣りそうになりながら、高い位置にあるドアノブに手を伸ばし必死に背伸びをした。大好きだった父に会いたくて、父にもっと私を見て欲しくて。

そして漸く手の届いたドアノブ。開いた扉に安堵し、隙間から部屋の中を覗き込んだ。

きつと、その時すぐに引き返していれば、私にこれ程大きなトラウマを残す事は無かつたのだろう。

酷く散らかった仕事部屋。そこで目にしたのは、衣服を乱れ嬌声を上げる一人の使用人と、彼女と嬌う父の姿。

父はその時、私の存在に気付いて居なかった。父の瞳は使用人に向いていて、そして使用人の瞳も父に向いたままだった。

今の私なら、その行為が何を意味しているのかは分かる。だが、やっとドアノブに手が届く程の年齢だった私には、二人が何をしているかなど知る由も無かつた。

『——おとうさま、』

部屋の中に一歩足を踏み入れ、父に声を掛ける。それが、間違っていると知らずに。

『なにをしているの？』

投げかけたその問いに、返ってきたのはただ鋭い視線のみ。

私の声に驚いた使用人は、慌ただしく身形を整え部屋を出て行った。そして、部

屋に残された私と父。

父は、いつも通りの笑顔を私に向けた。だが、父の笑顔は何処か怖くて、その瞬間自分は選択を誤ってしまった事を悟った。

『――部屋に入ってはいけないと、言ったはずだよ』

笑顔のままそう告げた父は、身形を整えるなり私の腕を乱暴に引っ張った。

外は雨。耳をも劈く大きな雷鳴。強い風に、揺れる窓。

怖かったのは父か、それとも天候か。

足が縛られて転んでも、父は御構い無しに私を引き摺る。笑顔を顔に浮かべたまま、前だけを見据えて。

――その後、何処に連れて行かれたのかはよく覚えていない。気が付けば何処か知らない部屋に居て、父は『此処で暫く反省なさい』と言って私を小さなチェストの中に閉じ込めた。

真つ暗なチェストの中は狭くて、怖くて、私は小さな手で必死に扉を叩いた。『ごめんなさい』そう何度も言いながら、手に血が滲むまで、何度も何度も。

それから、どれ程チェストの中に居たのだろうか。

私を助け出してくれたのは、息を切らせ額に汗を滲ませたモーリスで、私の姿を

見るや否や彼は私を強く抱きしめてくれた。

後に聞いた話だが、当時モーリスは私の姿が見えない事を疑問に思い、一人屋敷中を駆けずり回って探してくれていたらしい。

手に滲んだ血でシャツが汚れてしまうのも気にせず、モーリスは憔悴しきった私を暫く抱きしめていてくれた。その温かさはとても安心できるもので、枯れてしまった筈の涙も再び溢れだし、私は赤ん坊の様にモーリスに縋って激しく泣いた。結果チェストから出る事は出来たが、それからというもの私は暗所に恐怖を感じる様になった。

現在この家では、幸いベッドの上に窓があり、その窓から月明かりや街灯の明かりが差し込む為眠る事は苦では無い。だが屋敷に居た頃は、眠る際ナイトテーブルに置いた燭台の火を中々消す事が出来なかった。

あれから十数年が経過し、成人を迎えた今でもその傷は癒えていない。

常に思い出す訳では無いものの、今日の様な嵐の日はふと思いでしてしまう、消し去りたい畏怖感のある記憶だ。

相変わらず、雨風は強い。

あの日と同じく遠くからは雷鳴が聞こえ、雷雲が近づいてきている事が分かった。セドリツクの帰りが遅いのも、この嵐の所為だろうか。彼の職場が何処にあるのかは聞かされていないが、これ程天気が荒れているのならば下手に動かず、多少治まるまで職場で待機している方が安全だろう。

だが、いつ何時^{なんどき}彼が帰宅するかは分からない。念の為タオルを数枚用意しておこうと、窓際から離れ、チェストへと足を向けた。

その瞬間、ふと脳裏を過つたのはここ数日のセドリツクの事。

彼は普段、仕事が終わる次第直ぐにこの家に帰ってきてくれる。それは自分の家のだから当然だろうと思っていたが、マーシャから聞いた話によると、彼はあまり家に頻繁に帰る方では無かったらしい。仕事が終わっても職場に長居する事も多く、街へ出たまま家に帰らない事も多かったのだとか。

だが、そんな話信じられない程に彼はちゃんと毎日帰ってきてくれていた。それだけでなく、仕事に数時間空きがある時にはわざわざ帰ってきて、街への買い出しに付き合ってくれる事も多い。その所為か、街では夫婦と勘違いされる事も多々あった。

——なのに。

ここ最近、彼の帰りが極端に遅い。今迄は必ず夕食を共にしていたのに、最近ではその夕食さえも一人で食べる事が増えていた。

何処と無く彼に帰宅が遅い理由を尋ねてみても、彼は「仕事が長引いてる」としか答えず、更には何処か余所余所しい態度を見せる。

折角、彼と少しづつ距離が近づいていると思つていたのに。これでは、振出しに戻るところかマイナスだ。

チェストから大きめのタオルを二枚程取り出し、寂しさを埋める様にそれを強く胸に抱いた。

彼に、嫌われる様な事でもしてしまつたのだろうか。

毎日笑顔で彼を出迎え、コートやジャケットを受け取り、それをハンガーに掛け、夕食を出す。夕食を共に食べた後は、セドリックが入浴をしている間に食器を片付け、最後の家事を終える。そして自身も入浴を終え、就寝前の時間をお互い思い思いに過ごすのが、最早習慣となつた生活様式。

自身が入浴を終えた後も、彼にはしたくないと思われぬ様に身嗜みはきちんとして、馴れ馴れしいと思われぬ為にも極端に距離を縮める様な事はしてこなかった。一体、自身の何がいけなかつたのだろうか。考えれば考える程、分からなくなつた。

ていく。

頭の中が混乱しそうになるのを何とか抑え、溜息を吐きながらゆつくりと顔を上げた。

——ガチャリ。

突如聞こえた玄関扉が解錠される音に、鼓動が跳ね上がる。

外は嵐の真つただ只中。まさか、この嵐の中帰ってきたのだろうか。玄関扉の方へ視線を向けると、その疑問に答える様に扉がゆつくりと開いた。

「……おかえりなさい」

ふらりと家の中へ入ってきたセドリックに、怖ず怖ずと声を掛ける。

黒のスーツは水を吸って色が変わり、シャツはぐつしよりと濡れ肌に張り付いていた。掻き上げられた髪からは水が絶えず滴り、靴は足を傾ける度に水が溢れ出している。

多分水を含んだスーツが重たいのか、セドリックは何処か気だるげだ。今の彼を一目見て、外の嵐がどれ程酷いものなのか十分に理解出来た。

そんな事よりも、早くタオルを渡さなければ。慌てて彼に駆け寄り、胸に抱いていたタオルを差し出す。

先程幼少期の事を思い出してしまったからか、それとも最近の彼の態度が余所余所しいからなのか、何故だかいつもの様に笑顔を作る気になれない。それに、今の彼は全身ずぶ濡れであり、笑顔は不相応だ。だが、無表情で居るのも可愛げが無いだろうか。

そんな事を考えながら、ガシガシと乱暴に濡れた髪をタオルで拭いている彼をぼんやりと見つめる。

「寒かったでしょう。……夕食よりも、お風呂が先の方がいいかしら」

なんとなくその場の沈黙がつかなく感じ、独り言を漏らす様に彼に問い掛ける。だが彼からの返事は無く、バツが悪そうに顔を歪め私からふいと顔を背けた。

「……」

チクリと胸が痛み、言い難い感情に苛まれる。

彼に、嫌われたくない。今迄の関係に戻りたい。

だけど私に何か思う事があるのなら、何か問題があるのなら。そんな風に顔を逸らすのでは無く、直接言ってくれば良いのに。

不安と苛立ちが混ざり合った感覚に、私も同じ様に彼から顔を背けた。

再び窓に近寄り、外を眺める。

嵐は酷くなる一方で、治まる気配は無い。雷雲は更に近づき、家の真上の雲はゴロゴロと唸る様な不穏な音を鳴らしている。

昔、立ち木に落雷し、それが原因で火災が起こったと新聞で読んだ事があった。その他にも、落雷の際に起った突風で窓ガラスが割れてしまったり、飛び散った木の破片が窓を突き破ったりなど。自身の力で防ぐ事が出来ないだけに、自然災害は恐ろしい。

念の為、カーテンはしっかりと閉めておいた方が良いだろう。もし万が一窓ガラスが割れてしまっても、カーテンさえ閉めておけばガラスが散らばるのを防ぐ事が出来る。

頭の中を回る最悪の事態を掻き消す様に、僅かに開かれたカーテンを強く引つ張った。

「……?」

だがそのカーテンは閉まる事無く、まるで誰かが反対側から掴んでいるかのようにピンと突っ張った。カーテンを大きく捲り、一体何が妨げているのかとその先を覗き込む。

そこで目にしたのは、閉まった窓に挟まっているカーテンの裾。恐らく、最後に

窓を閉めた際にカーテンを巻き込んでしまったのだろう。

これでは、綺麗なカーテンが雨や風の所為で汚れてしまう。そんな事になれば、またセドリックと距離が開く原因になってしまふかもしれない。何とかして、カーテンを閉まった窓から外さなければ。

妙な焦燥感から、カーテンの裾を掴み強く引っ張った。だがしつかりと窓が閉められてゐる所為で、巻き込んだカーテンはびくともしない。これは、一度窓を開かないと外す事は出来なさそうだ。

外では雨も風も酷いが、全てに波があり、ふと治まる瞬間がある。その瞬間を狙えば、窓を開けても然程被害を被らないのではないか。

顔が付きそうな程窓ガラスに近付き、外の様子を伺いながら窓の鍵に手を掛ける。轟々と低く響く風の音。窓を叩く雨。今にも折れてしまいそうな程撓る立ち木。

それ等が徐々に、治まっていく。そして一瞬、静止した様に全てが静まった。

窓を開けるなら、今しかない。素早く鍵を解錠し、そつと窓を開いた。

特に大きな問題もなく無事裾が外れ、カーテンがふわりと揺れる。汚れを危惧していたが、カーテンの裾が少し濡れただけで特に目立つ汚れも無かった。

ほつと、安堵の息を吐く。

だが、そんな安堵も束の間。

「あっ……！」

開いた窓から強風が吹き込み、カーテンが弧を描く様に捲れ上がる。

雨風が治まった瞬間を見計らって、と思っていたが、どうやら考えが甘かったらしい。

慌てて窓を閉めるも、もう手遅れだ。部屋を明るく灯していた蝋燭の火が消え、一瞬にして暗闇に包まれる。

内側から鈍器で殴られている様な、痛みを感じる程の酷い動悸。耳の奥に響く雨の音も、風の音も、雷鳴も、そして暗闇も。全て、あの日と同じだ。

あの時は、暗く狭いチェストの中で様々な事を考えていた。

もう、誰にも見つけて貰えない。このままチェストの中で一人、永遠に一人きりなのだと、そんな不安で頭がおかしくなりそうだった。

——ああ、そうだ。あの時。

屋敷の探索をする前、悪戯をした私を叱ったモーリスに、「うるさい」「モーリスの馬鹿」なんて暴言を吐いてしまった。全て私が悪い事を、頭では理解していたのに。叱られた事に腹を立て、何故だかそんな事を言ってしまった。

その時の、モーリスの悲しげな顔がふと蘇る。

「……ごめん、なさい」

気が付けば、あの日と同じ言葉を口にしていた。

手を添えたままの窓。その手に伝わる振動。それが、チェストの内側からドアを叩いていた時の感触に似ていて、全身から血の気が引くのを感じた。

チェストの中で、必死に「ごめんなさい」と繰り返し叫んでいたのは、仕事部屋に黙って入ってしまった事では無い。モーリスに暴言を吐いてしまった事に対してだった。

いつも優しくかったモーリスが、もう私に愛想を尽かし、私を嫌ってしまったのではないかと。このままモーリスが、私を探しに来てくれないのではないかと、そんな不安に駆られて、錯乱状態だった私はモーリスに声が届かない事も分からず声が枯れるまで叫び続けた。

もし、セドリツクがモーリスと違って、本当に私を嫌ってしまったのだとしたら。私を疎ましく、思っているのだとしたら。

そんなの、嫌だ。

十八年生きてきて、やっと見つけた私を完成させる為のピース。抱いていた、違

和感の正体。

それが、彼への「恋心」なのだ、やっと気づいたのに。

彼の心を取り戻す方法は、きつと何処かにある筈だ。私に何か問題があったのなら、それを直せば彼はまた私を見てくれる筈。

私に熱の籠った視線を向けてくれた時の様に、私の指の傷に気付いてくれて、手当をしてくれた様に。また、縮まった彼との距離を取り戻す事が出来る筈だ。

暗闇に目が慣れない中、自身の足は彼の方へと向く。

彼とちゃんと話合えば、きつと解決する。そう頭では分かっているのに、身体は勝手に動き、足が縛れるのも構わず彼の元へ。

抱き着いたのか、ぶつかったのか、自身でも分からない。だが気が付けば、彼の濡れて肌触りの悪いジャケツトを掴んでいて、冷たいシャツに額を押し付けていた。

そのままぐらりと身体が傾き、どきりと大きな音を立てその場に倒れ込む。

「……ごめんさい」

咄嗟に彼を押し倒してしまった事に気付き、慌ててその言葉を口にする。だが自身心の内の不安は取れず、上半身を起こした彼に、再び縋りつく様にシャツを掴んだ。

彼の膝の上、下着が見えそうな程にスカートは捲れ上がり、冷たい空気に素足が晒される。はしたないと分かっているながらも、それでも今は、彼と共に居たかった。彼と、離れたくなかった。

「——暗い所が苦手です」

口にした、本心とも言い訳とも取れる言葉。思考は状況に追いつかず、この先の事など何も考えられない。

ただ、暗闇に目が慣れ始めた中、彼と絡み合った視線に鼓動を高鳴らせる。透き通る様な肌に、端正な顔立ち。暗闇に浮かぶ、宝石の様なローズレッド。

彼の顔はいつ見ても美しく、まるで童話に登場する王子様の様で。欠点の無いその顔に、思わず息を呑んだ。

何処の国の物語だったか。有名な童話の一つである、灰被りと呼ばれた憐れな姫の物語。

継母とその連れ子である姉二人に虐められるが、彼女は魔法の力を借りて素敵な王子様と出逢った。午前零時の鐘の音が、魔法が解ける合図。沢山の試練があったものの、彼女は無事王子と再会し素晴らしい結末を迎えた。

その物語を、屋敷の書齋ライブラリーで何度読み返した事か。メアリーにも笑われてしまう

位、私はその本を何度も読んで美しい物語だと感嘆を漏らした。

王子様と出逢って、妃きさきになりたかった訳じゃない。

沢山の女性の中から、自分一人が選ばれたかった訳じゃない。

ただ私は、自分が心から愛せる人を、自分を心から愛してくれる人を、ずっと探し求めていた。

優しいモーリスとも違う、可愛らしいメアリーとも違う、「最愛」を。

そして私は、セドリックを愛してしまった。恐らく、屋敷のバルコニーで、彼を一目見た時から。

愛した相手に、自分も同じ様に愛されたいと思うのは当然の事。彼が私を愛してくれるのならばなんだったって出来る。それこそ、悪い事だって。

「……一人は嫌なの」

彼の瞳を真っ直ぐに見つめ、乞う様に呟く。

「……一人に……しないで」

彼のその瞳も、白い肌も、香りも、甘く低い声も、細身でいて鍛えられた身体も、彼の体内を流れる血液さえも、全てが狂おしく、愛おしい。

彼が手に入るのなら、どんな罪を背負ったって構わない。心から、彼が欲しい。

「……エル」

彼の腕が腰に回り、私が欲するその声で、私の名が呼ばれる。

熱の籠った声は、私の脳をどろどろに溶かしてしまいそうな程に甘い。

「……俺が、傍に居るから」

耳を伝う声、言葉。彼の手が項うなじに触れ、こつりと額が合わさる。

合わさった額から彼の体温が僅かに伝わり、吐息が触れ合う距離にくらりと眩暈がした。

彼のその言葉に、期待してしまっても良いのだろうか。彼を望んでも、良いのだろうか。

ゆつくりと近づく顔に、ぎこちなくも瞳を閉じる。

触れたかったその唇が、自身の唇に重なるまであと少し。

——だが、その望みが叶う事は無かった。

瞳を閉じていても分かる程の、強い閃光。緑掛かった、白い光の中に混じる赤色。そして数秒遅れて鳴った、爆発音にも似た雷鳴。

地震かと錯覚する程の地響きと耳をも劈つんざく雷鳴に、慌てて瞳を開いた。

「——なっ……なに……」

近くに落雷したという事は、瞬時に理解が出来た。だが、私が最も理解出来なかつたのは現在のこの状況。

私は今、一体何をしようとしていたのか。

思わず彼の胸を両手で勢い良く突き、彼の膝の上から飛び退いた。

「や、やだ……私、こんな……はしたない事を……」

先程迄の甘い時間は、まるで夢の中の出来事のように記憶にぼんやりと残っている。だが、それは夢などでは無く、紛れも無い現実であり、消える事の無い事実である。

彼が私を抱き寄せたのも、顔を近づけたのも、唇が触れそうになったのも、全てトラウマが見せた幻覚か。彼に恋焦がれるあまり、願望を現実だと思い込んでしまっているのだろうか。

そう勘繰ってしまう程には、彼の行動も、今起こった事も理解が出来ない。

「——期待なんて、しちゃだめ」

期待すればする程、傷が深くなる。

今迄沢山の恋愛小説を読んできたが、どの話でも、男性の言葉に期待しては落とされ、その都度女性は深く傷ついていた。

今の私達は、ただの同居人。その関係が一番幸せだ。間違っても、彼と恋仲にな

りたいたなんて望んではいけない。

彼は私を屋敷から攫さらつてくれた。それだけで充分じゃないか。

特別な関係が築けなくても、このまま彼と共に過ごしてゆければそれでいい。

——それは心からの願望の筈なのに。

まるで自分のそんな浅はかな願いを咎める様に、幼い頃、チェストを叩いた時の痛みが手に走った。

XIX Sleepless night

昔、屋敷の書齋ライブラリーで読んだ本。

とある屋敷に勤める使用人の少女達が、屋敷の当主である男性に想いを馳せる恋愛小説だ。話の結末こそ覚えてないものの、私はその本で初めて「恋」と言うものを知った。

だが、私は本の中でしか恋を知る事は出来ない。社交界で殿方に見初みそめられよう

と、どれだけ容姿を褒められようと、少女達の様に恋に焦がれる事は無かった。

物語の中の少女達は、とても苦しく、つらそうだった。

想い人の声を聞くだけで胸が高鳴り、自然と姿を目で追い、自分では無い別の女性と親しげに会話をしているだけで、気が狂いそうな程傷心する。そして時には、叶わぬ恋だと悟り一人涙を零したりなど。

そんな彼女達を本越しに見ながら、そんなにつらいのなら、苦しいのなら、恋などやめてしまえばいいのにと思っていた。好きで居る事をやめてしまえば、もう傷心する事は無いのにと。

半分程開いたカーテンから、街灯の光が差し込む。その光に照らされたあどけなさの残る寝顔を見つめながら、小さく溜息を吐いた。

——恋を知った今なら、彼女達の気持ちが良い分かる。

恋心など、一度自覚してしまえばもう手放せない。

どれだけ期待してはいけないと思っても、どれだけ好きになるのをやめようとしても、恋慕の情は募^つっていく。

抱きしめられた感触、掌の熱、そして、嵐の夜の触れそうな程に近づいた顔。どれも、忘れられない。思い出すだけで鼓動は高鳴り、それと同時に胸が張り裂けそ

うな程に痛む。

私はこの気持ちをも、きつとバルコニーで彼と出逢った時から持ち合わせていた。なのに今の今迄それに気付かなかつたのは、きつと気付かなかつたのでは無く、気付かないふりをしていたからだ。

屋敷で暮らして居た頃、何度も父と母に期待をしては裏切られた。その度に、何度も心を痛めた。

父も母も、私を見ていないと、もう交わる事は出来ないと、ずつと分かっていたのに、それでも私は期待をし続けた。

その所為だろうか。屋敷を出て自由になつた今、もうあの時の様に心を痛めながら生きてはいたくないと無意識に思う様になつた。

だからきつと私は、彼への気持ちに蓋をし続けた。この感情が何か分からない、なんて誤魔化しながら。

誕生日パーティーがあつたあの晩。バルコニーで、彼ではない別の男性が来ていたとしたら、私はその男性と屋敷を抜け出していたのだろうか。

その疑問の答えは、考えずとも直ぐに導き出すことが出来た。きつと、セドリックでは無い男性であれば私は屋敷から出ていない。恐らくその場を世間話でやり過

ごすか、一人ホールに戻っていた事だろう。

他でも無い彼だったから、私は全てを捨てる決断をした。彼と共にありたかったから、彼と共に、生きたかったから。

眠った彼は、普段の彼と少し違う。長い睫毛が際立ち、肌の色も白く、まるで精密に作られた美しいドールの様だ。

顔に掛かった長い前髪に指先で触れると、糸の様に細く柔らかな髪がさらりと額から滑り落ちた。

そのまま指先を少し下へずらし、規則正しい呼吸が繰り返される唇に触れさせる。あの晩、落雷が無ければ。私が彼の膝から退かなければ。彼との関係は、少し変わっていたのだろうか。

もしあの時、唇を重ねていれば、彼は私だけのものになっていたのだろうか。まるで女性の物の様に触り心地の良い、彼の唇を指先でなぞりながらぼんやりと考える。

その唇を、白い肌を、美しい寝顔を、全て私のものにしてしまえたらどれだけ満たされるだろう。

吸い寄せられる様に、彼に顔を近づける。起こしてしまわぬ様に、そつと息を潜めて。

嵐が過ぎ去った後、私はどれだけ後悔しただろう。あのまま彼と口付けをしていれば良かったと、あのまま彼に縋って泣けば良かったと。

全てが過ぎてしまった今では、もうあの時と同じ事など出来やしない。「傍にいる」と言ってくれたその言葉を、確認する事すら出来やしないのだ。

瞳を閉じ、その寝息を飲み込む様に唇を近づける。ずっと欲していたそれを、此処で奪ってしまおうと。

——だが、あの晩と同じく、唇が重なる直前で自身の身体は止まった。

自身を止めたのは、激しい胸の痛み。閉じた瞳を開き、そつと彼から離れる。

眠っている彼に口付けをしたところで、私の心は満たされない。寧ろ、今よりずっと虚しくなるだけだ。

罪悪感に駆られて、きつとこれから先彼と顔を合わせる事すら苦しくなるだろう。小さな溜息を吐き、彼の隣にごろりと寝転んだ。

口付けは出来なくとも、せめて手だけは握っていたいと、眠った彼の掌に自身の掌を重ね合わせた。そして指を絡め、祈る様に彼に想いを馳せる。

——これから先、彼に少しでも良く思つて貰える様に、出来る限り笑顔でいよう。辛い顔を、苦しい顔を、彼にだけは見せたくない。それに、きつとそんな顔を見せてしまえば私自身が耐えられなくなってしまう。こうして同じ家で過ごし、同じベッドで眠っている事すらも、だ。

彼との関係を壊さない為にも、私は良い「同居人」を演じなければならぬ。私
がそれを上手く熟せば、彼だつてこれから先も私の傍に居てくれるかもしれない。
今私がすべき事はそれだけだ。早く眠つてしまおうと、瞳を閉じた。

——ふと、脳裏を過つたとある事実。

嵐の夜思い出した、幼少期の事。あの時父は、仕事部屋で使用人の女性と情を交わしていた。

父は、その使用人を愛していたのだろうか。

父が使用人と、その様な行為に及んでいるのを目撃したのは一度だけ。

だが、父には妻である母が居り、使用人との性交渉は不貞行為に値するのではないだろうか。幾らその使用人を愛していようと、その様な行為に及ぶことは許される事では無い筈だ。

母は、父の不貞行為を認知しているのだろうか。

抑々、父と母は愛し合っていたのだろうか。

母は父に、盲目的な愛情を向けている様に思えた。だが、父はそれに応じていたか。少しでも母を気遣ったり、想ったりする素振りを見せた事はあったか。

どれだけ記憶を巡らせても、思い出せない。

私の誕生日パーティーで、キースが私に放った言葉。

——『何があっても妻は夫の言いなりになるべきだと思うんだ。夫の望む女になり、常に夫を支え、悦ばせ、そして時に暴力を振るわれても笑顔で耐え抜き、夫の指図であれば別の男とも身体の関係を結ぶ』

その言葉に、私は衝撃を受けた。この男と、共に居てはいけないと本能的に感じ取った。

だが、それが貴族社会では「当たり前」なのだとしたら？

父は気に入った使用人と不貞行為に及び、母を愛してはいなかった。

母が父の言いなりであったのも、そう考えれば全て納得がいく。

背筋に冷汗が伝い、全身から血の気が引いていくのを感じる。

私が読んできた恋愛小説には、その様な描写は無かった。だが、事実は小説より

も奇なり、貴族社会での夫婦関係は、それが普通なのかもしれない。

そう考えれば、母も被害者だと呼べるだろう。

母の身体が弱かったのも、まるで洗脳のように「私達は幸せだ」と繰り返した続けたのも、全ては父の所為だ。

モリスから聞いた話だと、母は元々病弱な人では無かったらしい。だが私が産まれ、日が経つにつれて身体を壊す事が増えていったのだと。

父が母を愛さなかったから、父が使用人との不貞行為を繰り返していたから、母は心を痛めるあまり身体を壊してしまった。

もつと、早くこの事実が気が付いていれば、私は母を救う事が出来たのだろうか。母の気持ちに寄り添う事が出来たのだろうか。

ズキズキと胸は痛み、瞳に涙が浮かぶ。

私はそんな母の事も知らず、身勝手な理由で屋敷を出てしまった。母はそんな私を、我儘だと、悪い子だと思っただろうか。自分も外に出たいと、羨んだだろうか。

それとも、自分だけ幸せになろうなんて、妬んだだろうか。

浮かんだ涙は零れ、頬を伝い枕にシミを作っていく。

それに私は、母だけでなく優しいメアリーの事も一人にしてしまった。

メアリーはいつの日か、私に「逃げてしましましょう」と提案してくれた。あの時の彼女の言葉に、嘘偽りは無かった筈だ。

彼女は私を深く思ってくれていた。常に私を気遣い、婚約の時ですら、私の幸せを考えてくれていた。

——だが。

突如、金槌かなづちで打たれた様な、痛みを伴ともなう動悸に襲われる。そしてそれと共に思い出したのは、キースとの正式な婚約が決まった日の事。

熱を出した私はメアリーから絵を貰い、幼少期に画家に描いて貰った絵を見る為に黙って父の仕事部屋へと入った。

その時、仕事部屋に入ってきたのは紛れも無くあのメアリーだった。

彼女は迷うこと無くベッドへと向かい、そして彼女がベッドの中から見つけ出したのはサファイアのピアス。

それは実母と片耳ずつ持っていると言っていた大切な物の筈。

何故、それが父のベッドの中にあっただのか。

あの時、私は様々な事を考えた。父とメアリーは、不貞行為にあるのではないかと。だが、そんな事実信じたくなかった。

きつとまぐれだろうと、きつと何らかの事情で仕事部屋に呼び出され、その際落としてしまったのだろうと、無理矢理結論付けた。

だが、もし本当にメアリーが父と不貞行為にあったとしたら？

メアリーは昔、慕っている相手が居ると私に言っていた。その相手は、一体誰だったのだろうか。

屋敷の庭師がメアリーに想いを寄せていると噂で聞いた時から、私は庭師の彼とメアリーが結ばれて欲しいと密かに思っていた。

メアリーから慕っている相手が居ると聞いた時、心の何処かでそれは庭師の事なのでは無いかとも思った。

だがもし、その慕っている相手というのが私の父だったとしたら。

私と共に逃げようと提案した事が、父への想いを断ち切る為の物なのだとしたら。父は階級制度に厳しく、労働者階級の使用人を動く道具としてしか見ていなかった。それに父には妻子がおり、エインズワース家の当主である。

そんな父に恋心を抱いた所で、報われる筈が無いのだ。

メアリーも、あの本の少女達のように父を想っていたのだとしたら。

自身の想いを断ち切る事と、私を苦しみから救い出す事、二つの目的の為逃げ出

す提案をしてもおかしくはない。

僅かに違和感に残るものの、今はその考えが一番辻褄が合う様に思えた。

——何でも言い合える仲であったメアリー。

しかし彼女にとつて、私は何でも言える相手では無かったのかもしれない。

心臓は早鐘を打ち、頭の中は複雑な思考で絡まっていく。

だが一つ分かった事があるとしたら、エインズワース家は私の知らない事で埋め尽くされているのだという事だった。

XX Riley

気温が落ち着き、薄着でも外出が出来る様になった七月。夏を感じる温かな風が首筋を撫でる中、のんびりと一人街を歩く。

この街へ来て、早三カ月。街への買い出しにも慣れ、街の人達とも親しくなり、充実した毎日を送っていた。

そんな私にとって、最早日課となっている事。それは、買い出しの帰りにライリーの店に寄る事だ。

彼女は、私がセドリックと共に暮らしている事を知る数少ない人物。最初は同居を訝いぶかしんでいたものの、今ではすっかりと仲良くなり、色々な相談に乗り合う仲間になった。

今日も買った食材を手に抱えながら、ふらりと彼女の店に立ち寄る。

「こんにちは、ライリーさん」

商品台の向こう側で退屈そうにしていた彼女——ライリーに声を掛けると、その表情は花の咲いた様な笑顔に変わった。

「待ってたよ、エルちゃん。この時間は客が来なくて暇でね、いつも来てくれて本当に助かってるよ」

「あら、嬉しいわ。迷惑になっていないか心配だったの」

「またそんな事言って。迷惑じゃないっていつも言ってるだろう」

彼女と軽い会話を交わし、商品台の上に置かれたお目当てであるロケットペンダントを手取る。

それは、初めてセドリックと共にこの街へ来た時に一目惚れをした物だ。もう三

カ月前の事になるが、未だにそのペンダントには心を奪われたまま。

傷一つ無く、光が当たる度にきらきらと輝くそれは、何度見ても芸術品の様に美しい。

「綺麗ね……」

思わず漏らした言葉に、ライリーが屈託無く笑った。

「やっぱり、他のアクセサリーには興味ないかい？」

「興味が無い訳では無いの。どれもとっても素敵よ。でも、どうしてもこれが綺麗で……」

私の言葉に、再び彼女が笑う。

彼女が言うには、相変わらずこのペンダントは「可愛くない」という理由で他の客からは好まれないらしい。中には、他の可愛らしいアクセサリーと並ぶに相応しくないとまで言う客も居るのだとか。

本来なら、人気の無いアクセサリーは撤去を考えるそうだが、私が特別気に入っているという理由で撤去せず、ずっと此処に並べておいてくれているらしい。

そんな彼女の心遣いに応じて、私もこのペンダントを購入したいとは思っている。気に入った物は、出来る事ならいつでも手に取る事が出来て、更には身に着けてい

たいとも思うものだろう。

だが如何せん、私には自由になるお金が無い。

セドリックには、あまり高価な物でなければ気に入った物は買っていていいと言われる。しかし、自分の私欲にお金を使う勇氣など少しも無かった。

その為、ライリーには申し訳無いが、毎日こうしてお店に寄つてはペンダントを眺めさせてもらっている。

「———そういえば、エルちゃんには話してなかったね。そのロケットの話」

「……ロケットの、話？」

不意に投げられた言葉に、思わず鸚鵡返しに尋ねる。

「ああ、そのロケットが作られた教会の話だ。エルちゃんなら興味示してくれるんじゃないかと思つてたんだが、どうだい？ 聞いてくか？」

初めてこの店に来た時、彼女はこの店で売られているアクセサリーを「手作りの物もあれば、仕入れている物もある」と言っていた。

それからずっと、このロケットペンダントが何処でどの様に作られたものなのか気がなっていたのだが、どうやら彼女は相当暇だったらしい。私が返事をする前

に、商品台の上に大きな布を掛けた。

「少し長くなるからね。碌な物出してやれないけど、中で聞いていきな」

私に、拒否をする選択肢は無い様だ。

彼女が背後の壁に埋め込まれていた木製の扉を開き、私を中へと手招いた。

ライリーに促されるまま足を踏み入れた先は、彼女の居住スペースであろう場所だが、私とセドリックが共に暮らす家よりも内装は殺風景で、あまり裕福では無い事が伺える。

こうして見ていると、改めて自分達は恵まれた暮らしをしているのだと実感した。セドリックが階級に見合った暮らしをしていない事は分かっていたが、いざ労働者階級の暮らしを目の当たりにすると心が痛む。

「そこから辺、空いてる所に適当に座つといてくれ。今お茶淹れるから」

「あ、あの、本当に御構い無く……」

キッチンコンロの前でお茶の用意をするライリーを尻目に、こつそりと家の中を見渡す。

綺麗に掃除こそされているものの、窓に掛けられているカーテンは古びた物で、木を組んだだけの塗装のされていないテーブルは立て付けが悪く、触れる度にガタ

ガタと揺れていた。

そんな中目に留まったのは、木の棚に並べられた小さな彫刻の数々。動物や天使、子供などを象ったそれ等の物は、決して拙劣せつれつでは無く、貴族の家に置かれていてもおかしくは無い出来栄えの物ばかりだ。彼女のコレクションだろうか。

棚に近づき、前屈みになって彫刻を見つめる。

「——ああそれ、うちの旦那が作ったんだ」

私が棚を見ている事に気付いたライリーが、沸いた湯をポットに注ぎながら告げた。

「本職が彫刻家だね。お偉い貴族様にも高く買われてる、ちよつと凄い人なんだよ」
「そうなの、凄いわね……」

屋敷にも、美しい彫刻は沢山あった。今迄考えた事は無かったが、屋敷にあった彫刻像達も彼女達の様な人が作っていたのだろうか。

大変興味深い話ではあるが、当然屋敷の話題を出す事は出来ず、そのまま口を噤み手近な場所にあった木の椅子に腰掛けた。

「私も、旦那から色々教えてもらってはいるんだけど、本職にするにはまだまだだね。それで、時々作った物をアクセサリーにして売ったりしてるんだよ」

椅子に腰を掛けたのとほぼ同時に、彼女が熱い紅茶の注がれたカップを私に手渡した。それを落とさない様に慎重に受け取り、カップに視線を落とす。

欠けや罅ひびこそ無いものの、そのカップも随分と古びた物だ。長年使い込んだ物なのだという事が見て取れる。

ついうっかり割ってしまわぬ様しっかりとカップを握り、そつと紅茶に口を付けた。

「エルちゃん、彫刻に興味は？」

「——えっと、無い訳では無いのだけど、知識は全く……」

「そうかい、じゃあ今度暇な時にでも、旦那のアトリエ見に来てくれよ。旦那は……：そうだね、その、人付き合いが得意なタイプでは無いけど、きつと歓迎してくれる筈だ。私達の階級じゃ、彫刻を見る機会なんて殆ど無いだろう。大半が失敗作だけど、きつと楽しめると思うよ」

「——そうね。では、今度お邪魔させて頂こうかしら」

彼女の言葉に、ちくりと胸が痛む。

私は屋敷暮らしの元お嬢様であり、様々な彫刻や石膏像を目にしてきた。故に、彫刻は見慣れている。

その所為か、なんだか彼女を騙している様な気分おどろに陥り、思わず彼女の顔から視線を逸らした。

「ああ、そうだ。ロケットペンダントの話だったね。ごめんよ、つい脱線してしま
って」

「大丈夫よ。彫刻は見る機会が少ないから……、こうしてお話を聞けるのは嬉しい
わ」

自然と、声が震える。

嘘をつくのは苦手だ。特に、この様な場所では。

社交界では、罪悪感を抱く暇など無い位にお世辞を口にしていたというのに。

「ペンダントのお話、聞かせて貰えるかしら」

罪悪感に堪えられず、早く話題を変えてしまおうと話の先を促した。

彼女も私と同じ様に近くの椅子に腰掛け、ゆったりと足を組み紅茶を啜る。

こうしてみると、彼女はとても美しい女性だ。背も高く、スタイルも良く、つい見惚れてしまう。それに加えて、常に笑顔で明るい人だ。街での知名度が高く、彼女の名を出せば誰しもが笑顔になるといいうのも納得がいく。

それに比べて私は、一般的に見ても背は低い方で、更には細身というだけでスタ

イルが良い訳では無い。私ももう少し背が高く、胸も大きい魅力的な女性だったら、セドリックとの関係も少しは進展したのだろうか。

そんな事をぼんやりと考えながらライリーを見つめていると、彼女が徐おもじろに口を開いた。

「期待する程面白い話では無いんだがね、まあその、私の暇潰しに付き合う位の感覚で聞いてくれよ」

苦笑いを浮かべるライリーに、思わずふふ、と笑みを零し頷く。

「構わないわ。どんな話でも、あのペンダントに興味がある事には変わらないから」
「そうかい、半ば無理矢理家に入れちゃったけど、そういつて貰えて良かったよ。じゃあ、遠慮なく」

足を組み替え小さく息を吐いた彼女が、ゆつくりと優しい笑みを浮かべながら話し始めた。

「隣街に、大きな教会があるんだ。孤児院と並立してる、聖グロリアスガーデン教会、知ってるかい？」

彼女の問いに、黙って首を振る。

私は屋敷からあまり出た事が無かった為、近隣の街の事であったとしても殆ど知

識は無い。教会だって、本では読んだことがあるが、実際出向いた事は無かった。「そうかそうか、隣街っていつても田舎に近く、人口も少ない街だからね。幾ら大きい教会と言えど、知らないのも無理は無い。あのロケットペンダントはね、その教会で作られた物なんだよ。孤児院の他に、金属アクセサリーを作ってるアトリエもあるらしく、そこで作った物に、教会で特別な祈りを込めているらしい」

「そうだったのね。とても興味深いわ」

「ふふ、エルちゃんならそう言ってくれると思ってたよ。私の古い友人がその教会でシスターをやっていて、その伝手で私の店に、祈りを込めたアクセサリーを置いてやってるんだ」

ライリーの顔に、笑みが浮かぶ。楽しげに話す今の彼女を見ると、その友人と教会の事を大切にしているのだという事が伝わってきた。

「シスターの御友人がいるなんて、素敵ね」

「ああ、元々この街に住んでいたんだけどね。家庭の都合でもんで隣町に引っ越して、それからその教会でシスターとして子供の面倒を見ているらしい。あいつは昔から、過度な位に優しいやつだね。特に子供が好きで、シスターは天職だなんて言ってたよ」

彼女がふわりと目を細め、今迄で一番優しい笑顔を見せた。そして照れ隠しでもする様に、カップに口を付け勢い良く紅茶を啜る。

だが、ふとそんな彼女の顔に影が落ちた。

「でもあいつ、数年前から悩んでるみたいでさ。時々手紙が来るんだけど、もう何年もその悩みばかり書かれていて……心配なんだ」

「……悩み？」

「……あぁごめんよ、ペンダントの話をしてたのに……」

「いいのよ。私はこうして、話を聞く事しか出来ないけれど……。ライリーさんさえ良ければ、そのお話を聞かせて頂けないかしら」

初めて見た彼女の暗い顔。今迄彼女から元気を貰っていた分、彼女に少しでも不安があるのなら力になりたい。

そう思い、揺らぐライリーの瞳を見つめると、彼女は悲しげに笑った。

「……じゃあ、お言葉に甘えて少し話させてもらおうかな」

彼女が空になったのである。カップをテーブルに起き、小さく咳払いをした。そして少し言い淀む様に「何処から話そうか」なんて言いながら、ぼつりぼつりと言葉を紡ぎ始める。

「……あいつ、教会ではシスターセシリアなんて周りから呼ばれて、孤児院の子供からも大層好かれてたみたいなんだ。だけど。八年位前……になるかな。身元不明の女から、赤子を預かって欲しいって言われたらしくって。あいつお人好しだからさ、そのままその赤子を預かったんだよ。でも、その女が子供を迎えに来ることは無かったんだ……」

「——そう……」

世の中には、生活苦が原因で子供を育てられない親が多くいるらしい。それがきっかけで、子供を孤児院の前に捨ててしまう親も、少なくないのだとか。

ライリーの友人、シスターセシリアに赤子を預けた女性も、そのような親の一人だったのだろうか。その女性を知らないだけに断定をする事は出来ないが、シスターセシリアが慕われていた人物なら、子供の幸せを少しでも願う彼女に預けようとしたのかも知れない。

「……でも、その赤子はどうやら普通じゃなかった様で、聞くに左右の瞳の色が違ったそうだ」

「瞳の色が……?」

「ああ、普通じゃ考えられないだろう。左右の瞳の色が違うだなんて、不気味だよ。」

だが、医者が言うには生まれつきの疾患だそうで、左右の瞳の色が違う事は決しておかしい事では無いらしい。でも周りが、それを受け入れなかった様でね。その赤子が大きくなって、孤児院の子供達と対面させた時、子供達はその赤子を「悪魔の子」、「呪われた子」だと言って忌み嫌ったそうだ。病気だと言っても、誰も聞く耳を持たなかったらしい」

「そんな……！」

確かに、左右の瞳の色が違う人間など見た事が無い。幾ら医者の言う事であつても、気味が悪く感じてしまう事もあるかもしれない。

だがそれを、悪魔の子と罵るなんてあんまりだ。素直故の言葉なのだろうが、子供は良くも悪くも物事とはつきりと口にする為、時に人を深く傷つける。

それまでその赤子を見ていたシスターセシリアにとっては、きつと自分に向けられた物の様につらく感じただろう。

「……その赤子、確か名前はイヴって言ったかな。今年で八つになるそうだが、未だに孤児院や教会には馴染めず、周りの子供からの虐めは続いているらしい。それに、セシリア以外のシスターもイヴの瞳に理解が無く、子供の虐めを放任したり、怪我を負ったイヴを放置したりする事も多い様だ」

「……酷い」

彼女の言葉に、ずきりと胸が痛む。

瞳の色が違うのも、決してその赤子——イヴが悪い訳では無い。

八つともなれば人格はある程度形成され、その虐めや周りからの言葉も認識できる年齢であろう。イヴは今、どんな思いでその虐めに堪えているのだろうか。考えるだけで、心が重くなる。

「悪いね、こんな話に付き合わせちまって」

「いいのよ。……その、彼女からはまだ手紙は届くの？」

「セシリアからかい？ ああ、月に一度位の間隔で、手紙は届くよ。書かれています。事は、イヴの事ばかりだけどね。あいつが居る教会は、馬車を使えば二十分程で行ける場所だ。本当なら、少し顔でも見に教会に行きたいところなんだけど……、店の事があるし、旦那も居るしで難しくて」

誤魔化す様に笑った彼女の顔は、まだ何処か寂しげだ。

人間である以上、悩みは尽きない。それは分かっている。

だがいつも優しく、太陽の様な人だった彼女に、そんな寂しげな顔はして欲しくない。どうにか彼女の心を癒す事は出来ないかと頭を悩ませるが、それを遮る様に

ライリーが言葉が続けた。

「そろそろペンダントの話に戻ろうか」

気が付けば、彼女の顔にはいつも通りの笑顔が戻っていた。無理して笑っているのか、心からのものなのかは分からない。だが、自分に何も出来なかったのは事実だ。

口惜しく思いながらも、今の自分に出来る事はもう無い。黙って彼女の言葉に頷いた。

「アクセサリーには祈りが込められてるって言っただろ？ 込められた祈りは、アクセサリーによって違くてね。あのロケットペンダントには、所謂縁結びいむゆゑの祈りが込められてんだ」

「……縁、結び？」

「ああ、ロケットの蓋裏に男の名前と女の名前を刻印して、プロポーズと共に贈ればその二人は幸せになれると。まあセシリアが言うには、神の御加護が付くんだと。信じるかはその人次第だがね」

ライリーがふふ、と意味深な笑みを浮かべ、椅子から腰を上げた。手で押さえ腰を伸ばしつつ、ポットに残っていたのであろう紅茶をテーブルのカップに注ぎ足す。

「素敵ね」

彼女に釣られる様に、手に持っていたカップを口へと運ぶ。少し温くなった紅茶で口内を潤してからそんな言葉を漏らすと、ライリーが再び含み笑いを浮かべた。

「セドリックも、早く買ってやればいいのにねえ」

「——！」

彼女の言葉に、思わずびくりと肩を揺らす。

彼に、ペンダントを買ってもらうなんて選択肢は自身の中に少しも無かった。

更にはその祈りの話を聞いた後だ。尚更買って貰おうだなんて思えない。

「……セドリックとは、そういう仲じゃないの」

再び紅茶を口に含み、彼女に気付かれない様小さく息を吐く。

私がどれだけ彼との関係を望んでも、彼はきつとそんな事望んでいない。

確かに、関係を築かずずっとこのままで良いと言えば嘘になるが、それでも下手にギクシヤクする位なら今のままを続ける方が余程マシだ。

だが自身の心までは騙せなかった様で、そう思えば思う程胸は痛む一方だった。「でもエルちゃん、セドリックの事愛してるんだろ？」

核心を突く彼女の言葉に、心が深く抉られる。

「彼を愛してる」

そう口にする事が出来れば、私はこれ程心を痛めたりなんてしていない。

口をきつく結び、彼女の問いに小さく頷く。

私が幾ら彼を愛しているようと、彼は私を愛していない。気を遣ってくれる事も多く、些細な変化に気付いてくれることも多い。だが、それは私と同じ「愛」じゃない。

勿論彼本人から聞いた訳ではない為、そう決めつけてしまうのは早計かもしれない。しかし、昔屋敷で読んだ本には「恋とは相手の視界に映ろうと必死になるもの」と書いてあった。私は彼の視界に少しでも映ろうと必死に生きているが、彼は決して私に必死になつたりなどしない。キースから助けてくれた時だって、彼が心配していたのは私では無く、自分の立場だ。

彼は両親の様な人間では無い。そう分かっている、その不安感はどうしても拭いきれなかった。

「——ごめんね、エルちゃん。そんな顔をさせるつもりは無かったんだ」

静かな部屋に響いた、ライリーの困惑の滲む声。

知らぬ間に不安が顔に出てしまっていた事に気付き、ぱっと顔を上げた。

「大丈夫よ、此方こそごめんなさいね」

無理矢理顔に笑みを作り、カップの中身の紅茶を全て喉奥へと流し込む。そして椅子から立ち上がり、空のカップを彼女に手渡した。

「私は、此処で失礼するわ。素敵な話を聞かせてくれてありがとう」

逃げる様に玄関扉まで足を向け、ドアノブに手を掛け振り返る。

彼女の顔には先程と同じ、寂しげな、何処か不安げな表情が浮かんでいた。

「ああ、またいつでもおいで」

だが彼女はそれ以上詮索する事は無く、儂げな笑みを見せひらりと私に手を振った。

XXI That figure that overlaps with me

食材の買い出しを終え、夕飯の支度も終え、更には掃除も洗濯も終えた午後。もはや食傷^{しよくしよく}気味となつてしまった読書を止め、ぱたりと本を閉じた。

この家に来てから、随分と自分の性格や趣味が変わった様に思える。一日三度の食事よりも身体を動かす家事を好み、あれだけ何時間も没頭していた読書も、今や本を手取る事自体が減ってしまった。

その変化が良い事なのか悪い事なのかは分からないが、それでも大好きだった読書を倦み始めてしまっている事には少々の寂しさを感じる。

指先を組んだ手を天井に向け、ゆつくりと身体を伸ばしながら時計に視線を向けた。

現時刻は十五時半。何をするのにも中途半端な時間だ。凝り固まった身体からポキポキと音が鳴るのを聞きながら、小さく息を吐く。

月日の流れは早い。ついこの前夏を迎えたばかりだというのに、気が付けばその夏はもう終わりに差し掛かっていた。

窓から流れ込む風は、心地良く感じるものの少々肌寒くも感じる。これから徐々に気温が下がり、夏が恋しくなる程の寒さが訪れるのかと思うと、今から少し憂鬱だった。

だが今の私にとっては、冬の全てが憂鬱な訳では無い。時計から目を離し、次に視線を向けた先は玄関に置かれたコートラック。そこに

は、今朝卸したばかりのグリーンのスツールが掛けられていた。

それは数週間前、セドリックが私に贈ってくれたものだ。

少しの風位なら遮ってしまえる程厚手で、冬を迎える前の今の時期に丁度いい物である。

彼は相変わらず、此処に来た当時と同じ様に「マーシャに用意させた」と言っていた。だが、この前家に遊びに来てくれたマーシャはそのスツールの存在を認識していなかった。

どれだけ彼に尋ねてみても、「マーシャに用意をさせた」の一点張りで、結局真相は分からず終い。だがきっと、寒さを少しでも凌ぐためにと彼が買って来てくれた物なのだろう。それが何よりも嬉しくて、ずっとそのスツールが使える気温になる日を心待ちにしていた。

そして今日、やっと肌寒さを感じる気温になり、気持ちを浮かせながらもそのスツールを卸した。

私が身に着けている服は全て、セドリックに与えられたものだ。だがそのスツールは今迄と違って、何処か特別な物の様な気がした。

テーブルに手を突いて立ち上がり、ふらりとコートラックへと寄る。

やはり、そのストールはとても魅力的だ。肌触りの良いそれを撫で、そつとラックから外した。

今日はこのストールを使う為に、わざわざ色合いの合うワンピースを選んだ。そして勿論街への買い出しにはこのストールを身に着けて行ったが、なんだか少しそれだけでは物足りなく感じる。

——このストールを羽織って、散歩にでも行こうか。

中途半端な時間ではあるものの、まだセドリックが帰宅するまで時間がある。

それに、色々な店が並ぶ街の中核はある程度把握しているが、この街の住宅街、つまりこの家の周辺については一切把握をしていなかった。

それは今すぐでなくても問題は無いが、折角こうして時間を余らせているのだ。そしてこのストールを羽織って散歩に行きたいという願望もある。

それなら今日、探索がてら住宅街を巡りに行くべきだろう。

こうしている間にも、どんどん時間は過ぎていく。家の中に居れば時間の経過は遅く感じるが、外に出ればあっという間だ。

足早に家中の戸締りを確認し、ストールを羽織って玄関扉を開いた。

*

ストール越しに感じる風は、少々肌寒く感じるものの柔らかく心地が良い。住宅街という事もあり、人通りも疎^{まば}らで散歩をするには最適だ。

屋敷を抜け出してからもうすぐ半年が経つが、キースと街で出会った事以外には何も無い。両親が、私の存在を探していない事も分かった。

両親は、私を恨んでいるだろうか。それとも、もう忘れてしまっただろうか。どちらにせよ、私は二人を裏切ってしまった立場の人間だ。どんな事があるかと、私が両親を、あの家を恨む事は出来ない。

ぼんやりと屋敷に居た頃の事を思い出しながら、住宅街の奥地へと進んでいく。所々に張られたロープには服やタオルなどの洗濯物が干され、路地裏では小さな子供達が楽しそうに遊んでいる。

セドリックや私の暮らしに比べたら貧相な暮らしをしている人達が多いが、それでも私の瞳には彼等がとても幸せそうに映っていた。

それ等を見ていると自然と笑みが溢れ、頭の中を回っていた屋敷での記憶も薄れていく。

そんな中、ふと視界に映った黒い影。

進んだ足を数歩後ろに戻し、影が見えた方向に目を向ける。

そこは、建物と建物の間に来た細い隙間。主に、家庭ゴミなどが詰まれている場所だ。だが確かに、その中に大きな影の様な「物体」が揺れていた。

普段なら、気にも留めず素通りしてしまう事だろう。だが何故だか、今はそれが猛烈に気になった。少々悩んだ結果、その隙間へと足を向ける。

人が一人通れる位の隙間しか無いこの場所は仄暗く、更にはゴミの臭いが立ち上っていて住宅街の穏やかな空気とは大きく異なっている。

卸したばかりの大切なストールに、臭いが移ってしまったら大変だ。一瞬、その物体を確かめずに来た道に戻ろうかとも考える。

だがそれでも、その物体への興味が失せる事は無かった。止めかけた足を再び動かし、奥の方へと進んでいく。

そして漸く辿り着いた物体の前。薄汚れた布が被せられたそれは、先程の様に動いていない。

私の、見間違いだっただのだろうか。それとも、猫などの動物がゴミを漁っていた際にそれが動いて見えただけか。

どっち道、その布を取ってみないと分からない。少々の恐怖心を抱きながらも、その布に手を伸ばした。

「——あっ！」

手が布に触れる直前、突如強い風が吹き抜けた。

その拍子に大きく捲れ上がった布。

目に入った布の下の正体に思わず声を上げてしまい、慌てて口を塞ぐ。

物体の正体は、私と然程歳の変わらない女性——の様な何か。

所々汚れているもののその肌は白く、閉じられた瞳から生える睫毛は長く美しい。微動だにしないその女性は、まるで人形ドールの様だ。とても息をした人間には見えず、思わずそれに顔を近づける。

「——何？」

その場に響いた、少し高めの女性の声。自身の動作がぴたりと止まる。

まるで彫刻の様なその女性の瞳がゆっくりと開き、覗かせたのは美しいヘーゼルの瞳。

「——死体、だと思った？」

私の姿を捉え、彼女がきつい口調で吐き捨てる様に言った。その問いに答えられ

ず口籠ると、彼女が自嘲気味に笑う。

「おねーさん、綺麗な服着てんね。結構いい暮らししてるんじゃない？」
「またもや、その問いに答えられず口籠る。」

この街に来て、路上生活者を沢山見てきた。ある者は大道芸をして小銭を稼ぎ、ある者は人助けや手伝いをしてお駄賃を貰い、ある者は盗みを働く。やり方は違えど、皆共通して今を生きる事に必死だった。

なのに、目の前の彼女は違う。生きる事を何処か諦めた様な顔で、ごみ溜めの中でひっそりと膝を抱えていた。

「……何か、あったの？」

彼女の隣にしゃがみ込み、返答の代わりにもならない問いを投げ掛ける。

路上生活者に自ら話し掛け、その気持ちに寄り添おうとする人間など居ないだろう。金を恵む事も、仕事を与える事も、住む場所を用意する事も出来ない。それから、最初から関わらない方が良いに決まっている。徒に彼等の心や生活を引つ掻き回すなんて、偽善者よりも質が悪い。

だがそれでも、何故彼女はこんなにも諦観を感じさせる表情をしているのか、気になって仕方が無かった。

それはこの国を生きる人間の中で珍しいからか、それとも、いつかの自分に重なるからか。

良くない事だと思いつつも、それでも今の私は彼女を放っておくことが出来なかった。

「——大切な人に、裏切られたの」

吐き捨てる様に、再びきつい口調で紡がれた言葉。だがその語尾は僅かに震えていて、表情は切なげに歪む。

その姿を見て、瞬時に「大切な人」は彼女の恋人だという事が分かった。

「私、此処から離れた街で娼婦やったの。治安悪い街でさ、働き口とか当然無くて。客一人、一回五ペンス。パン一つ買う為に、身体を売って生きてた」

「——たったの、五ペンスで……？」

「この街なら、もう少し稼げたかもね。でも、この街に娼婦は要らない」

五ペンス。その金額を例えるなら、彼女が言ったようにパン一つ、もしくは林檎等の果物三つから四つ分程だろうか。

あとは一杯四ペンスで、安酒のジン・ホットが飲めるといふ話を街で聞いた事がある。動労者階級の中で、最も人気が高い酒なのだから。

たったの五ペンスでは、宿に一晩泊まる事も、充分にお腹を満たす事も出来ない。だというのに、彼女は五ペンスの為に、本来大切にすべき物である身体を売っていた。

誰もが羨むお屋敷暮らしをしていて、更にそこから抜け出した今もそれなりの暮らしをさせて貰っている私には、とても想像が出来ない世界だ。

「——その、"大切な人" っつのさ、元々は客だったんだよ」

何も言えず黙っていると、静かに彼女が言葉を続けた。

「その人、私がいつも居る場所に何回も来ては私を買ってくれて……。気に入ってくれてるのかな、なんて思ってたら、ある日突然その人から『僕の生活が安定したら、君を迎えに行きたい。だから待っていてくれ』なんて言われちゃって……。私そういうの、今迄言われた事無くって、馬鹿だからさ、本気にしちゃったんだよ。頑張ってくれてる彼の為にもって、私ご飯も充分に食わずに沢山客取ってお金貯めて……。それで、いつか本当に彼と結婚して幸せになれると思ってた。娼婦の私でも、幸せになっていいんだと思ってた……。」

同情か、それとも共感か。次第に小さくなっていく彼女の声と言葉に胸を痛めながら、ただ黙って彼女の話を傾ける。

それから、彼女は全てを私に話してくれた。恋人だと思っていた相手は、ただの身体目的だった事。必至に貯めた貯金を抱えてこの街に逃げてきた事。だがその貯金だけでは働きの口を見つける事も出来ず、上手く生き永らえる事も出来なかった事もう、自分には未来が無い事。こんな事になるなら、あの街で娼婦を続けている方が良かった事。それでも、こんな人生を送る位なら此処でこのまま死ぬ方が幸せだと感じていた事。

彼女の過去と、自身の過去は決して交わる事は無い。彼女の苦悩も、私の苦悩も、決して同じ事では無い。

だが何故だか彼女のその姿が、屋敷に居た頃の自分と重なる。重ねてしまつては彼女に失礼だと分かつていながらも、それでも心の何処かで自身と近い何かを感じていた。

「——あのね、私の知り合いに、ライリーさんっていう優しい女性が居るの」
全ては、この場の私の勝手な判断でしかない。きつと此処で名を出されたライリーも、迷惑に思う事だろう。

だがどうしても、彼女を放つておくことが出来なかつた。此処で彼女を放つてしまつたら、一生後悔すると、そんな予感がした。

「その人、この街の事に詳しいから、きっと力になってくれると思う」

ライリーが実際、彼女を助けてくれるかは分からない。追い返される可能性だつて大いにあり得る。

だが、ライリーはとても優しい女性だ。きっと話だけなら聞いてくれるのではないか。

そんな願いを込め、その場から立ち上がった。そして彼女に手を差し出す。

「その人の所に、行って見ない？」

彼女の怪訝な瞳が、刺さる様に自身に向けられる。相当警戒をされている様だ。それも当然だろう。突然そんな提案をされたのだから。

だが彼女は、差し出した私の手を見ながら諦めた様に溜息を吐いた。

「変な人ね」

パシ、と音を立て、彼女が私の手を叩く様に掴んだ。

その手を握り返し、強く引き上げ彼女を立ち上がらせる。

「貴女も、綺麗な服着ているじゃない」

薄汚れた布が落ち、現れたのはワインレッドのワンピース。胸元が大きく開いて露出は高いものの、愛らしいデザインだ。

「何それ、嫌味？」

彼女が吹き出す様に笑う。

返ってきたその反応は想像していたものとは違ったが、それでも今の彼女から悪意は感じられなかった。

彼女を導く様に手招きをし、建物の隙間から抜け出す。

開けた視界に、漸く感じられた済んだ空気。鼻から深く息を吸うと、何処からか甘い花の香りがした。

ストールや衣類にも臭いが移ったりはしていない様だ。こつそりとストールのニオイを嗅ぎ、まだ残った家の香りにはっと安堵の溜息を吐いた。

「大丈夫？ 此処からあまり遠い場所では無いけれど、歩けそう？」

建物の隙間から出てきた彼女に目を遣り、顔を覗き込みながら問う。すると彼女が、外の明るさが眩しいのか目を細めながら曖昧に頷いた。

こうして見ると、彼女はとても細身で綺麗な足腰をしている。踊りでも覚えれば、それだけで稼げそうな程だ。

裾の広がったドレスを着て舞う彼女の姿は、さぞ美しいのだろう。

「貴女、踊る事に興味は？」

途切れてしまった会話を繋ぐ様に、その話題を口にしてみる。

舞いに詳しくは無いけれど、社交ダンスなら屋敷で経験がある。残念ながら私には才能が無かったが、場を持たせるだけの会話なら出来る筈だ。

すると、先程からずっと無表情を貫いていた彼女の顔がぱっと明るくなった。

「踊りには自信がある。踊りはママが唯一褒めてくれたもので、もつと褒めて貰えるようにって練習したら周りからも褒めて貰えるようになったんだ。娼婦やつてたって言ったけど、中には私の踊り買ってくれた客も居たんだよ」

「そうなのね、なら、それも貴女の強みになるわ」

どうやら引いた話題は当たりだった様だ。すっかり気分を良くした彼女は、踊る事について嬉しそうに語る。

そんな彼女の顔からは、もう先程の様な諦観は消え去っていた。それに深く安堵しながら、二人並んで目的地を目指す。

彼女と他愛の無い会話を交わしながら住宅街を抜け、向かうのは街の中核。最初には彼女も会話に応じてくれていたものの、人通りが多くなるにつれてその口数は減り、そしてライリーの店が近くなった頃にはもう、彼女は私の後ろに隠れる様にし

て人目を避けて歩いていった。

そんな中、漸く見えたいつもの店。商品台の向こうに見える、退屈そうな顔。背後の彼女の手を握り、人を掻き分け足早に店の方へと向かう。

「——こんにちは、ライリーさん」

それは、数時間前にも口にした言葉。

「えっと……、お昼ぶりね」

私の姿に、ライリーが目を丸くする。だが直ぐに、何かを感じ取ったのか「嫌な予感がする」とその顔を歪めた。

ライリーの視線の先は私の背後に向けられている。それに釣られ振り返ると、先程の女性が私の背から顔を覗かせていた。

「この人が、言ってた人？」

「ええそうよ。この方がライリーさん」

彼女は随分と警戒心が強い様で、「ふうん」と相槌だけ打つと再び私の背に隠れてしまった。

此処までついて来てくれたという事は、彼女もそれなりに社交的なのだと思う。だがどうやら、決してそうでは無かったらしい。

自己紹介なども特にする様子は無く、私の背後から出てくる気配も無い。

困ったものだと思いつながらライリーに目を向けると、ライリーは言葉にし難い表情を浮かべ此方を見つめていた。

「エルちゃん、その子は？」

「……えっと、行く当てが無いそうぞ」

「つまり、拾ってきたと」

「……そう、とも言うわね」

「そうとしか言わんだろう」

ライリーが大きな溜息を吐いて、力強く商品台を叩いた。その拍子に、台に並んでいたアクセサリーがガタガタと揺れる。

台に手を突いてゆらりと立ち上がったライリーが、私と距離を詰めた。

「あのねエルちゃん、この国には、路頭に迷った人間なんて山程居るんだよ」

「……それは、分かっているわ。でも、どうしても放っておけなくて」

「だからってこうして拾ってきて、一体どうするつもりだ。エルちゃんも分かっているとと思うけど、うちにはその子を食わせる金は無いよ」

ライリーの言葉に言い負け、きつく口を結ぶ。

やはり、ライリーの名前を軽率に出すべきでは無かった。背後の女性を救いたいが為に、迂闊な行動を取ってしまったのは私の責任だ。

今更背後の彼女に「やっぱり駄目だった」なんて言う訳にはいかない。私も一緒に様々な店を回り、彼女と共に働きの口を探す他無いのだろうか。

そんな事を考えていると、ぼん、とライリーの手が頭に乗せられた。

「——と言つても、エルちゃんの気持ちは良く分かるよ。私も、昔はよく子供を拾つてきては親に怒られたもんさ」

「ライリーさんも？」

「ああ。それに、こうして人を拾ってくるのはエルちゃんだけじゃない。誰だつて、困つてる人を見つけりゃ力になつてやりたいと思ふものだよ」

ライリーの言葉が、じわりと胸に沁みる。

貴族社会では、誰かの力になるなんてものは無かった。全ては私欲の為であり、いかに他者を蹴落とすかしか考えていない、まるで地獄の様な場所だった。

彼女のその言葉こそが、私が本当に探し求めていたものだ。思わず涙が溢れだしそうになるのをぐつと堪え、小さく頷く。

「ほら、その背中に隠した子こつちに渡しな」

私の頭を一頻り撫でた後、ライリーが私の背を覗き込んだ。

「ふむ、随分と顔が整った娘だね。それに、スタイルも良い様だ。あんた、今迄どんな仕事してきたんだい」

「……娼婦」

「なら話は早いね。近くに、ここらで一番大きい酒場がある。その店の女達の中には、二階で客を取ってる子も居てね。あんた位の子だったら、あの店でも雇ってくれるだろう。仕事を覚えるのは大変だろうけど、生きていたいならそこで頑張んな」
ライリーの言葉に、女性がコクリと頷く。

「どうやら、事なきを得た様だ。私の身勝手な判断を、叱責しながらも受け入れてくれたライリーには感謝してもしきれない。」

「じゃあエルちゃん、この子は私が預かるから。今回だけだからね、もう拾ってくんじやないよ！」

「はい、お願いします」

ライリーに深々と頭を下げ、呆れた様に笑う彼女に微笑みを返した。

当初の予定より、大分遅くなってしまった。そろそろ家に帰らないと、セドリックが帰宅する時間に間に合わなくなってしまふ。

女性と会話を交わすライリーにぺこりと再び頭を下げ、足早に帰路へ着いた。

「——待って！」

突如背後から呼び止められ、家路を急ぐ足を止める。

振り返ると、先程の女性が何か言いたげな顔をして此方を見つめていた。

「いつかお礼したいから、名前教えて」

——お礼。

彼女の言葉を心の中で何度も繰り返し、ゆっくりとそれを理解する。

私の行動は、彼女の為になったのだろうか。生きる事を諦めていた彼女を無理矢理連れてきてしまったが、彼女にとつてはあのまま死を迎えた方が幸せだったのではないか。そんな思考が、頭を巡る。

だが直ぐに、あの晩の記憶が蘇った。

私が死を望んだ時、それは本当に心からの願いだっただろう。そうせざるを得なかったから、私は死を願ったのではなかったか。

今の彼女も、本当に心から死を願っていた訳では無かったのだろうか。あの日の私の様に、そうせざるを得なかったから死を迎える決断をしただけだ。

私がセドリックと出逢い、今こうして生きている様に。彼女も素敵な人に恵まれ、

そして生きる場所が見つかりますように。

そんな願いを込めて、 “あの人” から貰った大切な名前を口にした。

XXII Unstoppable jealousy

本格的な寒さが訪れる前の、八月末。ロンドンから離れた小さな街。

緑豊かな丘の木の下で私は、柔らかな風を感じながらマーシャから借りた本を読んでいた。

自身の隣には、木の幹みきを背凭れにして眠るセドリックの姿。

彼との関係は相変わらず、ただの同居人のままだ。友人でも、家族でも、恋人でも無い、同居人。

その関係に不満が無いと言えば嘘になるが、それでも今は特に心を乱すこと無く変わらぬ日々を送っている。

今日は、週に一度の休日。仕事の予定が無く、セドリックが一日家に居てくれる日だ。

普段の彼は、休日になると昼まで目を覚ます事は無く、更には一日をベッドの上で過ごす。日によっては、朝食も取らない位だ。

そんな彼が、今日は珍しく早朝から目を覚ましていた。そして有ろう事か二度寝をする様子も無く、新聞を読みながら私と共に朝食をとってくれた。

それに感化されてしまったのだろうか。新鮮な彼の姿について、普段であればしないであろう提案を持ち掛けた。「冬になる前に、緑豊かな丘へ散歩に行きましょう」と。

すると驚く程に快く、彼はその提案を二つ返事で承諾してくれた。

その後、彼に連れられるままに乗合馬車に乗り、約二時間。流れる景色を眺めながら、この丘へと辿り着いた。

心地よい風に、暖かな陽気。いつもより優しく感じた恋焦がれた相手との散歩は、私にとってとても幸せな物だった。

此処に着いて約三十分が経過した頃だろうか。昼の十二時を告げる鐘の音が聞こえ、そろそろ昼食にしようという事でこの木の下に来た。

昼食に選んだのは野菜をたっぷりと挟んだサンドイッチ。それを僅か数分で完食し、満腹を感じた頃合い。歩き疲れた事も相まってか、いつの間にかセドリックは木の幹を背凭れにして眠ってしまった。

折角二人で遠出をしたというのに、いつもの様に眠ってしまったのはつまらない。最初はそう思い寂しさを感じていたが、今日は私の我儘で沢山歩かせてしまったのだ。少し位構わないだろう。

念の為と入れてきた本を鞆から取り出し、彼の隣でその本を開いた。

——そして、今に至る。

彼の隣は、とても居心地が良い。

恋とは苦しいものばかりだと思っていたが、最近は決してそれだけでは無い事を学んだ。

落ち着いて見てみれば、彼はとても私を大切にしてくれている事が分かる。それに、私をよく気に掛けてくれている様で、時々自発的に「何か変わった事は無いか」と、私の身の回りで起こった事を聞いてくれていた。

だが、そんな中でもどうしても避けられない感情がある。

それは——

「——嫉妬……」

自身の膝の上に乗せられている本に、度々出てくる言葉。この本で、覚えた感情だ。

今迄その言葉を、目にした事は何度もあった。だが、それがどの様なものなのかを深く考えた事は無かった。

きつと自身の人生において、何かに嫉妬する事が無かったが故に、理解をする事が出来なかつたのだろう。

先程彼と会話を交わした際、彼はマーシヤを「家族の様な存在」だと言った。

それは会話の流れで出た言葉であり、決して彼も深い意味を込めて言った訳では無い。自分自身でも、充分に分かつている事だ。

なのに、たつたそれだけの事に、酷く嫉妬の感情に駆られた。

「家族の様な存在」という言葉は、過去にマーシヤからも聞いた事がある。その当時は彼への恋心を自覚していなかつた事もあつてか、特別思う事は無かつた筈だ。なのに何故、彼の口からその言葉を聞くと、こんなにも心が乱れてしまうのか。マーシヤは彼の多くを知っている。私を知る事の出来ない彼の仕事も、過去も。本に書かれた嫉妬の文字を指でなぞり、痛む胸に溜息を漏らした。

「……あつ……」

本を傾けた拍子に、ひらりと黒い封筒がページの隙間から落ちる。

それは数日前、チェストの中を整理していた際、セドリックのローブのポケットから見つけた物だ。そのローブを使ったのは約半年前。私がこの街に来て、初めて街に出た時だ。

あの時セドリックは、「長年使っていないなかつたものだから、少し埃の臭いが気になるかもしれない」と言いながらそのローブを私に貸してくれた。そしてその時には、確かにポケットの中には何も入っていないかつた。

外出から戻った際、特にポケットの中を確認せずにチェストに戻してしまつたが、それからセドリックがこのローブを使った所は見えていない。

つまりこの封筒は、街に出た際「何者」かが私に近づき、ポケットに入れたものと認識して良いだろう。

セドリックに相談しようと思ひこの本に挟んでいたが、今の今迄すっかり忘れていた。

本を閉じ、その封筒を手取る。

封筒の口は、「B」の文字が押された封蝋でしつかりと閉じられている。決して

安物では無い、重量感のある紙質。

一体誰が、何の為に、こんな物を私のポケットに忍ばせたのだろうか。好奇心と少々の恐怖を胸に、ゆっくりと封蝋を剥がした。

中に入っていたのは、封筒の色と同じく黒のメッセージカード。
そのカードを取り出し、書かれたメッセージに目を走らせる。

Dear Elle Burton,

《親愛なる エル・バートン》

When you notice it,

《貴女がそれに気付いた時》

the other person also notices it.

《相手もまたそれに気付いている。》

Mabel Balfour

《メイベル・バルフォア》

「……なに、これ」

ゴールドのインクで書かれた、手本の様に美しく綺麗な文字。

それは屋敷にいた頃お世話になっていた家庭教師ガヴァネスの文字を連想させる。彼女達が書く文字も、このカードに書かれた文字の様に癖が無く、美しい文字だった。

随分と仰々ぎょうぎょうしい見た目をしていた為、一体どんなメッセージが書かれているのかと身構えてしまったが、裏返してみても、光に透かしてみても、書かれているのはたったのこれだけ。

全く意味が理解できないメッセージだ。カードの最後に書かれた差出人らしき名前も、憶えの無い名前である。

少々気味は悪いが、きつと誰かの悪戯いたづらであろう。送る相手を、間違えたのかもし

れない。

——と、普通の人ならば思うかもしれない。メッセージの内容も、きつと直ぐに忘れてしまうかもしれない。

だが、私はそれをただの悪戯だと思ふ事は出来なかった。

この手紙がポケットに入れられた日に、確証は無い。恐らくあの日であろう、といった曖昧な物ではない。

しかし本当に、私が初めて街に出たあの日だったのなら、これは決して無視出来ない手紙だ。

『Elle Burton 《ヘル・バートン》』

あの日、私とその名前を口にしたのはたった一度だけ。ライリーと初めて会話を交わした時だけだ。

それを周囲で聞いていた人物も居なかった筈。

それに、その名前はあの瞬間咄嗟に口にしたものだ。ライリーに名を尋ねられるまで、私はモーリスに「名を貸す」と言われた事すら忘れていた。

この、メイベル・バルフォアという人物は何故、あの時点で私の名前を知っていたのか。

非現実的であり、どれだけ考えても説明が出来ない。背に冷汗が伝い、妙な寒気がする。

過去に読んだ怪奇話ばかりを集めた本よりも、この手紙の方が余程怖い。逃げる様に手早くカードを封筒の中に仕舞い込み、少々乱暴に本の間に挟んだ。

この様な怪奇現象に、自身が巻き込まれた事は過去に一度も無い。故に、対処法も分からない。

燃やしてしまい、無かった事にした方が良いのだろうか。だが本当にこれが怪奇的なものなのであれば、燃やしてしまえば不幸に見舞われそうさ。

しかし、こんな物を長く持っているのも気分が悪い。

メッセージの意味を深く考えるべきか、それとも早く忘れてしまふべきか。本の表紙を撫でながら、溜息を吐いた。

「——ううん」

自身の溜息と重なった、小さな唸り声。隣に視線を向けると、眠る彼の額にはうつすらと汗が滲み、その表情は歪んでいた。

嫌な夢でも見ているのだろうか。芝生しばふに手をつき、そつと音を立てず彼に近づく。「——なんで……」

穏やかな風に混じる、掠れた声。それは目の前の彼が呟いた言葉の様に聞こえたが、普段の声とは大きく異なる弱々しい声だ。本当に彼の声だったのだろうかと思わず自身の耳を疑ってしまう。

「……セドリック？」

彼の顔は長い前髪で隠れ、此処からでは起きているのかも確認出来ない。顔を覗き込み、囁き掛ける様に彼の名を口にする。

そしてそのままじつと寝顔を見つめっていると、唇が僅かに開き、再び言葉が漏れた。

「——なんで……——さん……」

確かに、言葉に合わせて動いた唇。だがその声はあまりに小さく、風が木々を揺らす音に掻き消された。

本来ならば、それは耳に心地よく届く筈のものだ。なのに、今は彼の言葉を攫ってしまったそれらが少し恨めしい。

彼は今、"誰かの名"を呼んだ。

その人物は、彼の夢の中に現れ、彼の心を奪い去っていく。決して私では無い誰か。

もやもやとしたもどかしい気持ちに苛まれ、思わず彼のジャケットを強く掴んだ。

「——えっ」

ぐらりと、此方に傾く彼の身体。どうやら、自分が思う以上に強く掴んでしまったらしい。

「ちよっと、待って……!!」

慌てて彼の身体を支えるが、行動に移した時にはもう既に遅かった。

完全に倒れてしまった彼の身体と、膝の上を感じる僅かな重み。行き場を失くした手は宙を彷徨い、この状況を考えれば考える程思考は絡まっていく。

今の状況は、何度か本の中で読んだことがあった。交際している男女が、片方の膝の上に頭を乗せて眠る、所謂「膝枕」というものだ。

彼が目を覚ました時、私はこの状況をどう説明すれば良いのだろう。

彼はきつと私を疑い、責める事はしないだろうが、それでも気まずい空気が流れる事は免れない。

いっそ、彼を起こしてみようかとも考える。彼は一度眠れば中々起きない方であり、このまま起きるのを待つていたら帰るタイミグを失つてしまうかもしれない。それに、今起こしてしまえば膝枕の言い訳もし易い気がした。

だが、誰だつて愛した人には少しでも触れていたいものだろう。事の発端は事故であつたとしても、合法的に膝枕が出来ているこの状況を逃したくは無い。

彼を起こそうとする手を止め、その寝顔をじっくりと眺める。

同じベッドで眠っているとはいへ、普段は必ずお互い背を向けて眠っていた。寝付けない夜は、時々こつそりと彼の寝顔を眺めている事はあるが、それでもこう明るい場所で、更には至近距離で、正面から堪能できることは少ない。

鞆から白いハンカチを取り出し、彼の額に滲む汗をそつと拭う。

今も、彼は悪夢の中に居る様だ。時々表情を歪ませては、苦しげな息を漏らす。こうして悪夢に魘なされているのなら、やはり起こしてあげるべきなのかもしれない。だが、中々見る事の出来ない苦痛に歪む表情に、つい見惚れてしまつて中々起こす事が出来ずにいた。

どんな表情をしていても、彼の顔は美しい。幾ら世の中に階級制度があろうと、生きる事に苦勞をしなかつたのではないか、なんて無責任にも思つてしまう位には

欠点の無い顔立ちだ。

苦痛に歪む表情を、美しいと思うだなんてどうかしている。そう自覚はしているものの、やはりそれが率直な感情であり、誤魔化す事は出来なかった。

彼の長い前髪を払い、その柔らかな髪をそつと撫でてみる。指の隙間をすり抜けていく黒髪は毛先に向かって色素が薄くなっており、光に当てると少し赤み掛かって見えた。

女性も羨む程の、美しく柔らかな髪だ。特別なケアをしている様には見えないのに、何故此処まで触り心地の良い髪質が維持できるのか不思議だ。

あまりの触り心地の良さに暫く撫でてみると、歪んだ表情が僅かに和らいだ様に見えた。

「——エル？」

丁度、髪から頬へと手を滑らせた時。彼の瞳が微かに開き、うわごと譫言の様に私の名を呼んだ。

この状況を認識しているのかしていないのか、彼の手が私の手に重なり、まるで子供の様に頬擦りをし再び瞳を閉じる。

「——おはよう、セドリック」

手に彼の熱を感じながら、ぎこちなくも声を掛ける。

まさか彼がこんな事をするなんて、全く想像していなかった。張り裂けそうな程心臓は高鳴り、顔には熱が溜まる。

「うらみ魔されていた様だけど、大丈夫？ 起こした方が良かったかしら」

「……いや、大丈夫だ。……少し、嫌な夢を……」

彼の顔色は悪く、私の手に重ねたその手も冷え切っている。呼吸も乱れ、再び開かれた瞳は僅かに揺れていた。

募る心配が、高鳴る鼓動や帯びる熱を静めていく。

今までに、彼が寝起きに「夢見が悪い」などと訴えた事は多々あった。だが、彼は毎度それを特に気に留めていない様子であった為、「夢はただの夢」だと割り切れているものだとばかり思っていた。

そんな彼が、悪夢に此処まで心を乱されているだなんて。意外性を感じながらも、空いた親指で彼の頬を撫でる。

「——悪い、もう少し、このままで……」

私の掌に頬を寄せたまま、彼は私の膝の上から動こうとしない。

——彼に、頼られている。心を埋め尽くす甘心に、思わず緩んでしまった口元を

誤魔化す様にゆつくりと息を吐いた。

だがそれと同時に沸き上がる、下らない不安と嫉妬。

今迄彼は、酷い悪夢に魘うなされた時誰を頼っていたのだろうか。今の私が居る場所に、別の人物が居たのだろうか。

例えば、長年共に過ごしていたマーシャなら。今の様に弱った彼の姿を、見慣れているのではないか。

そして彼も、マーシャの膝枕で眠る事に慣れているのではないか。

彼を支配する悪夢の様に、それ等の考えが私の思考を占拠する。

私も、彼の心を自由に操る事が出来たら。彼の心の中を、自由に覗く事が出来たら。

少しは彼を、振り向かせる事が出来るのだろうか。

未だに、そんな事を考えてしまう自分に嫌気が差す。

マーシャはセドリツクに、何の感情も抱いていない。セドリツクも、マーシャをただの家族の様な存在としてしか見ていない。二人の間に、決して「恋」や「愛」

なんてものは存在しない。

そんな事分かり切っているのに、何故こんなにも、心が乱されてしまうのか。彼

の全てを、独占したいと思ってしまうのか。

「——セドリック」

自身の中を渦巻く嫉妬を掻き消す様に、穏やかな口調で彼の名を呼んだ。

私と視線を交わらせる彼に優しく微笑みかけ、空いたもう片方の手で彼の髪を撫でる。

「——夢はただの夢」

いつの間にか私は、とても強欲な人間になってしまった。

気が触れそうな程彼を独占したい気持ちと、ほんの少し病んだ心。そんな中でも、こうして彼に触れている事に喜びを感じている。

「——私が居るから、大丈夫よ」

自身の中に、幾つも存在する感情。それを上手くコントロールする事が出来ないのは、私が「恋」を知らなかったからなのか、それとも強すぎる独占欲がそうさせているのか。

彼に触れたい、彼を自分のものだけにしたい。彼の瞳に、自分以外の人間が映るだなんて許せない。いつそ、彼をこのまま自身の中に閉じ込めてしまいたい。

知らず知らずのうちに溢れ出た欲は、自覚した頃にはもう既に歯止めが利かなく

XVIII Tea time very similar to that day

黒い雲が空を覆い尽くす、とある十月の昼過ぎ。

家を訪ねてきたのは、セドリックの幼馴染であり、私の友人でもあるマーシャ・レイノルズだ。

掌程てのひらの小さな皿に彼女が持ってきた手土産であるビスケットを並べ、客人用ティーカップに紅茶を注ぐ。

それをテーブルに着いて眺めていたマーシャが、子供の様に足をぶらつかせながら徐に口を開いた。

「最近、セディとはどう？」

彼女の問いに、思わず紅茶を注ぐ手が止まる。

「どう……と言われても」

曖昧に返した言葉に、マーシャはやや不満げな顔をした。

この国に於いて、お茶会ディタイムは一種のコミュニケーションである。よくメアリーとも、

両親の目を盗んではお茶会ディテイクイムを共にしたものだ。その時、彼女とは一体どんな会話をしていたらうか。

そんな事をぼんやりと考えながら、マーシャとの会話に興じる。

「セディとは上手くやれてる？」

「ええ、何不自由のない暮らしをさせて貰っているわ」

私の返答に不満があったのか、彼女がううんと唸り声を漏らし、難しげな顔をしてビスケットを一枚口に抛り込んだ。

マーシャは良い友人だ。知らない土地で、更には身分を出来る限り隠さなくてはならない自身にとって、彼女の存在はとても大きい。

だがどうしても、胸に引っ掛かるのはセドリックの事。

「そんな貴女はどうなの？」

私の問いに、今度は彼女の手が止まった。

ビスケットを頬張った口だけをもぐもぐと動かし、私を見つめたまま首を傾げる。「セドリックと、幼馴染なのでしよう？ 相変わらず、会話が無くともセドリック

の思っている事が分かったりするのかしら」

「……ううん、幼馴染だからというより、あいつ自体が分かりやすいからなあ……」

だからといって、エルちゃんが思っている様な事は何も……」
少々困惑の表情を浮かべたマーシヤを尻目に、彼女と向かい合う様にテーブルに着く。

自身の目の前には、客人用のティーカップに注がれた紅茶と、既に数枚が消えたビスケットの皿。それ等をじっと見つめながら、ゆっくりと口を開く。

「分かっているわ。でも私にとつて彼は決して分かりやすい人では無いの。貴女が彼を分かりやすい人だと思ふのなら、それは彼が貴女を信頼しているからじゃないかしら」

今の自身の言葉はやや辛辣で、誰が聞いても気分の良いものでは無い。だが何故だか、火が付いた様に言葉は止まらない。

「私は彼と出逢つてまだ日が浅いの。彼は表情が豊かでは無いし、思っている事だつて分からない。……貴女が羨ましいわ。昔から彼の近くに居て、彼の心が簡単に分かつて」

ティーカップを手に取り、乾いた口内を潤す様に紅茶を口に含む。

そして小さく息を吐いて、「本当に、貴女が羨ましい」と更に言葉が続けた。

——何故此処まで、心が荒んでいるのだろう。こんなもの、彼女にぶつけたとこ

ろで意味は無いのに。

止まらない自己嫌悪に、唇を噛む。

「——セデイってね、昔から本当に口数が少なかったの」

静かな部屋に響いた、マーシヤの穏やかな声に顔を上げた。

「幼少期は特に。酷い時なんて、数日間声を発さない事もあった。ほんと、声の出し方忘れちゃったのかもって焦った位」

ふふ、と彼女が笑い、懐かしむ様に目を細める。

「この歳になって、仕事を始めて、確かに昔よりかは口数は増えた。けどね、セデイが自ら会話をする様になったのって、エルちゃんが来てからなんだよね」

不安にも似た、安堵感。その話をもっと詳しく聞きたいと思う反面、私の知らないセドリックの話を、これ以上彼女から聞きたくないとも思ってしまう。

胸に広がる複雑な感情に、どの様な顔をしていいかが分からず黙ってティーカップに口を付ける。

「家族みたいな存在であった私ですら引き出せなかったセデイの顔を、エルちゃん
は簡単に引き出せたんだよ。やっぱ、エルちゃんはセデイにとって特別なんだなあ」

——特別。

その言葉に、自然と鼓動が早くなる。

だがその瞬間、一つの疑問が浮かび上がった。

「ねえマーシャ」

「ん？」

「二人は、幼馴染なのよね？」

「うん、そうだよ」

ティーカップをソーサーに置き、浮かんだ疑問を頭の中で繰り返す。

今迄に、何度かそれを疑問に思った事はあった。その度別の事柄に気を取られていた為深く考えた事は無かったが、今になって猛烈にそれに興味が湧く。

ティーカップを傾け、透き通った紅茶の色を眺めながらそれを口にした。

「――二人の御両親は、今どうしているの？」

カチカチと響く、規則正しい秒針の音。

私とマーシャの間に流れる沈黙。

ちらりとマーシャの顔に視線を向けると、彼女はテーブルに頬杖を付き、微笑みを称えたまま皿に並んだビスケットを見つめていた。

聞いてはいけない事だっただろうか。人の家庭環境を、安易に詮索すべきでは

無かったかもしれない。

謝らなくては、と口を開く。

だが、先に言葉を発したのはマーシャの方だった。

「エルちゃんのお両親、今どうしてるの？」

決して大きくはない、囁くような、柔らかな彼女の声。だがそれは、空気を裂く様な鋭い言葉だった。

両親の現在は、私ですら知らない。だがセドリックもマーシャも、私が此処に来た当時社交界の事や私の家の事を調べていた筈だ。

彼女は、私のどこまでを知っているのだろうか。

全てを見透かしてしまいそうな、奇妙で恐怖心を煽る彼女の瞳。咄嗟に目を逸らし、「ごめんなさい」と慌てて口にした。

「ごめんごめん、そんなに怖がらせるつもりは無かったんだけど。ほら、知らなくてもいい事って世の中にあるでしょ？」

マーシャの瞳には、もう先程の様な鋭さは無い。普段と変わらない、明るい彼女だ。

「私とセデイの両親も、知らなくていい事だよ」

柔らかい笑みを浮かべた彼女が、ビスケットを一枚皿から摘まみ上げた。

「エルちゃんの両親の事も、家の事も、私達にとっては知らなくていい事、でしょ？」

マーシャの手が、此方に伸ばされる。そして、指先で摘まんだビスケットを私の唇に触れさせた。

「このビスケット、美味しいんだよ」

——彼女は、本当に私を黙らせるのが上手い。思っている事を全て口にして見えて、決して本心を語らないマーシャは、良き友人でありながらも何処か見えない壁の様なものを感じた。

メアリーが友人から、使用人に戻ってしまった時の様な、そんな言葉にし難い距離間。

本当に心が読めないのは、セドリックよりもマーシャの方かもしれない。

僅かに口を開きそのビスケットを齧ると、彼女が嬉しそうに笑った。

「そういえば、セデイから何か言われた？」

「……何かって？」

齧ったビスケットを飲み込み、怪訝な視線を彼女に投げる。

「何かは何かだよ。……まあエルちゃんの様子を見るに、セディは何も言っていないだろうけど……」

「どういう事？ セドリックは何か、私に思っている事でもあるの？」

そういう訳では、などと言い淀み、彼女がわざとらしく私から視線を外す。

彼が私に思う事。思い当たる節は、この前の丘での出来事だ。

もしや、膝枕をしてしまった事や、「私が居るから大丈夫よ」なんて言ってしまった事を不服に思っているのだろうか。

考えてみれば、丘から帰ってきてから彼は様子が変わった。話し掛けても何処か上の空で、夜もあまり眠れていない様だった。

「エルちゃんって、可愛いね」

悶々と考えている私を見て、マーシャがくすりと笑う。

「——な、何が……？」

人が必死に言葉の意味を考えているというのに、それを笑うだなんて失礼だ。むつとした顔で彼女に問い返すと、「別に何も」と含みのある言葉が返ってきた。

「エルちゃんはセディの事、好きだもんね？」

丁度、ティーカップに口を付けた瞬間。爆弾の様な言葉を投げ込まれ、思わず口

に含んだ紅茶を噴き出しそうになってしまった。

慌てて口元に手を遣つて誤魔化し、様々な感情を込めた瞳でマーシャを見つめる。
「あれ？ 違った？」

テーブルに頬杖をついて私を見る彼女は、まるで新しい玩具おもちゃを見つけた子供の様な顔をしている。

自身の動揺を悟られまいと咳払いをし、そつとカップをソーサーに置いた。

「何故、いきなりそんな事を……？」

彼女は、私自身が恋に気付く前からセドリックへの想いに気が付いていた。

どことなくそれを仄ほめかす様な発言をされた事は過去に何度かあるが、今の様に包み隠さず好きかと問われたのは初めてだ。

セドリックが私に何を思っているのか、マーシャは知っているのだろうか。彼女はセドリックの事を分かりやすい人だと言っていた。その心中を見抜いていてもおかしくは無い。

「いや、特別何かある訳じゃないんだけど。ただ二人はいつになったら結ばれるのかなあつて思つて」

今の彼女は、まるで読書の感想を述べているかの様だ。傍から見ればきつと、恋

愛小説を読んでいる感覚でしかないのだろうが、当事者である私にとってはそれ程簡単な事では無い。

マーシャの口ぶりからするに、恐らく私はセドリックから嫌われている訳では無いのだろう。もしかすると、多少好かれていた部分もあるのかもしれない。だが、それは彼本人から直接聞いた訳でも無ければ、マーシャがはつきりとそれを言った訳でも無い。

もし、私がセドリックに想いを告げたとして。

それをセドリックが拒絶したら、私達の関係は全て崩れてしまう。同居人で居る事すら、難しくなるだろう。

そうなれば私は、失恋に傷付くだけでなく居場所までも失ってしまう。

そんな危険を冒してまで、想いを告げるなんてことは出来ない。

「……結ばれる事を願うのは、貴女だけじゃないのよ」

嘆く様に呟き、深く溜息を吐いた。

——それから約一時間、お茶会ディレクティブは続いた。彼女が私に壁を見せたのは両親の事を尋ねた時のみで、その後は普段と何も変わらない、明るく愛嬌のあるマーシャだっ

た。

セドリックとの事も深く聞かれる事は無く、彼女はいつもの様に名残惜しそうな顔をしてこの家を去っていった。

静かになった家の中で一人、ぼんやりと先程の事を考える。

“知らなくていい事”

彼女が放ったその言葉は小さな棘の様で、思い出す度胸がチクチクと痛む。

確かに、彼等の過去を私を知る必要は無い。それに、私の過去や両親の事を、彼等に知られる事も好ましい事だとは言えない。

だが、それがどれだけ些細な事であったとしても、彼の事であればなんだって知りたい。彼の全てを、把握していたい。

——いや、この感情はそんな言葉では言い表せないだろう。

過去を見る事も、知る事も出来ない事は分かっている。だが、マーシャは知っていて、私は知らない。たったそれだけの事なのに、嫉妬に気が狂いそうだ。

つくづく思う。

私はいつから、これ程までに欲深くなってしまったのだろうか。

屋敷に居た頃は、此処まで何かを欲した事など無かったのに。

XXIV An unimaginable future

触り心地の良い、セドリックの香りが付いたブランケット。硬い、ベッドの上。瞳を開けた先に見える白い天井。

此処で目を覚ますのは何回目だろう。最早当たり前となったそれに、今日も安堵の溜息を漏らす。

もう屋敷を出てから半年が経ったというのに、未だに今の生活が夢なのでは無いかと思う事がある。

この半年間は全て私が見た長い夢であり、ふと目を覚ました時には屋敷に戻っているのではないかと。

だが、今日もこの家で目を覚ます事が出来た。それは何ものにも代え難い安堵である。

今日のセドリックは早朝から仕事の予定が入っているらしく、昨晚「朝食は必要

ない」と言っていた。つまり、今家には一人きりだ。

——寂しい。

彼の寝顔を見て始まる一日。そんな日々を過ごしていたからか、その感情が溢れて止まらない。

寝返りを打ち、僅かにベッドに残った温もりに彼の体温を思い描く。

初めて彼に触れられたのは、屋敷を抜け出した時。柵を飛び越えた私の手を取り、抱き留めてくれた。

その次は、この家に来た時。私の髪をくしゃりと乱す様に撫で、そしてそのまま頬を撫でてくれた。

キースと運悪く街中で出会ってしまった時も、私を「妻」と呼んだ事も、叱りながらもきつく私を抱きしめてくれた時も、あの嵐の夜も。

その感触、声、体温、全てを鮮明に思い出す事が出来る。

インクが滲む様に、じわじわと胸の中に広がる切なさ。

ブランケット越しでは無く、直接彼の香りに包まれない。もう一度、彼の腕に抱かれない。

気が付けば、そんな欲が思考を支配する。

「——これじゃあ駄目ね」

大きな溜息と独り言を漏らし、ごろりと仰向けになった。

後悔から一日を始めては、決して良い日にはならない。勢いをつけて身体を起こし、ベッドから足を下す。

私は屋敷を出てから、本当に心が弱くなってしまった様だ。

今彼の一番近くに居るのは私だと、少なくとも彼の視界には入っていると、そう思えたら良かったのに。

再び溜息を漏らし、乱れたブランケットや布団を丁寧に畳んでいく。

「……？」

ふと目に付いた、テーブルの上に置かれた一枚の紙。

そこには、「At 12:00, go to church. 《十二時、教会へ》」の文字と非常にアバウトなこの街の地図が描かれていた。その中で一際目を引くのは、森の絵と、その森の中心の建物。建物には、小さな文字で「church 《教会》」と書かれている。

確か、隣町を繋ぐ様に大きな森があった筈だ。屋敷を抜け出した時も、その森を通った。

どうやら、彼からのお呼び出しの手紙の様だ。直接伝えれば良いものを、何故彼

はこんなにも回りくどい伝え方をしたのだろうか。そう思いつつも、私だけの為にわざわざ描いてくれたその手紙が嬉しくて、思わず笑みを零した。

現時刻は九時三十分。指定の時間まではまだ余裕がある。

彼が何を考えているのかは相変わらず分からないが、いつの間にか先程迄の鬱々とした気持ちには晴れ、心は浮足立っていた。

どの服を着て行こうか。全て彼が私に買い与えてくれた物だが、初めての彼からのお呼び出しだ。きっと何か特別な事があるに違いない。

所持している服の中で、一番華やかなものになしよう。そう思いながら、チェストを開いた。

*

「ごめんねえ、エルちゃん」

見慣れた街、私が毎日通い詰める店の前にて。女店主であり、私の友人であるライリーが嘆く様に言った。

「あのロケットペンダント、売れちゃったんだよ」

「ええ……」

昼の十一時を、少し過ぎた頃。

セドリックに呼び出された時間まで少々余裕があった為、教会に向かう前にライリーの店を訪ねた。

だが、来て早々告げられた言葉に酷く衝撃を受ける。

彼女の言う通り、毎日美しいと感嘆を漏らしながら眺めていたロケットペンダントは何処にも無い。

「そんなあ……」

深い悲しみに、肩を落とす。

勿論最初は、いつかこの様な日が来る事を覚悟していた。だが、女性客に見向きもされないロケットペンダントに、いつの間にか“売れてしまう事は無い”なんて思う様になっていった。

値段をつけ、商品として販売している以上、誰かがそれを購入する事は充分にあり得る事だ。それを、勝手な決めつけでその様に思ってしまった事は、当然自身の責任である。

だが、まさかこんなにも突然別れが来るだなんて思いもしなかった。

ペンダントを買った人は、どんな人だったのだろう。ライリーはその人に、ペンダントに込められた祈りの話をしたのだろうか。

身勝手だとは分かっているが、自分では無い別の誰かの手にあの美しいロケットペンダントがあるのかと思うと、形容しがたい感情に駆られた。

「まあ、そんな悲観的になる必要も無いと思うよ」

私を見ていたライリーが、苦笑いを浮かべながら壁に凭れ掛かる。

「……何故そんな事が言えるの？」

「何故って……、そりゃまあ、セシリアに手紙を出せば良いだけだからさ。ほら、前に話しただろう、教会で作られているって」

「そう……だけ……」

私は、確かにあのロケットペンダントに魅力を感じていた。それは紛れも無い事実だ。

だが仮に、全く同じペンダントが新たに作られ、この商品台に並んだとして。私はそれを、再び美しい物だと言って眺める事は出来るのだろうか。

同じ見た目であっても、私が美しいと思ったのは此処にあつたあのペンダントだ。同じ物をまた作って貰えれば良いだなんて、今の私には思えなかった。

しかし、ペンダント一つでいつまでも落ち込んでいる訳にもいかない。今日は十二時に、セドリックからお呼びだしをされているのだ。

あのペンダントには縁が無かった。そう無理矢理気持ちを切り替え、ライリーに本題を告げようと俯いた顔を上げた。

「ねえライリーさん、森の奥にある教会ってわかる？」

「教会……？」

私の言葉に、彼女が僅かに表情を歪める。

手紙に書かれた地図は非常に曖昧で、尚且つ分かりづらい。森の場所は把握しているが、中心の教会まで自力で辿り着ける自信が無かった。その為ライリーがその教会への行き方を知っていれば尋ねたかったのだが、今の彼女は少し妙だ。苦虫を噛み潰したような表情のまま、私からふいと顔を逸らす。

「分からなくは無いか……、なんで急に教会なんか？」

「……えっと、少し用事があった」

明確な理由があった訳では無いが、彼女の顔を見ているとセドリックの名を出す事が少々憚^{はばか}られる。

ポケットの中に入っている彼からの手紙に意識を向けつつ、言葉を曖昧に濁し彼

女の顔色を伺った。

「——あの教会はやめておいた方が良いでしょう」

ぼつりと、彼女が告げた言葉。彼女は未だ、私と視線を合わせようとしない。

「……ど、どうして？」

セドリツクに呼び出された事に浮かれた心が、徐々に冷めていく。

「……私自身、別に信じてる訳じゃないんだけどさ。あの教会、悪い噂が絶えないんだ。噂なんて、事実無根のものが殆どだけど、それでも、悪い噂ばかりたつ場所には行きたいと思わないだろう」

「噂……？」

「ああ。『あの教会には、この世の者では無い何かに住んでいる』とか『元々は子供を捨てる為に使われていた』とか『一度行ったら帰ってこれない』……だとか。エルちゃんの言う用事が何か分からないけど、重要な用事じゃない限りお勧め出来ないね」

自身の心音が、やけに大きく聞こえる。耳の奥で響くような、妙な動悸だ。

やけに胸に引つ掛かる、*“元々は子供を捨てる為に使われていた”*という言葉。

そういえば、とある夫婦が口減らしの為に森に子捨てをするという童話があった。

あの物語は、どんな結末だっただろうか。

セドリックが、十二時に私を教会に呼んだ理由。それを手放しで喜んでしまっていたが、何の為に私を呼び出したかをまるで考えていなかった。

話をするのに、態々わざわざそんな場所に呼び出すだなんておかしい。仮にただの待ち合わせだったとしても、森奥の教会など選ばないだろう。

彼は、その教会でしか出来ない「何か」をしようとしている。

もしや私は、あの童話の様にそのまま森に捨てられてしまうのだろうか。

屋敷を抜け出した時にあの森の一部を通ったが、空が見えない程木が生い茂り、草や岩、剥き出しになった樹木の根などで足場が悪く、空気も淀んでいてとても正常な精神を保っていられる場所では無かった。出来る事なら、長居はしたくない場所だ。

「エルちゃん、本当に行くのかい？」

「……」

ライリーの問い掛けに答えられず、その場で俯く。

彼の呼び出しに、応じない訳には行かない。だが、呼び出し通りに教会へ向かうのも怖い。

「顔が真つ青だよ？」

彼女が、私の顔を覗き込んだ。

いっそ、彼女に頼み込んで同伴して貰おうかとも考える。

だが、彼女はその教会を忌み嫌っている様だ。それに、この店の事もある。安易に巻き込むべきでは無い。

「……大丈夫。直ぐに行つて、直ぐに帰つてくるわ」

無理に笑顔を作り、彼女にひらりと手を振る。

そして一人森へ向かおうと、踵きびすを返した。

彼を信じたい。だが、私を森に捨てる筈が無いとも言切れない。

思い返してみれば、昨晚の彼は少し変だった。深刻そうな面持ちで何かを考え込んでいて、私が話し掛けても気付かないという事も何度かあった。

森に近づくにつれて、足が徐々に重くなる。それに合わせて、歩みを進める速度も落ちていく。

私は、あの童話の兄妹の様に賢くない。故に、森に捨てられた際生き延びる方法も、家に帰る方法も分からない。

考えている間にいつの間にか辿り着いてしまった森の入り口。森の名前らしきものが書かれた木札が樹木に打ち付けられているが、木札は腐敗し、その文字は滲んでしまっていて読むことが出来なかった。

外から見ていても、異様な空気を纏っているのが分かる。本当に、この森で間違いないのだろうか。

そう不安に思ってしまった程に森の中は暗く、奥に続く道も生い茂る草木で覆われてしまっていた。

ポケットから手紙を取り出し、地図に視線を落とす。

確かに、この森で間違いない。教会の位置は曖昧だが、この地図を見るに森の中心部にある様だ。

だがどう考えても、手入れの一つされていないこの森の中に、まともな教会があるとは思えない。あるとしても、長年人の入っていない廃れた建物位であろう。

溜息を漏らし、森の中へと足を踏み入れた。

奥に進めば進む程、背後の光は小さくなっていく。

土や草のニオイはきつく、それだけで息が詰まりそうだ。陽の光は木の葉に遮られ、外の世界を遮断される様な圧迫感を覚えた。

時々剥き出しになった樹木に足を取られながらも、道も目印も無い深い森の中を只管に進んでいく。

鳥や動物の鳴き声すら聞こえないこの森は、まるで異世界への入り口の様だ。辺りを見渡しても似た様な木ばかりで、早くも道に迷い始めていた。

今更ながら、此処に足を踏み入れてはいけなかったのではないかと思えてくる。だが、そんな事を考えたつてもう手遅れだ。既に帰り道が分からなくなってしまう事に恐怖感を覚えながらも、辺りを見渡しながら比較的綺麗な方へと進んでいく。

「——！！」

この暗い森に、よく馴染んだ外装。煉瓦れんがで作られた、壁を伝う蔓つる。目の前に聳え立つのは、異様な程に大きい教会。

ずっとこの建物が見えていた筈なのに、森に馴染んでいたからか全く気付く事が出来なかった。突如現れた様に感じるその教会に、形容しがたい恐怖心が沸き上がる。

一歩ずつ慎重に地面を踏みしめ、その教会に近づいた。

教会の出入り口に付けられた木の扉は酷く廃れ、所々腐り穴が開いている。扉に埋め込まれた小窓も曇り、覗き込んでみても中は見えない。

もう一度、手に持っていた手紙に視線を落とす。

今自分が森のどの位置に居るか見当もつかない為、本当にこの教会で合っているのかすら分からない。だが、この建物は確かに教会だ。間違いは無い。

手紙をポケットにしまいこみ、扉の前で深呼吸を数回繰り返す。

そして扉の取っ手を掴み、ゆっくりと押し開いた。

——自分を待ち受けている未来が、何かも分からずに。

XXV Surely a happy dream

押し開いた扉の先。瞳に飛び込んできたのは、息を呑む幻想的な青。

床にはガラスの破片が散らばり、至る所に蜘蛛の巣が張る廃れた教会だというのに、美しい光を放つ大きな丸形のステンドグラスがあるからかとても美しい場所に思える。

後ろ手で扉を閉め、ステンドグラスに吸い寄せられる様に、ゆつくりと教会の中へと足を踏み入れた。

歩く度に、靴の下で細かなガラスが割れる音がする。タイルも所々剥がれてしまっていて、慎重に歩かないと転んでしまいそうだ。

なのに、私の視線はステンドグラスに奪われたまま。足が取られそうになるのも気に留めず、ぼんやりと美しい光を眺めながら祭壇へと向かう。

「——エル？」

突如、教会の中に響いた声。その声に、漸く私はセドリックに呼び出されていたのだという事を思い出した。

祭壇に立てられた十字架の下、そこに立つすらりと背の高い一人の男性。逆光でその顔は見えないが、シルエットから私を此処に呼び出した人物だという事が分かる。

「……セドリック？ どうしたの、こんな所に呼び出して……」

転ばない様注意しながら彼の元に駆け寄り、その顔をそっと覗き込んだ。

今日の彼は、普段のシャツにスラックスといったラフな格好とは違う。初めて彼と出逢った「あの日」を連想させる姿だ。

ウエストコートとジャケットを身に着け、ネクタイも普段よりきつく締められている。そして肩に付く程の長い髪は、後ろで丁寧に束ねられていた。

スタンドグラスから差し込む美しい光が、彼の黒いスーツを青色に染め上げる。やけに鼓動が煩く感じるのは、彼の姿が普段と違うからか。それとも、この様な美しい場所に二人きりだからか。

彼の顔を見つめながらそんな事を考えるが、思考ごとこの空間に吞まれてしまい、それ以上深く考える事は出来なかつた。

「此処まで来るの、苦労しただろ」

「……そうね、少しだけ」

私達を包む、不思議な空気。普段は深く考えずとも出来る会話が、今は何故だかぎこちない。

「暗い森だという事は聞いていたが、此処迄だとは思わなかつた。……その、悪かつたな。こんな所迄来させて」

彼の様子も普段と大きく異なっていて、鼓動は更に早くなる。彼の顔を直視する事が出来ず、思わずその場に俯き「大丈夫」と短く返した。

——流れる沈黙。

話したい事や聞きたい事は、山程ある。何故私を今日此処に呼び出したのか。いつからここで、私を待っていたのか。

なのに、喉奥から声が、言葉が何も出てこない。

不思議だ。場所一つで、此処までも上手く話せなくなるなんて。

何か話し出すきつかけは作れないだろうかと、働かない頭を必至に回す。

だが、その沈黙は彼の短い言葉が遮った。

「――手、出せ」

突然の言葉に思考が追い付かず、思わず「手？」と問い返す。

彼は相変わらず無表情のままだ。私の問いに肯定の言葉は無く、頷く事すらもしない。

何も答えないのならば、従^{したが}うしか無い。

疑問を抱きながらも、怖ず怖ずと彼の方へ右手を差し出した。

その手に、ふわりと重なるセドリックの手。そして、冷たく重みのある何かが掌に落とされた。

この感触に、憶えがある。何処かで触れた事のあるものだ。

どれだけ考えてみても、頭に浮かぶのは「あれ」だけ。だが、それを彼が持つて

いる筈が無い。

僅かに震える右手の上から、彼が手を退かした。

「……こ、……これって……」

高鳴る鼓動が、最高潮に達する。

ステンドグラスの光に反射し、美しく輝く楕円型。それに繋がる細いチェーンは、寶石の様にキラキラと輝いている。

私の心迄をも奪ったロケットペンダント。それは、毎日眺めていた時とは違う重さを孕み、私の掌の上に乗せられていた。

「——ライリーから、お前が欲しがってるって聞いた。それに、意味も……」

彼が言葉を詰まらせ、私からふいと顔を逸らす。

——このペンダントに込められた意味。

それは、ライリーの家で確かに聞いた。教会で作られているもので、縁結びの祈りが込められていると。

そして、蓋裏に二人の名を刻印してプロポーズと共に贈れば、神の御加護が付き幸せになれると。

震える指を、小さなロケットに掛ける。そして僅かに力を籠め、蓋を開いた。

そこに彫刻されているのは、何度も目にした美しい聖母マリア像。

そして、最後に見た時には何も描かれていなかった筈の蓋裏。そこには――

「……名、前……が……」

彼と私の名が、美しい字体で刻印されていた。

弾かれた様に顔を上げ、彼の顔を見つめる。

「――初めてお前と、あのバルコニーで会った時。貴族の娘にしては随分と謙虚で、変わってる奴だと思った。俺が貴族の人間じゃない事は明らかなのに、煙草を黙認したり……他の奴には見せない顔で、笑ったり」

淡々とした、まるで何かを読み上げているかのような彼の声。だがその声からは僅かに緊張感が伝わってくる。

「普通、幾ら相手が貴族だろうと『共に生きたい』と言われて簡単に従う人間なんか居ない。それに俺は人付き合いが苦手……というか、嫌いだ。そんな俺がお前の手を取ったのは、きつと一目見た時から、お前を愛していたからなんだと思う」

彼の手が伸び、私の頬に触れた。

頬にじわりと広がる彼の熱。耳を伝う彼の声は、その言葉は、この幻想的で美しい空間が見せた幻か。

彼が私を、愛していただなんて。俄にわかには信じ難い言葉に、思考が混乱し始める。

「一目惚れだとか、運命だとか、そんなもの俺は信じてない」

彼がふと、表情を崩した。それは、自嘲にも似た笑み。

「『愛』なんて言葉も、ただの自己満足で……身勝手に……。そんなものは、何処にも存在しないと思ってた」

苦しい色が、その表情の奥に見える。私の頬を撫でる手も、僅かに震えていた。

「でもお前と出逢って、共に暮らす様になって……、お前に触れたい、笑顔をずっと見ていたい、お前の隣に居る理由が欲しいって、お前の存在を……閉じ込めたいって、思う様になった」

私の瞳を深く見つめる、ローズレッド。ステンドグラスの光と交じり合い、それは深みのあるボルドーに色を変える。

「——エル、お前だけを愛してる。お前が、俺の隣で笑顔で居てくれるなら、何だっつてしてやりたい。だから、俺だけのエルで居て欲しい」

彼の言葉に、呼吸が止まる。まるで、夢を見ている様だ。

まさか、私はずっと夢の中に居るのだろうか。まだ目覚めていないだけで、此処は夢の中なのだろうか。

こつそりと手を強く握り、自身の掌に爪を立ててみる。
それは、嘘偽りの無い本物の痛み。

——間違いなく、これは現実だ。

「教えてくれ。俺の言葉は、『身勝手』か？ ただの、『自己満足』か？」
彼の声が、僅かに震える。私を捉えるその瞳には、不安が浮かんでいた。
だが、自身の瞳にじわりと滲んだ涙で、その顔はぼやけ、見えなくなる。

「……そんな、事、ない」

弱々しい自身の否定の言葉では足りず、強く首を横に振った。その拍子に、浮かんだ涙が頬を伝う。

「身勝手じゃない、自己満足じゃ、無い。だって——」

私の頬を撫でる彼の手に自らの手を重ね、一步、彼と距離を詰めた。

「——私も、同じ様に思っているから」

涙で、酷く声が震える。伝えたい事は山程あるのに、出てくるのは嗚咽だけ。それ以上の言葉が、何も出てこない。

やはり、これは夢なのでは無いか。彼の掌の熱も、彼の言葉も、爪を立てた痛みも、全て私が作りだしたものなのでは無いか。そう、錯覚する。

だが仮にこれが夢だったとしても、彼の言葉に応えたい。私がずっと抱いていた気持ち伝えたい。いずれ、覚めてしまう夢だとしても。

涙が止まらない中、ゆつくりと顔を上げる。そして、彼と深く視線を交わらせた。

「——私も、貴方を愛してる」

自然と、顔いっぱいには笑みが溢れる。それは無理に作ったものでも、愛想笑いなんてものでも無い。

きつと、あの晩バルコニーで彼に向けた笑顔と同じだ。彼が私の言葉に返答してくれた事が、たったそれだけの事が嬉しくて仕方が無かった、あの晩と同じ。

ただ愛おしい人に、彼だけに向ける心からの笑顔。

私の言葉に、彼の表情が切なげに歪む。そして力強く腕を掴まれ、そのまま強引に抱き寄せられた。

体中に広がる、彼の体温。ブランケットや布団越しなどでは無く、直接感じられる彼の匂い。

ずっと欲していたそれ等に、涙は堰を切ったように溢れた。彼に縋りつく様子の背に腕を回し、まるで子供の様に泣きじゃくる。

「愛してるよ、エル」

そんな私を強く抱きしめ、彼が低く囁く。

私の髪や背を撫でる手は何よりも優しく、まるでその言葉は嘘偽りでも夢でも無いと言っている様だった。

ずっと、想いを寄せていた相手。そんな相手が、同じ様に自分に想いを寄せてくれていた。

——貴方が私を愛していると自覚したのはいつ？

——出逢った晩、家の前で私の頬を撫でてくれた時にはもう愛していた？

——私のどんな所を愛していたの？

問いたい事をあげれば、キリが無い。

だが、そんな事今はどうだって良い。私と彼の気持ちと同じだった、それだけで充分だ。

背に回した腕に力を籠め、彼の胸元に顔を押し付ける。

もう、彼を見つめる意味を採す必要は無い。彼に、触れる理由を考える必要は無い。

ただ愛しているから、それだけで全てが許される。

そんな気がした。

こうして抱き合つて、どの位時間が経つただろうか。お互いの心音を感じながら落ち着きを取り戻し、ゆっくりと身体を離す。

「——エール」

私と額を合わせ、彼が優しく名前を呼んだ。

「前に、お前が変な男に絡まれた時、俺がお前を『妻』って呼んだ事を覚えてるか」
囁くような、穏やかな声。その声が心地良く、心酔しながらも小さく頷く。

あの日の事は、今でも忘れる事は無い。彼が私を、キースから救ってくれた。その時の安心感は、鮮明に思い出す事が出来る。

「俺は、あの言葉を事実にしても良いと思つてる」

「えっ……？」

「交際……というのか。所謂、男女の関係だ。それを吹っ飛ばして妻にしようなんて、考えが突飛だとは自分でも思うが」

額を合わせたまま、彼が小さく笑った。

「だが、抑々俺達でもそもの関係は普通じゃないだろ」

「……普通？」

「お前は屋敷から抜け出した身で、今は俺と同じ家で暮らしてる。それはきつと、これから先も続く筈だ」

彼の言葉に、静かに頷く。

「……だから俺は、今までの『同居人』って関係を『恋人』に変えるより……『夫婦』に変えたいって、思ってる」

泣いた後だからか、それとも夢の様な話だからか、何処かぼうつとする不思議な浮遊感に包まれる。

鼓動は相変わらず早鐘を打ち、手や足は震えているのに、そんな中でも思考はやけに冷静で、彼の言葉ははつきりと理解していた。

なんと返答すればいいのか、どう伝えれば私の気持ちは彼に伝わるのか。頭を悩ませながらも、彼と視線を交わらせる。

「……私も、『恋人』より……『夫婦』になりたい」

捻りだした言葉は、なんともシンプルなもの。

「……私で、良いのなら。貴方に相応しい、妻になれるのなら」

私の言葉を聞いて、彼が柔らかく口元を緩めた。両手で私の頬を優しく包み込む。「当たり前だ。お前以外に居ない」

頬を包む手が、するりと項うでに回った。甘く囁く彼の唇が、ゆつくりと近づく。その瞬間、あの日の事を思い出した。灯りの消えた暗闇で、暴風雨の音が部屋を満たしたあの晩の事。

トラウマに震える私に、彼は「俺がずっと傍にいるから」と言ってくれた。彼の言葉が本当なら、あの時には既に私を愛してくれていたという事だ。つまり、その言葉に嘘は無かった。

彼と一步距離を詰め、それを受け入れる様に自身も彼の頬に手を触れさせる。

此処には、あの日の様に私達を邪魔するものは無い。それに、もう口付けを躊躇ためらう必要も無かった。

触れさせた掌に伝わる、普段より熱い彼の体温。少しだけ、早い鼓動。瞳を閉じた先、微かな吐息が混ざり合う。

控えめに触れた、柔らかい感触。まるで触れる事を願っていたかの様に、しつとりと心地の良い唇は蜜が溶け合う様に深く重なる。

酷い緊張で、心臓が破裂してしまいそうだ。上手く呼吸が出来ず、頭がくらくらとしてくる。

だが、それでもずっと欲していたものに漸く触れられた幸福感から、更にその唇

を求める様に手を肩へ滑らせ、そのまま彼の首に腕を回した。

僅かに口を開き、彼の唇を食む。その際に感じた、微かな唾液の味。その中に混じる、煙草の苦み。しかしそれは決して不快なものでは無く、何故だかとても愛おしく思えた。

——時間になると、数秒程。永遠にも感じられた口付けは、名残惜しくも終わりを迎える。

唇が離れ、乱れた呼吸を整えながら彼と視線を交わらせた。

彼の瞳は、何か言いたげに私を見つめる。だが何か言葉が発せられる事は無く、彼の名を呼ぼうとした私の唇は再び彼の唇で塞がれた。

彼が今日、何故こんな森奥の廃れた教会を選んだのかは分からない。

だが、彼から貰ったペンダントも、言葉も、キスも。この場所で貰う事に、何か特別な理由があったと信じていた。

——美しいステンドグラスの光に照らされた、十字架の下もとで。

神に誓うは、穢れ無き彼への永遠の愛。

XXVI Continuation of dream

夏の温かさが恋しくなり始める十月下旬。現時刻は十一時三十分。

早朝から出かけて行つたセドリックの帰りを待ちながら私は、オーブンキッチンの前にしゃがみ込み、朝から作つていたプラムのタルトが焼けていく様を眺めていた。

森奥の教会でペンダントを貰い、約三日。未だに、あの日の出来事は夢だったのではないかと思つてしまふ。

だがそれが夢で無いと証明してくれるのは、自身の胸に輝くロケットペンダント。それに指先を触れさせながら、小さく笑みを零す。

——彼と想いは通じ合った。彼も、私を愛していた。
教会でのあの言葉も、あの抱擁ほうようも、キスも。全てが心地良く、胸の中に残つてい

る。
それに、夢じゃないと証明してくれるのはこのペンダントだけでは無い。あの日

以降、彼は別人の様に変わった。

瞳が交わる回数が増え、私に触れてくれる事も増え、更には愛の言葉も頻繁に囁いてくれるようになった。

今迄の彼は何処か私との間に距離を作っている様に見えたが、今はそんなもの一切感じられない。この三日間で心の距離が近づき、通じ合っているのだと実感する事が出来た。

今の気持ちには、「幸せ」なんて言葉では言い表せない。少しでも気を抜けば、直ぐに顔が緩んでしまう程だ。

丁度、タルトの焼き上がり時間を迎えた頃。オーブンからタルトを取り出そうと腰を上げた時、背後で玄関扉が開く音がした。

「あつ、おかえりなさい」

振り返り、手に書類らしき物を持って帰宅した彼に声を掛ける。

普段ならちゃんとお迎えをしているのだが、このまま彼の方へ行ってしまうとタルトが焦げてしまう。

それを彼は察してくれたのか、書類をテーブルに置き此方に歩み寄ってきた。

「火傷するなよ」

「分かっているわ、大丈夫よ」

焼きあがったばかりのタルトをオープンから慎重に取り出し、事前に用意していたケーキークラーの上にそっと乗せる。

甘い物が苦手なセドリックの為に、お砂糖を使わずプラム本来の甘みのみで作ったタルトだ。普通の人の味覚であれば、少々物足りなさを感じるであろう。

だがきつと、セドリックなら美味しいと言ってくれる筈だ。そんな期待に笑みを零すと、私の背後から彼がタルトを覗き込んだ。

「此処に来た当時よりも、上手くなったな」

つまみ食いをしようと、彼の手がタルトに伸びる。

彼は時々、こうして出来立ての料理を前にするとつまみ食いをしようする事があつた。その都度、「お行儀が悪い」等と注意をしていたが、その手を制した事は今迄に無かつた。

だが、今日は駄目だ。このタルトは、＼特別な今日の為＼に焼いたもの。

彼の手に自らの手を重ねて制し、振り返る。

「……貴方に、美味しいって言っただけで欲しかったから」

注意の代わりに告げたのは、彼の言葉への返答。

今迄はこの様な事も、伝える事は出来なかつた。面倒な女だと思われたくなくて、ただ只管ひたすら自分の想いを隠してきた。

だが、想いが通じ合つた今なら言える。それが今は、ただただ嬉しかった。

「……そうか」

彼の返事は、素っ気なく感じてしまふ程短い。

だが彼の顔に浮かんだ、優しい表情。相変わらず表情が豊かだとは言えないが、胸の中が甘心で満ちていくのを感じる。

「ねえ、セドリック」

指を絡ませる様に手を握り、少々甘えた声で彼の名を呼ぶ。

「どうしてあの日、森奥の廃教会なんて選んだの？」

背後に立つ彼に凭れ掛かると、彼が私を支える様に緩く抱きしめてくれた。

「……お前は人目を避けないといけない存在であつて、俺も人目に触れる場所は好きじゃない。だからあの場所を選んだ。それだけだ」

「そうだったの……。でも、それなら同じ家に住んでいるのだから、態々わざわざ教会なんて選ばなくても……」

「……それ、は」

彼が言葉を詰まらせ、口を噤む。

「……セドリック？」

振り返ってその顔を見上げると、彼はぼつが悪そうに私から顔を背けた。

皺が寄った眉間に、少々赤みを帯びた顔。その顔に悪戯心が沸き上がり、わざとらしく彼の顔を覗き込んでみる。

すると、彼が私の視界を覆う様にくしゃりと前髪を乱した。

「——お前は、知らなくていい事だ」

告げられたのは、そのたった一言。手を退けられた頃にはもう、彼の顔はいつも通りの無表情に戻ってしまっていた。

「つまらないわねえ……」

「こんな事に面白さを求めなくていい」

くるりと踵かかとを返した彼が、私から離れベッドの方へと足を向ける。その背を見ながら、小さな溜息を吐いた。

——ふとした瞬間に感じる、心の距離。

想いが通じ合っていると分かっているから、私達の距離は大分縮まった。だがそれで

も時々、僅かな心の距離を寂しく思ってしまう。

あの言葉を貰ってから、まだたったの三日。それこそ急に心の距離が縮まり、何でも見せ合える様になったら怖い位だ。

今迄はただの同居人という関係でしか無かった。それが進展しただけで充分じゃないか。

——そんな事、頭では分かっている。

だがどうしても、心に生まれてしまった寂しさを誤魔化す事は出来なかった。ベッドの方へと向かう彼を、咄嗟に追い掛ける。

前よりも、距離が縮まっているのは確かだ。なら、この位の事は許される筈。そう自身を言い聞かせ、彼の背に抱き着こうと手を伸ばした。

「！」

だが、彼の背中に手が触れる直前。

スカートが足を纏れさせる様に絡まり、上手くバランスが取れず身体が前に傾いた。

その瞬間、僅かに感じた既視感。

前にも、似た様な事があった。確か、あれは彼と二人で街に出た時だった筈だ。

彼に駆け寄ろうとして、石畳の凹凸に爪先を引つ掛け転びそうになつてしまった。私はこんなにも、失態を演じる様な人間だつただろうか。屋敷に居た頃は、どれだけ足に合わない靴を履こうが転ぶなんて事は無かつた。

自身の注意力が散漫している証拠だ。もっと、気を引き締めなければ。

彼の方へと倒れ込むまでの間に、様々な事が頭に浮かぶ。だがどれだけ考えようと、後の祭りだ。傾いた身体を元に戻す事は出来ない。

ドサリ、と大きな音を立て、無様にも彼の上に倒れ込む。

少し硬い、鍛えられた身体。鼻腔を抜ける、僅かに甘い彼の香り。それ等に鼓動が高鳴るのを感じながらも、慌てて身体を起こそうと床に手を突く。

だが、手を突いた床は妙に柔らかい。ふかふかとした感触に、じわりと嫌な予感が胸の中に広がっていく。

「……随分、積極的なんだな」

自身の頭上から聞こえたのは、抑^か捺^か様な彼の声。その声に、背筋が凍るのを感じる。

私と彼が倒れた先は、幸か不幸かベッドの上だった。

幸い互いに怪我は無かつたものの、これでは私が彼をベッドに押し倒したのだと

思われてしまう。現に、彼にはそう誤解をされている様だった。

慌てて身体を起こし、自身の下敷きになった彼に視線を落とす。

「ご、ごめんなさい、その、転んでしまって」

「……大義名分か？」

「ち、ちがつ……」

否定の言葉を口にするも、彼は今の状況を楽しんでいる様だ。私の言葉を、真剣に聞く気は無いらしく、転んだ拍子に乱れてしまった私の髪を、彼は口元を緩めながら愛おしそうに撫でている。

「……本当なの、ただ転んでしまって、そういうつもりは……」

「俺は、お前だったらいつでも歓迎だが」

「……あまり、からかわらないで……」

彼の上から逃れようと、身を捻った。だがすぐさま彼の腕が私の腰に回り、それが妨げられる。

「からかわっているつもりは無い。それに俺からは手が出せないからな。そっちから来てくれると助かる」

「……手が出せない……？ どうして……？」

「どうしてって……。お前を、怖がらせたくないからに決まってるだろ」

彼の指先が、するりと私の頬を撫でた。

私の顔を見つめる彼の表情は、何処か切なげだ。その顔を見ていると、胸が締め付けられる様に痛くなる。

「……私、貴方を怖いと思った事なんて一度も無いわ」

彼の瞳を深く見つめ、囁く様に告げた。

言葉通り、彼を怖いと思った事など過去一度も無い。それに、今後もきつと、彼に何をされても怖いと思う事は無いだろう。

現に、こうして彼に触れられているだけで、酔ってしまいそうな程幸せを感じているのだから。

「……強かだな」

彼の一言に、ふふ、と笑みを零す。

「そうかしら」

彼とこうして触れ合う時間は、幾らあっても足りない。

だが、今日はやるべき事がある。それは、私と彼が正式に“夫婦”になる為の手続きだ。

テーブルの上に置かれている、今日彼が持って帰ってきた書類。それは私達が夫婦になる為の、所謂婚姻届けだった。

今日は、その書類を書こうと彼と約束をしていた。その約束を果たすべく、彼の上から身体を起こす。

「……ほら、セドリック。今日は書類、書くんではよう？」

彼の腕を引き、ベッドから起き上がるよう促す。

「その為に、タルトも焼いたのよ。早くしないと、タルトが冷めてしまうわ」

「……フルーツのタルトなら、冷めたって問題無いだろ」

「焼きたてを貴方に食べて欲しいの。ほら立って」

彼が渋々ベッドから身体を起こし、名残惜しそうに私の腰から腕を外した。

今の彼は、なんだか玩具を取られてしまった子供の様だ。相変わらず表情は読みづらいが、その僅かな変化に気付けるようになった事には嬉しさを感じる。

「そんな顔しないで」

自身から彼に何かを仕掛ける事は、非常に勇気がいる。だが私達は夫婦になるのだから、躊躇う必要はきつと無い筈だ。

彼の両頬を手で包み込み、その女性の様な美しい唇にそっと口付けを落した。

それは教会でしたキスとは違い、ただ唇を重ね合わせただけの軽いものだ。だが、お互いに触れ合うのとも、見つめ合うのとも違う。唇から伝わる熱は、とても特別なものの様に感じた。

「さあ、ほら早く。あまりゆっくりしていたら夜になってしまおうわ」
顔に上った熱を誤魔化す様に笑い、彼の腕を強く引つ張った。

XXVII desire

ふわふわと浮遊する様な、心地よいとも不快だとも言えない妙な感覚。ゆるりと下^{くだ}る様に意識が覚醒し、ゆっくりと瞳を開いた。今は何時だろうか。

目の前には、最愛の夫の寝顔。私の身体を抱く様にして眠る彼は、普段と少し違い子供の様で愛らしい。その寝顔を眺めながら、ふふ、と一人笑みを零す。

カーテンの隙間から見える外は、ぼんやりと明るい。時刻を確認しようと、彼の腕の中で体勢を変え背後の時計に視線を向けた。

現時刻は五時丁度。起きるには早い時間だが、妙に目が冴えてしまった為二度寝をする気分にはなれない。彼の腕の中に収まり、再びその愛らしい寝顔を眺める。

——いつの日だったか、深夜にこうして彼の寝顔を眺めていた事があった。それはまだ想いが通じる前の事で、一人彼を眺めながら、恋煩いに心を痛めていたのを覚えてる。

その時に確か、眠っている彼にこっそり口付けをしようとした。ずっと欲しかったものを、眠っている間に奪ってしまおうと。

だが、実際口付けをする事は無かった。

何故、私はあの時思い留まったのだったか。ぼんやりとした頭では、それを思い出す事は出来ない。

——ただ、今思い出せるのは昨晚の情交のみ。

性の知識が、無いに等しい状態での情交。所謂、これが一般的に初夜と呼ばれるもののなのだろう。

交際している男女がその様な行為をするという事は曖昧に認識していたが、具体的にどの様なものを指すのかは全く理解をしていなかった。

泣いたり戸惑ったり我儘を言ったりと、決して美しいとは言えない初夜。色々と

彼にも迷惑をかけてしまった部分も多く、冷静になった今、羞恥心等の感情が込み上げる。

だが、込み上げた感情はそれだけでは無かった。

全身に落とされた優しいキスに、何度も囁かれた愛の言葉。彼の余裕の無い表情に、涙が出る程の快樂。思い出せば思い出す程、言葉では言い表せない程の幸福感が押し寄せる。

彼を受け入れた場所の痛みは引かず、疼く^{うず}様にじくじくと痛んでいる。だが、その痛みすらも深く愛し合った証だ。

幸せを噛み締めながら、彼の感触が残る身体に掌を這わせた。

私と彼が夫婦になり、昨晚の様に体を重ねるだなんて、数ヶ月前の私は想像すらもしていなかった。

“同居人”という関係への不満を無理矢理満足に置き換え、ただただ彼を目で追っていた。

そんな生活が、突如一変するなんて。こんな風に、彼に愛して貰える日が来るだなんて、思いもしなかった。

「……愛してるわ、セドリック」

眠る彼の頬に指先を触れさせ、そつと囁く。

当然、彼からの返事は無い。だが、私を抱く腕に僅かに力が籠った気がした。

——彼が目を覚ますまで、あと数時間。

それまでに、朝食の用意と、入浴の支度をしなくてはならない。やる事は山済みだ。

だが今は、ほんの数分だけでも、彼の寝顔をこうして見ていたかった。

*

何かが、顔に触れている感覚がする。頬を突いたり、撫でたり、摘まんだり。

睡眠の妨げになるというのに、それは決して不快では無く、寧ろ何処か心地良い。

私の顔に触れている正体が気になり、ゆっくりと瞳を開いた。

「……おはよう、エル」

視線の先には、柔らかな表情を浮かべるセドリックの姿。つい先程まで彼は眠っていて、私はその寝顔を眺めていた筈。

いつの間に、眠ってしまったのだろう。

未だはつきりとしれない頭で彼に現時刻を問うと、「八時半」と短く答えが返ってきた。

「——ごめんなさい、朝ご飯とお風呂の支度……していません」

彼の腕の中から逃れ、身体を起こそうと寝返りを打った。

まさか、あのまま眠ってしまうとは自分でも思っていなかった。やる事は山済みだと言うのに、何一つ手を付けられていない。

早く支度をしなければ、彼が仕事に遅れてしまう。痛む身体を無理に起こし、ベッドの下に散らばる衣類に手を伸ばした。

「——あ、」

だが、衣類を手にした瞬間。彼に強く引き寄せられ、それ等は再び床の上に落ちた。

「仕事、午後からだから。そんなに慌てなくていい」

耳元で囁かれた声に、昨晩の情交が思い出される。顔に熱が上り、その所為で身体には力が入らなくなってしまった。

彼は分かかっていてそれをしているのか、腕の中で動かなくなった私を見て小さく

笑った。

彼を直視する事が出来ず、ブランケットを手繰り寄せ顔を隠す。

こうして彼の腕の中に居ると、また昨晚の様に甘い吐息や声が聞こえてきそうだ。それ等の記憶を掻き消す様に、更にベッドの奥へと潜り込む。

「何してんだ」

「……あまり、こつちを見ないで」

ブランケットに包まったまま不愛想に告げ、ベッドの中で身体を小さく丸めた。そんな私を見た彼が、面白がる様にわざとらしく耳元に口元を寄せる。

「昨晚はあんなに『傍に居て』だとか『離さないで』なんて言って善がってたくせに」

「……そ、そんな事言っていないわ！」

「言ってた」

ぱちりと、ぶつかる視線。

珍しく見て分かる程表情を緩ませた彼が、徐おもむろに私の掌にキスを落した。

——昔、何かの本で読んだ。キスをする場所によって、意味が変わると。

確か、海外の劇作家が書いた作品の台詞だった筈だ。どの様な物語だったか、ど

の様な経緯でそれを読んだかは記憶に残っていないが、その台詞はとても印象的だった。

男性から女性への、挨拶の意味でも使われる手の甲は、「敬愛」おとぎばなし。御伽噺の中で、王子様がお姫様へするキスという印象を持つ人も多いだろう。

そして掌へのキスは、「懇願」。

同時に切願の意味も持ち、その人を独り占めしたいという意志の表れなのだという。

彼が何処まで、そのキスの意味を知っているのかは分からない。特に深い意味は無く、たまたま選んだ先が掌だっただけなのかもしれない。

だがそれでも、彼の唇の感触が残った掌は熱く、その熱は暫く引きそうになかった。

「寒いな」

「……冬、だから」

彼が私に覆い被さり、掌の次にキスを落としたのは首筋。

首筋へのキスには、どんな意味があっただろうか。彼からのキスを受けながら、ぼんやりと考える。

だが、何処か擦くすった感じを交えた快樂が思考の邪魔をし、中々その答えに行きつく事が出来ない。

「……セドリック、だめ」

彼の肩を叩き、キスから逃れる様に首を横に振る。

「……色々、支度しないといけないから」

「仕事は午後からだって言っただろ」

「……でも、もう朝だから、起きないと」

「起きてる」

「……そうじゃ、なくて」

身体を起こした彼が、私の顔をじっと見つめる。

その瞳は、昨晚と同じ熱を孕んでいた。そんな瞳で見つめられてしまえば、もう言い訳など出来なくなってしまう。

「……困った人ね。少しだけよ」

「分かってる」

彼の唇が、自身の唇に重なった。

食む様なそのキスは、このまま溶けてしまいそうな程心地よく、強張った私の身

体と心を解していく。

——困った人、だなんて言っておきながら、私は少しも困ったりなどしていません。

彼から受けるキスが、熱が、全て快楽に変わる。どれだけ彼と触れ合っても、どれだけ彼から快楽を得ても、満ち足りる事は無い。

私も大概だ。朝からこんな事を、許してしまうなんて。

そう思いながらも、彼からのキスにただ心を酔わせていた。

「——ん、っ……あっ……」

あれから、どれだけの時間が経過しただろう。少しだけ、と言った言葉を忠実に守る様に、彼は私の身体を弄ぶだけでそれ以上の事はしなかった。

秘部に滑らせた指は淫らに動き、強い快楽を生むしこりを器用に刺激する。そして愛液を零す蜜壺に指を這わせては、焦らす様に指を差し込み壁を執拗に擦った。

「——だ、め……セドリック……!」

抵抗しようと彼の肩を押すが、彼は私の首筋に舌を這わせるばかりでびくとも動かない。

このままでは、私自身が「少しだけ」では済まなくなってしまう。現時点でも、既にお腹の奥が疼き蜜壺は彼を欲しがるように愛液を溢れさせている。

「セドリック、待って……」

思考を埋め尽くすのは、昨晚の情交。最愛の人と交わる事が、これ程までに気持ちがいいとは思わなかった。

出来ればもう一度、彼と交わり合いたい。愛の言葉を囁きながら、もう一度奥を刺激して欲しい。

気が付けばそんな欲が脳内を支配していて、最早抵抗出来なくなってしまうていた。

「——あ、っ……ん……」

蜜壺の中に差し込まれた指が、一本から二本へと増やされる。

壁を擦る指先が快楽を生む場所周辺を焦らす様に擦り、快楽を求め思わず腰を揺らした。閉じていた足も、彼の指を受け入れる様にはしたなくゆるりと開き、徐々に思考が情交へとシフトし始める。

すると、そんな私を見ていた彼が小さく笑みを漏らした。

「——少しだけ、じゃなかったのか？」

乱れる呼吸に、張り裂けそうな程高鳴る鼓動。もう、「少しだけ」では満足出来ない。

「本当に、意地悪な人……」

「満更でも無い癖に」

両腕を伸ばし、彼の首に腕を回す。そして彼を抱き寄せ、耳元に口を寄せた。

「——少しだけ」じゃ嫌。もつと、貴方が欲しい」

自身の中に残る僅かな羞恥心に、顔に熱が溜まる。しかし、今もまだ蜜壺の中を動く指に限界を迎えていた。

「——早く、来て」

誘い言葉と共に、彼を迎え入れる様に足を開いて見せる。そんな私に、からか揶揄う様な彼の表情も崩れ、余裕の無い表情へと変わっていった。

「誘惑が上手くなったな」

愛液を零す蜜壺に、そそ聳り立つ熱い彼の物が当てがわれる。そして入口を先端で弄つた後、ゆつくりと腰を滑らせそれを私の中に差し込んだ。

「誘惑なんて、したことないわ……」

「そう思ってたのは、お前だけだよ」

指先では届かなかつた深い場所を、容赦無く強く突かれる。その度に、喉奥からは耳を塞ぎたくなる程の甘い声が押し出され、あまりの快樂に涙が滲んだ。

——それから、休む事無く二回も行為に及んだ。

その所為でいつの間にか仕事の時間が迫り、息を付く間も無い程忙しい時間を過ごしたのは言うまでもない。

XXVIII In front of a small theater

屋敷を出て一年。

彼と正式な夫婦になって半年が過ぎたが、変わらず夫婦仲は良好だ。それに、マ―シャやライリー、その他街の人達との交流も増えている。

十八年も御屋敷暮らしをしてきたというのに、たったの一年でこの街での生活が当たり前になった。屋敷での生活が思い出せない程に、今の生活は充実していて、

毎日幸せに溢れている。

そして、慣れとは恐ろしいものだ。元貴族令嬢だという事が頭の中から消えつつあるのか、最近是人目を気にする事を忘れて必要以上に街を練り歩き、ついこの前など、街に貴族の馬車が通り掛かった際乗っていた人物から訝しげに顔を見られてしまった。その人物は社交界でも有名な貴族の一人。記憶には薄いだが、社交界で何度か会話を交わした事のある人物だった筈だ。

この街に馴染めるのは良い事だが、それでもまだ屋敷を抜け出してから日は浅い。もう少し人目を気にする生活を心掛けなければと、反省しなければならぬ点は多かった。

祝日の昼過ぎ。天気が良く、街は多くの人で賑わっている。

今日は、十九歳の誕生日を二日後に控えた私を氣遣つてか、セドリックが英国最大とされる高級百貨店へと連れていってくれた。

そこで気に入ったドレスをプレゼントとして買って貰い、一ひとしき頻り堪能した後、現在二人でのんびりと自宅方面へと向かっている。

会話は決して多くないものの、組んだ腕から伝わる彼の熱や、歩幅を合わせてく

れる感覚など、自宅の中とはまた違つて新鮮だった。幸せを噛み締めながら、人混みを縫うように進んでいく。

「——セドリック！」

突如周囲に響き渡つた、高いとも低いとも言えない男性の声。

聞き覚えのない声だ。彼と共に足を止め、声の方向へと視線を向ける。

「久しぶりだな、十年ぶり位じゃないか？」

大股で此方に歩み寄り、そして親しげにセドリックの肩に腕を回し掛けたのは四十代程の男性。腕を肩に掛けられた事にセドリックの表情が変わらない所を見ると、その男性とは顔見知り以上の関係の様だ。

「——この前会つたばかりだろ」

セドリックが呆れた様に呟き、その男性の手を軽く振り払つた。男性は彼のその様な態度に慣れているのか、「そうだったか？」と言つて笑う。セドリックの友人だとは思えない程、気さくでフランクな人だ。

“十年ぶり”と声を掛けたという事は、かなり古い知り合いなのだろうか。

二人を眺めながらぼんやり考えていると、その男性とパチリと視線がぶつかった。「可愛い子だな、セドリックの知り合いか？」

彼の言葉に、セドリックが眉を顰め口を開く。だが、それを遮る様に彼が「お前が女の子を連れて歩くなんてなあ」と言つて再び笑つた。

「俺はジャック・ナイトリーだ。此処の劇場の経営をしている」

簡潔な自己紹介と共に、彼が私に手を差し出す。「劇場」という言葉に彼の背後に視線を向けると、そこには確かに小さな劇場が建つていた。

「——エル・アンドールです」

怖ず怖ずとその手を握り、彼と同じ様に自身の名を名乗る。

私の瞳を見つめた彼は、黙つたまま。きつと此方にも、簡潔な自己紹介を求めているのだろう。だが私には、彼の様子に伝えられる情報が無かつた。なにか仕事をしている訳でも無く、かといつて元貴族令嬢だなんて事は口が裂けても言えない。どうする事も出来ず、仕方なしに愛想笑いを浮かべて見せた。

「——いつまで手を握つてるつもりだ」

不機嫌さを露にしたセドリックが、パシ、と私と彼——ジャックの握手を手刀で切る。

「ああ、悪かつたよ。随分可愛い子だったから、離すのが惜しくなつてしまつて」ジャックがそう言つて笑うのを尻目に、セドリックが舌打ち混じりに溜息を吐く。

彼はよく笑う人だ。表情の少ないセドリックとは対照的だと言えるだろう。だがジャックが何かに気付いたのか、ふとその顔から笑みを消した。

「——アンドールと言ったか？」

投げられた問いに、小さく頷く。

「——セドリック、もしかしてこの子……」

「ああ、俺の妻だが」

然も当然かと言う様に、セドリックが淡々と答える。ジャックはその事実が余程衝撃だったのか、大層驚いた顔をしていた。

「お前、女の趣味変わったのか？」

「女の趣味なんか最初からねえよ」

「嘘つけ、昔からよくブロンド髪の嬢さんと歩いてたじゃねえか。あの子は彼女と正反対な印象があつたが……あの子とは別れたのか」

「ブロンド髪の嬢さん……？ 誰の事だ、見間違えだろ」

先程からの、彼等の会話。男性同士ではよくあるものなのかもしれないが、妻である自分が聞くには堪えがたい話だ。ジャックの言葉が先程から私の胸を抉り、つい耳を塞ぎたくなってしまふ。

考えてみれば、私はセドリックの過去を何一つ知らない。彼がどんな人で、どんな人達と関わり、どんな仕事をしているのか。

女嫌いだと聞いていたが、実際その理由だって知らなかった。

もしかすると、セドリックには過去に恋人が居たのかもしれない。いや、今だつて私以外に関係を持っている女性が居ないとは言いきれないだろう。既婚でありながら、数人の妾めかけが居る男性は決して珍しくない、この前ライリーから聞いた。故に、セドリックの事をしつかりと見張っておけ、とも。

もやもやとした考えは止まらず、嫉妬や羞恥、自信の無さなどが入り交じった言葉にし難い黒い感情に苛さいなまれる。

そんな私の気持ちを知つてか知らずか、彼が徐おもむろに私の肩に腕を回し、優しく抱き寄せた。

「今日は妻と過ごす大切な日だ。邪魔しないでくれるか」

彼が少々きつい声音で、ジャックに言い放つ。その声に、ジャックが顔を強ばらせた。

「それは、悪かった。でも、実はお前にちよつと用があつてな」

だがジャックは引き下がること無く、私達に一枚のチラシを差し出した。

「それ、今じゃないと駄目なのか」

「時間が無いんだ。今聞いてくれると助かる」

鬱陶しいとでも言うように、セドリックが再び溜息を吐く。そして私に視線を向け、「悪いが、少し話してもいいか」と尋ねてきた。

プレゼントは買い終え、もう残した事は無い。この後も、自宅に帰るだけだ。

彼に肩を抱かれたまま、小さく頷く。

それを確認したセドリックが、渋々とジャックからチラシを受け取った。そのチラシを、彼と共に覗き込む。

「World famous diva Alice Blanchett Mini concert……?」 《世界的歌姫、アリス・ブランシェットミニコンサート……?》

彼がチラシに書かれた文字を、呟く様に読み上げる。

大きな文字に派手なインク。とても目を引くチラシだ。大々的に行うコンサートである事が伺^{うかが}える。

「アリス・ブランシェット……。何処かで聞いた事ある様な名前だな」

「有名な歌姫ね」

その女性の名前には馴染みがあった。

理由は実に簡単。私の父が、熱を上げていた歌姫だからだ。

「知ってるのか？」

彼の問いに、こくりと頷く。

私はまだ屋敷で暮らしていた頃に、父に無理矢理彼女が出演する公演に連れて行かれた事があった。その公演は、アリスの幼馴染兼有名な舞台女優マリア・ウィルソンの、引退最後の公演だったと記憶している。

貴族ですらチケットが入手出来ず、劇場の外は出待ちも多く人集りひとだかが出来ていたそう。そんな公演のチケットを、父はどうやって入手したのかは考えたくもない。

当時まだ幼かった私は、話の内容こそ理解する事は出来なかったが、彼女達の歌声と演技にはとても魅了された。帰宅後、その公演の素晴らしさを必死に使用人達に話して回っていた事を覚えている。

当時のアリスは、ロンドンで一番とも呼べる有名な歌姫だった筈だが、今は英国を超え世界を魅了する歌姫にまで上り詰めたらしい。

そんな彼女が、ジャックの劇場でコンサートを開く。それは確かに大々的に宣伝するべき事だ。

それに彼女の歌声が聴けるなら、私ももう一度聴きたい。

「世界的歌姫が……なんでこんな小さい街で公演なんか……」
チラシに視線を落としながら、セドリックがぼつりと呟いた。

「この街は、アリスの故郷なんだ。彼女は、元うちの劇場の住み込みの歌姫でね。彼女にとつても思い出深い場所なんだろう。パリへ発つ前に、一度此処でコンサートを行おこなわせて欲しいと熱心に頼み込まれてしまつて」

セドリックの独り言に、ジャックが少し寂しげに答える。

そういえば、この前新聞の記事で彼女の名前を見た覚えがある。確かフランス人の演奏家と婚約をしていて、彼女はその婚約者と共にパリの劇場で歌手業を務めるのだとか。ロンドンからパリへ旅立つのは来月と曖昧に書き示されていたが、ジャックの口ぶりからするにもう残る時間が少ないのだろう。

それは、きつとジャックにとつてもアリスにとつても寂しい事に違いない。

「もうロンドンに戻ってくる予定は無いらしい。向こうでも忙しくなるだろうから、恐らく旅行にも来れないだろうと。うちの劇場は小さいから、この街の人全員に彼女の歌声を聞かせてやることは出来ないが、それでも、せめてもの最高のステージにしてやりたくてな」

どれだけの実力を付け、沢山の人達の人気を得ても、アリスが一人の人間である

事には変わらない。

アリスの姿を見たのは随分と昔の事で、もう顔すらも思い出せないが、それでも彼女とジャックには報われて欲しいと思えた。

だがジャックは、セドリックに宣伝目的でこのチラシを渡した訳では無いのだらう。

公演日は今から約六日後。確かに公演日は迫っているが、ただの宣伝なら急ぎの用にはならない。

「何故、その話を私達に……？」

話に割って入る事は、マナー違反だと分かっている。だが中々進まない会話に痺れを切らし、怖ず怖ずと尋ねた。

「実は、今回アリスのコンサートでピアノを担当する筈だった演奏家が高熱で倒れてしまったんだ。ピアノ無しのアカペラでコンサートを開く事も考えたんだが、この日の為にいくつか新しく曲を書き下ろしているそうだね、ピアノ無しのコンサートは嫌だとアリスが……」

そこまで言って、ジャックが肩を落とす。

公演まで残り六日。コンサートに携わる人物にとって、最も忙しい時期だと言え

るだろう。そんな中、貴重な演奏家が一人欠けてしまった事はコンサートに大きな影響を及ぼす。舞台やコンサートに携わった事の無い私ですら、その位の事は容易く想像が出来た。

何か、打開策は無いのだろうか。ジャックとは初対面だというのに、何処か他人事だと思えず一人頭を悩ませる。

「公演の中止や延期も視野に入れているんだが、これがマリアと会える最後のチャンスだって、アリスも頑固でね」

「……マリア？」

今迄黙っていたセドリックが、突如顔色を変えその名に反応を示した。

「マリア・ウィルソンでしょう？ ああ、有名な舞台女優の」

私の言葉に、ジャックが大きく頷く。

「舞台上に興味の無いセドリックなら、知らないのも当然か。今はもう引退した女優なんだが、昔マリア・ウィルソンって女が居て——」

「あの女の事は知ってる」

説明は不要だとも言う様に、セドリックが彼の言葉を制した。

マリアは確かに有名な女優だが、アリスを知らないセドリックが彼女の事を知っ

ているのは意外だ。

隣のセドリックに視線を向けると、彼はなにやら複雑な表情をしていた。

「——今回も頼めるか」

そんなセドリックに告げられた、不可解なジャックの言葉。

“今回も”という事は、セドリックは過去にも彼の手助けをした事があるのだろうか。

だが、今回欠けた人員は演奏者。裏方の仕事とは訳が違う。

それに、セドリックが何か、楽器を演奏できるという話は今までに聞いた事が無い。楽器が演奏できるとしたら、貴族の人間か、演奏家を目指す者達に限定される。

一般教養とは違う楽器の演奏技術を、セドリックが習得しているとは考えられなかった。

理解が追い付かない状況に、一人首を傾げる。

「もしかして君は、セドリックから何も聞いていないのかな」

ジャックと目が合った拍子に突如話を振られ、思わずびくりと肩が揺れた。

控えめに頷くと、「やっぱり話していないのか」と言葉を漏らし、呆れた様に笑う。

「セドリックは何故だか、幼少期からピアノが並外れて上手かったんだ。それこそ、プロの演奏家も舌を巻く程の腕前でね。ピアノが弾ける人間など、演奏家か貴族様か位だ。だから演奏家が足りなくなつた時に、よくセドリックの力を借りていたんだよ」

「……そう、だったのね」

「だが昔から、セドリックはピアノを弾く事を酷く嫌がつてね。それに、何故ピアノが弾けるかも教えてくれなくてな。それだけの腕があるというのに、演奏家にならないなんて勿体ない」

腕を組み、劇場の壁に凭れ掛かつたジャックが深く溜息を吐く。

「——セドリックに、そんな特技が……」

初めて耳にした事実。彼の事が知れて嬉しい反面、夫婦になつたからといって何でも知っている訳でも、教えてくれる訳でも無いという事を痛感し、僅かに胸が痛んだ。

誰にだって、思い出したいくない事や他人に知られたくない事だつてある筈だ。そんな当たり前の事すら忘れてしまう程、私はセドリックに対して盲目らしい。

気を抜けば溢れてしまいそうな様々な言葉に、きつく口を結ぶ。

「アリスにお前の話をしたんだ。そしたら、公演までのお前の六日間を買い取らせて欲しいと」

「随分と勝手だな」

「金なら幾らでも出すと言ってる。頼むよ、セドリック」

ジャックの懇願に、セドリックは顔色一つ変えない。この様な状況に慣れているのだろう。

「悪いが、今回は力になれない」

素っ気なく告げたセドリックが、ジャックにチラシを突き返した。

「待ってくれ、頼む。もう時間が無いんだ。お前もあの時みたいに子供じゃない。勿論、お駄賃程度で済ませようなんて思っていないぞ」

「金が問題なんじゃない。とにかく、俺はやらないからな」

セドリックが少々乱暴に、私の腕を掴んだ。そして足早にその場を離れようと、掴んだ腕を強く引く。

「待ってくれ！ 演奏家は散々探したんだ。もう頼れるのはお前しか居ないんだよ」

今度はジャックが、私の腕を掴んだ。セドリックに掴まれた方の、反対側の腕だ。ジャックの方へ傾いた私の体に、セドリックの表情が歪む。

「エルに気安く触るな。何度言っても無駄だ。仮に三百ポンド積まれたとしても、俺はやらない」

セドリックが珍しく声を荒げ、私の腕を掴むジャックの手を振り払った。

「なんで駄目なんだよ。昔は二つ返事で引き受けてくれたじゃないか！」

「あの時とは状況が違う。お前も言ったように、俺はもう子供じゃないだ。そんな事にいちいち関わってられない」

両者共に一歩も引かぬ口論。終わりの見えない不毛な争いに少々嫌気がさし、小さく溜息を吐いた。

周囲の人達も、何事かと此方に怪訝な瞳を向ける。注目を集める事への不快感もあり、後先考えずに二人の会話に口を挟んだ。

「——私なら、お手伝い出来るかもしれませんが」

もう一年もピアノに触れていないが、屋敷では優秀な家庭教師ガツアネスの元でレッスンを受けていた。課題曲は全て合格し、自由曲でも評価をされる程の腕だ。プロの演奏家に比べれば遥かに劣るが、演奏家が見つからないのなら止むを得ないだろう。

私の言葉に、二人の口論が止まる。

集まる二人分の視線に思わず怯ひるんでしまいそうになるが、それでもアリスの想い

が潰れてしまうのは嫌だった。

勿論、大きな舞台での演奏経験も、一度に沢山の譜面を覚えた経験も無い。もしかすると、戦力にはならないかもしれない。だがそれでも、居ないよりかは幾らかマシだ。

パッと明るくなったジャックの表情。それと相反して、セドリックが顔を青く染めた。

「お前、何言ってるんだよ！」

「だって、このまま演奏家が見つからなければアリスのコンサートは中止になってしまうのでしょうか？ ピアノにはそれなりの自信があったの。やってみないと、分からないけれど……」

セドリックの表情が、焦りの混じったものに変わる。

「そうかもしれないが、人だって大勢来るんだ。あまり、目立つ事は……」

ジャックの手前上か、言葉を濁したセドリックが私の腕を掴んだ。ジャックから少し距離を取り、私に額を寄せる。

「有名な歌姫なんだろう？ お前の両親、もしくはは使用人……あとは、知り合いの貴族とか……そんなんが観に来たらどうすんだよ。自ら居場所を公開するような事す

んな馬鹿」

「皆アリスに夢中で、演奏家が私だなんて誰も気付かないわ。それに、私だってアリスの歌声をもう一度聴きたいのよ……」

「もう一度……？　アリスに会った事があるのか……？」

「会う……というか、父がアリスの大ファンだったの。だから一度公演を観に行つた事があつて……。確か、マリア・ウィルソンの最後の舞台に」

私の言葉に、彼の顔が更に青く染まった。

「だったら猶更だ！　お前の父親が公演を見に来たりなんかしたら一貫の終わりだぞ！　お前自分の状況分かってんのかよ！」

「そんなに怒らなくたっていいじゃないの！　だったら、貴方が代わりに出ればいいでしょう？」

「だ、だから、それは出来ないって……！　何回言わせるんだよ、物分かり悪い奴だな……！」

ジャックとの口論を止めた筈なのに、今度は私と彼が口論になってしまった。痴話喧嘩だと思われているのか、街行く人は私達に鬱陶しいとでも言うような視線を投げ掛けてくる。

「ああ、くそ。なんだよ、面倒くせえな」

人から注目される事が嫌いなセドリックが、人目から逃げる様に髪をぐしやぐしやと掻き乱し、私に背を向けた。

「分かったよ！ やればいいんだろ！」

セドリックが吐き捨てるようにそう言っ、ジャックの手からチラシを奪い取る。

「ああ、助かるよ！ お前ならそう言ってくれらと思っただ」

安堵と少しの疲労を顔に滲ませたジャックが、セドリックの肩を叩きながら笑った。

ジャックと共に、劇場の中へと消えていくセドリック。その背がどこことなく「ついてくるな」と言っている様で、仕方なく劇場の壁に凭れ掛かり彼が戻ってくるのを一人待った。

XXIX Lost time

セドリックがジャックの頼みを受諾して約三日。

その日からセドリックは仕事の予定を全てキャンセルし、朝から晩まで劇場に籠る生活をしている様だった。

私が目覚める頃には彼の姿は無く、夜は眠った後に帰ってくる。彼と顔を合わせる時間は殆ど無く、やつとの事で顔を合わせても疲労からなのか彼は常に機嫌が悪かった。

自身を苛むのは、嫌がる彼に無理矢理引き受けさせてしまった罪悪感。彼が何故頑なに出演を断っていたのかの理由も聞かず、あの様な行動に出してしまったのは完全に自身の落ち度だ。

それに、人目を避ける生活を心掛ければならないと再確認したばかりだというのに、後先も考えず「自分が力になれる」だなんて言ってしまった事も間違いだった。

深夜0時半。普段なら、もうとつくにベッドに入っている時間だ。だが今日は、彼と一言でも会話を交わしたくて中々ベッドに入れずにいた。

リビングを照らす燭台の火を眺めながら、テーブルに突つ伏し彼の顔を思い浮かべる。

劇場に籠った彼が、どの様な生活をしているのかは私には分からない。

日中、セドリックとジャックの分のサンドイッチを作つて届ける準備まではしたものの、公演までの僅かな時間を邪魔してしまつたら困ると、結局届けに行くことが出来なかつた。そのサンドイッチは、たまたま家に遊びに来てくれたマーシャと分け合つて消費する事が出来たが、セドリックの生活は結局分からず終いである。マーシャもセドリックと三日前から顔を合わせていないらしく、彼が今どうしているかは分からないらしい。

燭台の蝋燭に灯った火が揺れる程、大きな溜息を付き瞳を閉じた。

ちゃんと、睡眠はとれているだろうか。しっかりした食事を、とっているだろうか。ジャックと、また口論にはなっていないだろうか。頭に浮かぶのは、彼の事ばかりだ。

やはり、今日サンドイッチを届けに行けば良かった。彼に会わずとも、ジャックやその他スタッフなどと会って話を聞く事は出来ただろう。

——広い部屋に一人きり。

孤独感と寂しさに苛さいなまれながらも、ただ只管ひたすら彼の帰りを待ち続ける。

机に突っ伏したままうとうと、現実と夢の間を彷徨さまよっている全てが曖昧な時間。無理な体勢から少々息苦しさを感じながらも、僅かな人の気配で目を覚ました。

瞳を開いた先、最初に捉えたのは最後に見た時よりも短くなつた燭台の蝟燭。その次に時計に視線を向け、知らぬ間に四十分も経過してしまつた事を知つた。

「——こんな所で寝てたら風邪引くぞ」

頭上から聞こえた、最愛の人の声。慌てて顔を上げると、疲労を顔に滲ませたセドリックと視線が交わつた。

肩に掛けられているのは、普段眠るときに愛用しているブランケット。彼が掛けてくれたのだと瞬時に覺り、その些細な優しさに何故だかじわりと涙が滲んだ。

「——おかえりなさい。長い時間、お疲れ様」

彼にお茶でも出そうと、椅子から腰を上げる。だが、すぐさま彼の手がそれを制した。

「風呂と着替えて帰ってきただけだ」

彼のその一言がやけに刺々しく感じ、胸がチクリと痛む。

「ご飯は？　ちゃんと食べられている？」

「ああ、ジャックが軽食を用意してくれているからな」

「睡眠は？　顔色が悪いけれど、ちゃんと眠れているの？」

「……お前が心配する事は何もない」

寝起きで頭がはつきりとしていないからか、それとも一人の時間が長かった不安からか、まるで問い詰める様な言葉が口から零れて止まらない。そんな私に、彼は少々鬱陶しそうな声音で返答する。

「あまり根詰めすぎると、身体を壊してしまうわ」

チェストの中から着替えを取り出すセドリックの背に、それでも尚止まらない言葉を投げかける。

「コンサートの途中で倒れたりなんてしたら大変。お願いだから、もう少し休んで

「——」
ボタン、と大きな音が部屋に響き渡る。その音に、言葉が途切れ肩が震えた。

私を黙らせたのは、彼がチェストの扉を乱暴に閉めた音。

——お前が心配する事は何もない。

そう彼が言った時点で、言葉を止めておけば良かった。

だが、後悔してももう遅い。

「——うるせえな」

表面張力で保っていた水が、決壊した様な。そんな例えがしっくりくる、彼の静かで強い苛立ちの籠った声。

「……お前が、あの時余計な事を言わなければ……こんな事しなくて済んだんだよ」
その声は、淡々としている様で僅かに震えている。

「引き受けた以上、仮に身体を壊してもやるしかねえだろ。公演を含めたこの六日間で、一年仕事をしなくても生活出来る位の金積まれてんだ」

此方に背を向けている所為で、彼の表情は見えない。だが、その苛立ちは痛い程に伝わってくる。

「ああ、でも——」

ゆつくりと振り返り、彼が私と視線を合わせた。

「——お前が心配してるのは、俺の事じゃねえか」

その顔に浮かんだ、嘲笑にも似た悲しげな表情。

「俺が身体壊して、公演中に倒れたりでもしたら、あの女のコンサートが台無しになるもんな」

「ち、ちがつ……」

「何が違うんだよ」

咄嗟に否定を口にするも、彼が高圧的に私の言葉を遮る。

私を見つめるローズレッドの瞳。いつも、その瞳が宝石の様で美しいと感じていた。だが今の彼の瞳には光が無く、まるで深海の様な闇を孕んでいる。

沸き上がるのは、いつか父に感じた恐怖心に似た感情。咄嗟に彼の瞳から、視線を外す。

その瞬間、彼がふっと溜息を吐く様に笑みを零した。

「……本当に、何も違わないのかよ」

独り言の様に呟いた彼が、私の隣をすり抜け脱衣所の扉を開く。頭の中を埋め尽くすのは、酷い後悔と彼への弁解。

何故彼の気持ちを考えずに、あの場で勝手な行動を取ってしまったのだろうか。自分の意に反する状況が、どれ程苦痛か私は誰よりも知っている筈なのに。

——私は他でも無い「貴方」を心配している。アリスの事もコンサートも、どうだっていい。ただ貴方に苦しい思いをして欲しくない。

幾らだつて言いたい事はあるのに、まるで喉奥が塞がってしまった様に声が出ない。

ぱたりと、脱衣所の扉が閉まる。

「——違う」

そこで漸く、零れた言葉。

今更弁解したつてもう、彼はこの部屋に居ない。

「私は、ただ——……」

ぼつりぼつりと溢れた涙がテーブルに落ち、小さなシミを作っていく。

引き止めたかった。

引き止められなかった。

自身の行動も、彼の棘のある言葉も、容赦無く自身の心を抉る。その中で何よりも失望していたのは、彼の意志を尊重出来なかった自分自身だった。

貴族令嬢は、傲慢で我儘だ。全てを自分の思い通りに動かそうとする、貴族社会の中でも厄介な存在。

自分は、違ふと思っていた。自分は、そんな人間では無いと信じて疑わなかった。でも、違った。

私は、今も何処かで傲慢に、我儘に生きている貴族令嬢と何も変わらない。

最愛の彼を苦しめる位なら、屋敷で一人死を願ったあの頃に戻ってしまった方が余程マシだ。

そんな思いが、自身の心を侵食するように黒く染めていった。

テーブルに突っ伏して、どれ程時間が経過しただろう。彼は脱衣所へ行つたきり、戻ってきていない。

確か風呂と着替えに、と言っていた筈だ。疲れた身体を癒すべく、脱衣所から繋がる浴室で、ゆっくり入浴でもしているのだろう。

残された私かというと、テーブルに突っ伏したまま、零れた涙を拭う事も考える事も出来ずにただ一秒一秒時間を無駄に消費している。虚無感に満たされた自身の心は、暫く元通りになりそうにない。

私はこの一年間で、大きく変わった。

一つは、表情が豊かになり、口数が増えた事。そして二つ目は、心が弱くなった事。

屋敷に居た頃は、両親にどんな事を言われても、何をされても、それらをどうにか消化する事が出来た。

なのに今は、少しも消化する事が出来ない。

——彼に嫌われてしまったのではないか。

——彼はもうこの家に帰ってこないのではないか。

——いつか離縁を言い渡されてしまうのではないか。

——別の女に彼を取られてしまうのではないか。

数えだしたらキリが無い程の不安に、今にも押しつぶされてしまいそうだ。

もう少し、しつかりしなければ。これから先、彼と今日のように——いや、もっと大きな喧嘩をする事だつてあるかもしれない。その都度、今の様に心を痛めていたら幾つ心があったつて足りないだろう。

そう、自分に言い聞かせる様に頭の中で何度も唱えた。だがそれでも収まる事のない不安に、今度は苛立ちが沸き上がる。

いい加減身体を起こそうと、胴に力を入れる。だが、それと同時に脱衣所から物の音が聞こえた。

跳ね上がった鼓動に、自身の動きがびたりと止まる。

リビングに響き渡った、錆びを感じさせる扉の開く音。僅かに感じる人の気配と、心臓が張り裂けそうな程の緊張感に思わず呼吸が止まる。

数える事五秒。この間に、背に感じていたのは彼の視線。

先程と同じ音を響かせ扉が閉まり、床の軋む音が自身にゆっくりと近づいてくる。脱衣所から出た彼は、今の私を見て何を思ったのだろうか。

そんな疑問を抱いても、過度な緊張感と恐怖心から身体が動かず、彼の顔を見る事が出来ない。

「——エル」

耳に心地よく届く、彼の低く優しい声。先程の刺々しい声では無く、いつも通りの彼の声だ。

ほんと、彼の掌が頭の上に乗る。そしてそのまま髪を梳く様に、優しく私の頭を

撫でた。

「——ごめんな」

彼が変わらない声で囁く様に告げたのは、たった一言。

顔を上げて、何か言わなければ。私も彼に、ちゃんと謝らなければ。なのに、テ
ーブルに突つ伏した身体は石化してしまつたかの様に動かない。

——その理由は、先程と同じ緊張感や恐怖心か？

——いいや、違う。

今此処で顔を上げ、彼の顔を見てしまえば、彼が劇場に戻つてしまふのを拒んで
しまふからだ。

きつと、彼に縋つて泣いて、その手を離す事が出来なくなる。優しい彼なら、き
つとこのまま私の傍にいる選択をするだろう。

そうすれば、今以上に彼に残された時間は短くなる。

私一人の我儘で、彼の努力を無駄にしてはいけない。

彼だけじゃない、アリスも、ジャックもだ。幾ら小さなコンサートだとはいえ、
準備には相当な時間と人員を掛けている筈だ。

後先考えずに余計な口出しをしてしまったのなら、せめてこれ以上は彼等の迷惑

にならない様に。これ以上、彼の負担にならない様に。

彼の手が名残を惜しむ様に私の髪から離れ、ゆつくりと床が軋む音が遠ざかっていく。

——大丈夫。あとたったの三日だ。三日過ぎ去れば、またいつも通りの日々が戻ってくる。

その後、私が感情に任せ声を上げて泣く事が出来たのは、家を出て行った彼の足音が遠ざかり、再び静寂がこの部屋に訪れた頃だった。

XXX Proof of anxiety

カチカチと、秒針の音が響くりビュングにて。

手元にあるのは、上質なイヴニングドレスとアイビーを象かたどった愛らしい耳飾り。明日の夜に控えたアリスのコンサートの為にと、マーシャが貸してくれた物だ。

そのドレスは非常に質が良く、貴族が身に着ける物と同等と言っても過言では無

いだらう。これ程に上質なドレスに触れたのは一年ぶりだ。汚さない様に慎重に畳み、薄い布袋の中に丁寧に仕舞い込む。

彼が私に買い与えてくれる服も、私や彼の階級の人間が普段着として身に着けるには贅沢すぎる程のものだ。だがいざこうして上質なドレスに触れてみると、普段着とはまた違うのだと再確認させられた。

屋敷に居た一年前。私はこれと同じ程上質な服を毎日身に着けていた。それも、貴族だった私にとっては当たり前である日常の一つであり、上質な服以外の物を知る事も無かった。

少しでも裾が解れば直ぐに仕立て直し、用途に合わせて一日に何度も着替えをする。そして、生地が少しでも傷み、汚れば処分をする。そんな生活を、今もきつとこの世の中の貴族は行^{おこな}っている。

この国の階級制度は本当に恐ろしいと、ドレスが仕舞われた布袋を眺めながら改めて思った。

何気なしに視線を向けた先の時計は、二十二時四十分を指している。そろそろベッドに入る時間だ。

テーブルに手を突き、ゆっくりと椅子から腰を上げる。

ふと、ハンガーラックに掛けられた彼のコートが目についた。スーツと同じ、黒色のコートだ。

そのコートを羽織った彼はまるで吸血鬼のようで、初めて見た時は一人鼓動を高鳴らせていたことを覚えている。

それは、少女時代に読んだ小説の影響だ。獲物である人間を惹きつける為に、美しい容姿に姿を変えた吸血鬼の物語。

その吸血鬼はセドリックと同じローズレッドの瞳を持ち、真つ暗闇の様な黒のスイーツに黒のコートを身に纏っていると書物には表記されていた。

その物語は、確か「十二月の満月」の意味を持つタイトルだったと記憶している。当時労働者階級の少女達の間で流行している事を知り、モーリスに無理を言っ街で買っ来てもらったのだ。庶民の読む安価な書物を両親が嫌っていたのを知っていた為、私はその本をベッドの下に隠しては毎晩こっそりと読み耽っていた。

両親から忌み嫌われ、死を望む令嬢と、そんな令嬢に恋をした吸血鬼のラブストーリー。私の元にも、全てを奪い去ってくれる吸血鬼が現れないかと、毎晩そんな事を思いながら眠りについていた。

彼のコート姿を見るまでその物語の事はすっかり忘れていたが、初めてその姿を目にした時は「セドリックこそが私が望んだ吸血鬼ツァンバイなのではないか」とすら思った程だ。

その話を彼に伝えた際、彼は「王子様なんて呼ばれるよりかは幾らかマシだな」と満足とも不服とも言い難い表情で珍しくも笑って見せてくれた。些細な事だが、私にとってそれはセドリックとの大切な思い出だ。

一昨日の夜、彼にあんな事を言わせてしまった罪悪感からか、その事を思い出すだけでも胸が痛む。彼は、私の事を嫌いになっちゃっただろうか。私を、疎うとましく思ってしまっただろうか。

そんな事はないかと思う事が出来れば良かったのだが、今の私にはどうしてもそう思う事は出来なかった。

取って付けた様な言葉だと、受け取られてしまうかもしれない。だけど、このまま何もせずに眠りにつき、当日の朝を迎えるよりかは幾分マシだと思った。

自己満足にも似た行為だが、私が彼を心から想っている事を伝えるべく、棚から一枚の紙とペンを取る。

——I look forward to seeing you in good shape tomorrow. 《明日、貴方の格
好良い姿が見られる事を楽しみにしています》

味気の無い、たった一文のメッセージ。手に取ったその手紙に、彼の演奏が、コ
ンサートが無事成功しますようにと祈りを込めてキスを落とす。

今晚も、彼の帰宅は遅くなるのだろう。燭台の元にこの手紙を置き、軽く息を吹
きかけて蝋燭の火を消した。

一瞬にして、暗闇に包まれる部屋の中。何も見えない部屋を一度見渡した後、手
探りで部屋の壁を探し出し壁伝いでベッドを目指す。

いつの間にか、暗闇への苦手意識は自身の中から消え去っていた。それは屋敷で
の生活を忘れつつあるからか、それともセドリックのお陰かは分からない。だが今
は、灯りが無い暗い場所でも不安に陥る事無く行動する事が出来ていた。

この五日間、無理矢理考えない様にしていたジャックのとある言葉。
私がセドリックの妻だと知るなり、ジャックは大層驚いた様にセドリックに「女

の趣味が変わったのか”と尋ねた。

セドリックはジャックの問いを全て否定で返していたが、実際の所は分からない。私を想つての嘘の可能性だってあり得る。

ジャックは、良くも悪くも素直な人なのだろう。思った事を全て口に出してしまふ性格の様だ。ジャックと会つたのはたった一度だけだが、二人の会話を見ていれば分かった。

——セドリックの、女性の好み。彼は大の女性嫌いであるが、男性である以上少なからずはあるのではないか。

辿り着いたベッドに潜り込み、そんな事を考える。

それに、ジャックの言つていた”ブロンド髪のお嬢さん”というのも気になる言葉だ。同時に”別れたのか”とも問い掛けていた。

彼の過去の女性関係を、詮索するのは褒められた事では無い。だが、どうしても気になってしまう。

眠る前に、ジャックの言葉を思い出すべきでは無かった。一度考えてしまうと、沼に嵌ってしまったかの様にその考えから抜け出せなくなる。

「……ああ、もう」

溜息と共に声を漏らし、寝返りを打った。仰向けになり、天井に手を伸ばす様に左手を上げる。

本来ある筈の結婚指輪は無く、薬指は空っぽ。彼と繋がる指輪の一つでもあれば、この不安は収まるのだろうか。

再び溜息を付き、乱暴に左腕をベッドに下ろした。

——今日はもう眠ろう。

早く眠って、全て忘れてしまおう。苛立ちに似た妙な感情を抱きながら、瞳を閉じた。

*

自宅のベッドの上。僅かに苛立ちが残ったまま、瞳を開く。

今日はやけに寝付けない。色々と深く、考えていたからだろうか。無意識的に左手の薬指に触れ、溜息を漏らす。

今は、何時頃だろうか。眠った感覚は殆ど無いが、きつとベッドに入ってからある程度の時間が経過しているに違いない。そう思い、時計を見ようと寝返りを打つ

た。

「——！」

だが、目に入ったのは時計では無く、最愛の夫の寝顔。いつの間にか、帰ってきていた様だ。

知らぬ間に、深い眠りにでもついていたのだろうか。彼が帰ってきて、更には同じベッドで眠っていたという事に全く気が付かなかった。

こうして彼が隣に居る感覚がやけに久しく感じ、鼓動が速くなる。

壁時計に目を遣ると、深夜の二時半を指していた。コンサートの前日だからか、今日は普段より早めに帰ってきた様だ。

彼を起こさぬ様に、彼の掌に自らの掌を重ねる。

あの口論があつた後、彼とは一度も会話をしていない。テーブルに突つ伏した私に彼が声を掛けた時、顔を上げていれば良かったのだろうか。

今から考えてみると、そんな気さえしてくる。

ゆっくりと身体を起こし、彼の顔を正面から見つめた。不防備な寝顔に、開いたシャツの襟元。白い、首筋。

——これは不安の表れか、それとも悪戯心か。

どちらにせよ、褒められた行為では無い。そんな事、分かっている。

彼の首筋にゆっくりと顔を近づけ、その白い首筋にキスを落とした。その薄い皮膚を少し口に含んで、食む様に、啄つばむ様に、"跡"を付ける。

私は、彼のように上手くない。その為、付けた跡は決して美しいものとは言えない。幾ら皮下出血の跡だったとしても、これ程下手なものであれば誰も"所有印"だなんて気付かないだろう。

彼の、左手の薬指にそつと指を這わせた。当然、指輪は無い。

彼は私のものだと、証明出来る物が何も無い事が悲しく、じわりと涙が滲んだ。夫婦だと書類上で証明されたとしても、私達が愛し合った証は無い。彼は優しく、私を大切にしてきてくれたけれど、それだって私が彼を愛している気持ちとは一致していないかもしれない。

——愛とは、一体なんだろうか。

屋敷に居た頃の愛読書、とある男性に恋焦がれた女性の言葉「貴方が居ればそれでいい」。

当時はそれを理解していた筈なのに、今の私には彼女の言葉がとても悲しいもの
に思えた。

XXXI Swirling black

コンサート当日。

現時刻は十七時四十五分、開演まで残り十五分といった所だ。圧迫感を抱くホール内の人の多さに、僅かな眩暈を覚える。

アリスの名は時々新聞でも目にしていたが、街の小さな劇場にこんなにも沢山の人が押し寄せる程だとは思いつまなかつた。『世界的歌姫』という言葉の意味を、改めて実感する。

それは、どうやらジャケットも同じだった様だ。先程顔を合わせた際には、嬉しさを抑えきれないといった表情で沢山の苦労話を聞かせてくれた。

コンサートの入場チケットは、販売を開始した三日前の時点で完売。完売後も、チケットの再販は出来ないのか、立見^{たちみ}でも構わないからなどと沢山の人が押し寄せたらしい。

そんな中で、チケットを入手出来なかつた熱烈なファンの想いを逆手に取り、人間でチケットの高額取引をする輩も現れたのだとか。

アリスの人気は凄まじく、ホール会場に入った今もアリスの歌声を期待するファンの声が各席から聞こえてくる。

その声を聞いている現在の私はというと、自身の身を隠す様にホールの出入り口と壁の間に僅かに出来た空間に潜んでいた。何故こんな場所に居るのかというと、その理由は紛れも無く周囲の人間に私の存在を知られない為だった。

今日は此処に、ロンドン中から沢山の人が押し寄せている。観客は、階級も年齢も、性別も関係ない。親しい街の人達も居れば、社交界で顔を合わせた事のある貴族だつて来ている。当然、そんな人達に私の存在を気付かれれば大事になる事間違いない。

私が重い病に侵されているという父の話が社交界のどこまで広まっているのかは分からないが、私が元エインズワース家の令嬢だと知っている人物と鉢合わせてしまったら、それこそ一貫の終わりである。夫がピアニストの代理をしているだなんて口が裂けても言える筈が無く、上手い言い訳も思いつきそうには無い。

だから私は今日、このコンサートで誰とも会ってはいけない。更には、此処に来

た事を後々のち公言する事も出来ない。

万が一貴族の人間に見られたとして、それが噂になったとしても、街の人達には公演に行つてはいないと言えれば私が元エインズワース家の人間だと勘付かれる心配が無くなるからだ。

私の存在を貴族に知られてしまう事も勿論問題だが、街の人達に私が元貴族の人間だという事を知られてしまう事も大きな問題だった。街の人達の殆どが貴族に良い印象を抱いておらず、中には上流階級というだけで忌み嫌う人達も多い。きっと私が元貴族の人間だと知ったら、沢山の人達が私から離れて行つてしまう。中には、「騙された」なんて言葉で私を責める人も出てくるかもしれない。良くしてくれる人達にその様な疑いを掛ける事は不本意だが、悲しい哉かなそれが現実だ。

だが、それも致し方無いだろう。階級が下というだけで暴言を吐かれ、命がゴミの様に扱われる。

もし私が生まれた時から彼等と同じ階級だったとしたら、彼等と同じ様に離れていくかもしれない。

そうならない為にも、私が元貴族だという事は街の人達には知られない様にしなければならぬのだ。

私達は、決して交わる事は無い。同じ人間だというのに、まるで種族が違うかの様に住む世界が違うのだ。

階級制度は決して無くならない。それこそ、この国が一掃されでもない限り。

近くに人の気配を感じ、目深に被ったフードを引つ張り顔を隠す。マーシヤに借りた美しいイヴニングドレスも、身を隠すためのローブで隠れてしまっていた。内心残念に思いながらも、仕方がない事だと自身に言い聞かせる。

——公演開始時間まで残り十分。

ホール内の明かりが少しずつ落とされていくのを見つめながら、壁の隙間から顔を出す。

ホールはほぼ満席。皆各自席に着き、公演を今か今かと待ち侘びている。その視線は、カーテンの降りたステージに向けられていて、誰も私の存在に気付く事は無い。

そろそろ問題無いだろうと、壁の隙間から抜け出しホールの壁に凭れ掛かる。

本来、この様なコンサートで席を取らず、立って観賞する事は非常に珍しい。勿論全ての公演がそうだとは言いい切れないが、用意された席に着いて観賞する事が基本的なマナーだ。

だが今回、公演の直前でセドリックに無理を言つて代理を頼んでしまった負い目からか、ジャックがどんな要望でも聞き入れると言つてくれた。私は極力人との接触を避けなければならぬ為、今回その言葉に甘え、全座席の後ろであるこの場所での鑑賞を願ひ出たのだ。

ジャックは寧ろ、最も観賞に適した最前列を希望すると思つていた様で、最前列のチケットはある程度抑えておいてくれていたらしい。その為理由を問われたが、曖昧に返答すると「人にはあまり詮索されたくない事があるのだろう」と言つてそれ以上は聞かず快諾してくれた。

——公演開始まで残り五分。

周囲の目を気にしながらも、初めて聴くセドリックの演奏と世界を魅了するアリスの歌声に、期待に胸を高鳴らせる。

彼女の歌声は、当時父に無理矢理連れていかれた悪い記憶を良いものに塗り替え

てしまう程素晴らしいものだった。そんな彼女と最愛の夫が同じステージに立つたなんて、なんだか私も鼻が高い。

フードの下で一人小さく笑みを零し、カーテンの向こう側に居るであろうセドリックに想いを馳せる。

開演時間まで残り一分となり、遂にホール全ての灯りが落とされた。何も見えなくなった暗いホールに、人目を気にする心配が無くなり安堵の溜息を漏らす。

目深に被ったフードを外したのと同時に、ホール中に開演を知らせるブザーが鳴り響いた。ゆっくりと上がっていくカーテンに、多くの人が瞳を輝かせただろう。

——だが私は、カーテンが上がった瞬間奇妙な不安感を覚えた。

それが何か、言葉にする事は難しい。

胸の中の期待が不安に塗り替わっていく事に自分自身が付いていけず、咄嗟に胸に掛けたロケットペンダントを握りしめた。

カーテンが上りきったステージ。ステージの上に立つ、まるで女神の様に美しい女性——アリス・ブランシェット。

彼女の直ぐ隣に置かれた大きなグランドピアノの前には、黒いタキシードに身を

包み、顔に掛かった長い前髪も上げ正装をした最愛の美青年。

客席に向かつて一礼したアリスが、ピアノの前に座る彼を一瞥する。そして、滑らかなピアノの旋律と共に美しい歌声がホールに響き渡った。

それはまるで、天使の讚美歌の様な。高慢な貴族さえも、彼女の歌声に時を忘れ感嘆を漏らす。

だが、何かがおかしい。確かに彼女の歌声は美しい、本物の歌姫だ。なのに、私の胸には全く響かない。

ふと一瞬、演奏をする彼と目が合った様な気がして、無意識的に手を振った。だが直ぐに、この距離で目が合う筈が無いと気付きその手を下す。

——ああ、そうか。

彼と、今迄こんなにも離れた事が無かった。遠くから、彼を眺める事も無かった。

彼の奏でる音色は何よりも美しく、プロの演奏家だと言われても信じて疑わない程だ。そんな事も、私は知らなかった。

雲の上の様な存在であるアリスと、彼は同じステージに立っている。それだけで、彼がまるで私の手の届かない遠い場所へ行ってしまった様に感じた。

あの場所に居る彼は、本当に私が愛したセドリックなのだろうか。本当に、私の

最愛の夫なのだろうか。そんな疑問さえ抱く程、今の彼はとても遠かった。

やはり、マーシャに同行をしてもらえば良かった。彼女は今日の公演を凄く気に掛けてくれていて、公演寸前まで何度も同行しようかと提案し続けてくれていた。確かに、彼女に同行して貰えれば安心感も大きい。だが、その為には彼女に今晚の仕事全てキャンセルして貰わなければならなかった。

幾ら彼女本人がそれを了承しても、私自身が快くその好意を受け取る事が出来ない。その為、少々不安を抱えながらも彼女の提案を断った。

もしマーシャがこの場に居たら、私になんと声を掛けるだろう。私はなんと、彼女にこの感情を伝えるだろう。胸の中を渦巻く黒い感情が止まらず、そんな事ばかり考えてしまう。

全くズレの無い、セドリツクの演奏とアリスの歌声。二人の相性はこの上なく良いのだと実感させられる。

まるで、夫婦なんて薄っぺらな関係なのだと、それよりもっと深い絆があるのだと言われている様で、胸が激しく痛んだ。

無意識的に触れるのは、左手の薬指。本来あるべき物が無い事実、それは今迄特別気にした事は無かった。だが、昨晚からそれが妙に頭から離れなかった。

私と彼を繋ぐものとは、一体なんだろう。どれだけ愛を囁き合っても、どれだけ身体を重ねても、どれだけ同じ時間を過ごしても、それ等は全て形には残らない。私達が愛し合った証は、何処にも無い。

胸に掛けられたロケットペンダントを再び握り、強く瞳を閉じる。

「——ねえ、見て」

突如聞こえてきたのは、女性の潜めた声。瞳を開け、声の方向へと視線を向ける。

「——あのピアノを演奏している男性、とても素敵の方だけど、有名な演奏家かしら？」

その言葉は、どうやら隣の席に座る同行者の女性へと向けられた言葉の様だった。

「——いえ、見た事無いわ。あんなに素敵なお男性、一度見たら忘れられないわよ。無名の演奏家かもしれないわね」

「——コンサート終わったら、彼に声掛けてみようかな」

「——よしなさいよ、あんた旦那が居るじゃない」

「——でも、旦那の百倍……いえ、千倍恰好良いわ。逃したらきつと後悔する」

コンサート中に会話をするなんてマナーに欠ける行為だが、今はマナーよりも、セドリックが女性からその様な目で見られている事の方が耐えられなかった。

耳を塞ぎたくなる様な会話に、再び強く瞳を閉じる。演奏に、アリスの歌声に集中しよう。そう何度も、心の中で唱え続ける。

「——でも、見て……、あのアリスの瞳」

だがそれでも、聞こえてきてしまう二人の会話。

「——あの男性を見ている瞳よ。あの二人、絶対にただの歌手と演奏家の関係じゃないわ」

女性の言葉に釣られる様に、瞳を開きアリスに目を向けた。

「——ああ、本当。さっきからずっと、あの演奏家の事を見ているわね」

「——確か彼女、次のロンドン公演を最後にパリに移住するんだっただけなら。演奏家の男性と結婚をするんだとか、新聞で読んだ気が……」

「——あら、そうなの。……って事は、あの男性がアリスの……」

冷汗が、背筋を濡らす。張り裂けそうな動悸は、まるで私を急かす様だ。

気が付けば、私の足はホールに出入口へと向いていた。公演中だという事も忘れ、ホールの重い扉を押し開く。そして僅かに開いた扉の隙間から、身体を捻じ込む様にして外へと飛び出した。

人において充滿したホール内とは違い、澄んだ冷たい空気が身体を包む。

先程迄の混雑が嘘の様に、ホールの外には誰も居ない。張り詰めていた緊張が解け、思わず溢れる涙に嗚咽を漏らした。

止め処無く頬を流れ落ちる涙は、何の感情が齎もたらすものか。苦しい感情で埋め尽くされた頭では冷静に考える事が出来ず、ただ感情のままに泣きじゃくる。

僅かに耳に届くアリスの歌声。ただ今は、それすらも辛くて逃げる様に劇場を後にした。

劇場の外には、アリスの姿を一目見ようと群がる人達。ローブのフードを被り直すのも忘れて劇場を飛び出す私に、周囲の人達が何事かと怪訝な視線を向ける。

だが今はその視線に構う事が出来ず、止まらない涙を時々拭いながら覚束おぼつかない足取りで自宅の方向へと駆けた。

演奏中にホールを出るなんて、この上ない無礼行為。私は屋敷で、一体何を学んで来たのだろうか。

人としての常識すらも、自身の階級と共に屋敷に置いてきてしまったのだろうか。だがそれでも、石畳を駆ける足は止まらない。

「あつ——……」

足が縛れる感覚と共に、履き慣れない靴が足から離れる。そしてそのまま、崩れ落ちる様に石畳の上に倒れ込んだ。

そこで漸く、少々落ち着きを取り戻し小さく息を吐く。

辺りを見渡してみると、そこには見慣れない景色が広がっていた。立ち並ぶ住宅街に、恐ろしくも感じる静けさ。人の気配は無く、見覚えの無い道に焦りを感じる。

だが胸を渦巻く虚無感に、次第にその焦りも消えて行った。

熱く痺れる様な痛みを感じ、自身の足へと視線を向ける。酷い靴擦れを起こしていた様で、踵の皮が捲れ血が滲んでいた。

よく見れば、自身の膝や脛にも幾つか擦り傷が出来ている。倒れた拍子に付いたのだろうか。自身の情けない姿に唇を噛み締め、両手で顔を覆った。

——あの二人の会話が、耳に残って離れない。

セドリックが女性の目を惹く事、アリスの婚約者がセドリックだと思われていた事。そして、自身に重く押し掛かっている事実は、アリスがセドリックを熱の籠った視線で見つめていた事。それも、セトリストの中で最も重く、熱烈なラブソングで。

アリスは女神の様に美しく、まるで天使の様な声で歌う世界的歌姫。それに比べ

て私は、貴族の屋敷から抜け出してきた曰く付きの面倒な女。比較するまでも無い。セドリックがアリスに取られてしまっても、何もおかしくない状況だ。アリスが結婚し、パリに移住する話だって、人伝づてに聞いた話でありどこまでが真実かもわからない。

「——私は、アリスに勝てない」

ぽつりと口に出してみれば、更にその事実が重く押し掛かる。そしてそんな私を追い詰めるかのように、空から大粒の雨が落ちてきた。

空を見上げ、真つ黒の雲を見つめる。

私がこのまま何処か遠くへ行ってしまうたら、セドリックは心配してくれるだろうか。探しに来てくれるだろうか。それとも、面倒な女が居なくなり清々したとも思うだろうか。

左手の薬指に触れ、何度もそこに指輪が無い事実を噛み締める。

全身ずぶ濡れになり重たくなった身体を何とか動かして、石畳に転がった靴を拾い上げた。そして近くの空き家の壁に凭れ掛かり、そのままずると壁に背を擦り座り込む。

そろそろ、公演が終わる時間だろうか。ローブのポケットに懐中時計が入っているが、身体が重く中々時刻を確認する気になれない。

彼の負担にならない為にも、早く家に帰らなければ。

早く家に帰って、普段通りの服に着替えて、それで——……

*

——妙に、懐かしい夢を見た。

不安定な心に染みる、優しく、温かい声。

『——私の名を、お貸し致しましょう』

彼はそういつて、優しい笑顔を見せた。見ているだけで落ち着く、あの優しい笑顔。

『——もし仮に、今後お嬢様がこの屋敷を去る時が来たら。その時は私の姓を名乗れば良いのです』

『——私は如何なる時も、お嬢様の味方で御座います。それにもしその名を名乗って頂ければ、私がこの屋敷を去った後も、お嬢様を見つける事ができるかもしれま

せん』

『——お嬢様』

『——エル、お嬢様』

「——エル、」

XXXII Flash back

外は変わらず土砂降りだ。

公演途中で劇場を飛び出してしまった私は見知らぬ道に迷い込み、そして急遽振り出した雨に帰る事も出来ず空き家の下で蹲うすくまっていた。そこまでは、確かな記憶だ。

だが自分でも知らぬ間に、考え事をしながらその場で居眠りをしてしまった様で、情けない事に私を探しに来てくれたセドリックに起こされ目を覚ました。

そして現在、二十一時過ぎ。私とセドリックは土砂降りの中無事自宅へ戻つてくる事が出来た。今しがた、お互い入浴と着替えを済ませた所だ。

「——足、大丈夫か」

お気に入りのブランケットを肩に掛けぼんやりベッドに座っていると、小さな木箱を抱えたセドリックが二階から降りてきた。

そして徐おもむろに私の足元に片膝を付き、私の足を軽く持ち上げる。

「……大した怪我じゃないわ」

「大した怪我じゃない訳が無いだろ」

今は血を全て洗い流してしまった為あまり目立たないが、確かに彼の言う通り私の足に残された傷は少々——いやかなり深いものだった。人の怪我となるとどんな些細なものでも心配になるのに、自身の身体の事になると途端に興味が失せてしまう。不思議だと思いつながら、私の足の傷をまじまじと見つめるセドリックを眺める。

「靴、脱がすぞ」

「——ああ……」

——手当は自分で出来る。

そう言おうと口を開いたが、言葉を発する前に彼の手がずるりと私の靴を脱がせ

た。

その姿に思わず、「お姫様にひさま跪く王子様のようだ」なんて思ってしまった、顔に熱が上っていくのを感じる。

六日間もともに会話をしていなかったからだろうか。彼の事を今迄以上に意識してしまい、彼の触れている場所が妙に熱を持つ。

素足など、今迄散々ベッドで見せたというのに。込み上げる羞恥心に足を引き、傷が見える最低限の位置までドレスの裾を下した。

その仕草に疑問を抱いたのか、私の足を見ていた彼が顔を上げる。だが、私の表情を見てすぐに何かを察したのだろう。その表情が、僅かに緩められる。

「……お前、本当にそういう所可愛いな」

衝撃的な言葉と共に、徐おもむろに彼が足の甲にキスを落とす。

「——なっ……」

それはあまりに彼らしくない言葉で、自身の聞き間違いでは無いかと疑ってしまった程に信じ難い。だが私の顔を見て笑みを零した彼がもう一度、「本当に、可愛いよ」と呟き、聞き間違いでは無かったのだと覚る。

彼にはあまり、民衆的な言葉を使う印象は無い。事実、今迄に可愛い等の意味を

持つ言葉を囁かれた事はあつたが、今の様に包み隠さずストレートに伝えられたのは初めてだった。

羞恥を通り越し、くらくらと眩暈がする。そのまま後ろに倒れてしまいそうになるのを抑え、彼の手から逃れようと両足を引っ込める。

だが、逃すまいと素早く彼の手が私の足首を掴み、定位置に戻されてしまった。「手当するから、暴れるな」

彼の手は、私の足首を掴んだまま。手当が終わるまでは離してくれなさそうだ。真剣な面持ちで木箱を開くセドリックに、逃亡を諦め足から力を抜いた。

木箱から取り出されたのは、小さくカットされたガーゼと包帯に、いつか見た緑色の薬剤が入られた小瓶。そして、消毒用アルコールだと思われる透明な液体。擦り傷は大した事無いが、靴擦れは皮が捲かれて皮膚が剥き出しになっている程の怪我だ。アルコールで消毒などすれば、当然激しい痛みに襲われる。

「——い、いやっ」

痛みの恐怖から、再び足を引っ込めた。

だがその拍子に、運悪く爪先が彼の手を蹴ってしまい、持たれていたアルコール瓶が滑り落ちる。

「——あ、」

しまった、と思った時にはもう遅い。小瓶が強く、床に叩きつけられる。私達の元を離れ、ころころと遠くの方へと転がって行く小瓶。幸いにも、落ちた衝撃で瓶が割れる事は無く中身の液体も無事の様だ。

転がる小瓶を眺めながら、安堵の溜息を吐いた。

だが、安堵したのは私だけ。

謝罪の言葉を口にする前に、彼が呆れた様に大きな溜息を吐く。

「……まだ怒ってんのか」

彼のその言葉で、先程空き家の下で交わした会話を思い出した。

雨の中の、空き家の下。コンサートを終えた彼と、様々な会話を交わした。アリスがセドリックを熱の籠った視線で見つめていた事、客席の女性が、アリスの婚約者がセドリックでは無いかと噂していた事、それを見て、セドリックがアリスに取られてしまうのではないかと酷く不安になった事。

嫉妬の感情からなのか、彼に素っ気ない態度を取ってしまった。これでは本当に、愛想を尽かされてしまう、本当に誰か別の女性に取られてしまう。そう不安に思いながらも、それでもその態度を改める事が出来なかった。

そんな私に、彼は「なんで怒ってるんだ」と言った。当然私は怒っているつもりなど無かったが、思い返してみれば私のあの態度は、見れば誰だって怒っている様に感じただろう。それに、その時彼を拒絶する様な事を言ってしまったのも事実だ。だがそれでも彼は私の傍を離れる事は無く、更には彼が「アリスという女性に微塵も興味を抱いていない」という事も分かり、綻びを修復する事が出来た。——筈、だったのだが。

「——ご、ごめん、なさい」

呆れた表情で見つめられると、心臓が疼く様な妙な不安感に駆られる。先程アリスのコンサートを見て感じた不安と似ているが、それよりも鮮明に蘇る別の感情。

——これは、紛れもなくあの時の感覚。

「……て、手当も、自分でするから。本当に、ごめんなさい……」

彼の視線から顔を背け、逃げる様にベッドから降りた。床に足を付いた拍子に傷が痛んだが、その痛みに耐え転がってゆく小瓶を追う。

これでは本当に、彼に嫌われてしまう。面倒な女だと思われてしまう。ただでさえ彼は女性嫌いだというのに、これでは本当に——

「——待て」

彼の手が、私の腕を掴んだ。それと同時に、頭の中を回る思考も止まる。

「責めてるつもりは、無いんだ」

ゆっくり吐き出された言葉。それはやけにぎこちなく、彼なりに言葉を選んで話してくれているのだと分かる。

「何か、誤解をさせたなら謝る。だから、そんなに怯えた顔をするな」

早くなる鼓動。安堵と不安が入り混じった妙な感情が渦巻き、それが痛みとなつて胸を刺激する。

私は、屋敷に居た頃から同じ不安を抱えていた。これは両親に対して、使用人に対して、抱いていた感情に似ている。それを今の今迄、私は上手く理解する事が出来ていなかつた様だ。

今自身がどんな顔をしているのか分からず、空いた手で顔を覆う。

「傷の手当は、俺がするから」

彼が私の腕から手を離し、床に転がったアルコールの小瓶を拾い上げた。そしていつもの様に優しくくしゃりと私の頭を撫で、ベッドに座る様私を促す。

促されるままベッドに座り、再び私の前に片膝を付いた彼に視線を向けた。私の足の傷を丁寧の手当してくれる彼をぼんやりと眺めながら、絡まった思考を解いて

いく様にゆつくりと考えを巡らせる。

私は確かに、両親の事を深く愛していた。そして両親も、私と同じ位私を愛してくれていると思っていた。だが、両親が私に与えているもの、そして求めているものは「愛」では無く「エイズワース家に相応しい娘」だという事を、私は歳を重ねる毎に覚った。

そしていつからか、私の中で両親は「恐怖」の対象となった。

私が両親に恐怖を感じていたのは、心優しい使用人達を物の様に扱っていたからだと思っていた。だが、本当はそうじゃなかった。

両親が私を、愛していなかった事に気付いてしまったからだ。

きつと私は、それから目を背け続けていた。それを本当に自覚してしまったら、私は私を保っていられなくなると思ったからだ。

私は必死に、両親の望む私になり続けた。両親の愛を得る為に、自分を偽り続けた。

そしてその感情は、いつしか両親に対してだけでなく使用人に対しても伝染した。私の所為で使用人が傷付く。私の行動一つで、使用人の人生が変わる。心優しく、私を慕ってくれていた彼等の「愛」が、私から離れていく。それが、怖くて仕方が

無かった。だから私は、彼等の愛を失わない為にエインズワース家の良き娘であるとした。

此処までは、自身でも薄々気付いていた事だ。考えが混濁する事はあっても、この一年でゆつくりとそれ等を自覚していき、それを「自身の過去」として受け入れていった。

だが問題はここからだ。

それ等は、屋敷を抜け出した今でも私の心に根強く残っている様で、目の前に居る夫に対してもその不安が付き纏っている事に気付いた。

かつて幼い私が、両親の愛を得る為に「両親の求める私」になろうとしていた様に、使用人からの愛を失わない為に、良き娘でいようとした様に。

セドリックに嫌われたくない。愛想を尽かされたくない。

その為には、彼の求める人間にならなければと、そう思ってしまった。

きつと今迄にも、気付く兆候はあった。だがアリスのコンサートが、それにはつきりと気付く全てのきっかけになった。

だってそれまでは、セドリックは私を愛してくれていると信じて疑わなかったのだから。

しかし私が、彼がピアニストの代理を受けざるを得ない状況を作ってしまった所で、彼に大きな負担を背負わせてしまった。あの晩彼が言った、

「お前が余計な事を言わなければ」

その言葉はきつと彼の本心だったのだろう。

先程の空き家の下での会話で、彼は私を大切にしてくれているのだと深く実感した。それに彼は、何度も私に甘いキスを浴びせた。本来ならもう、そんな不安など抱く必要は無い筈だ。なのに、何故だか私の心は晴れないままだった。

人間とは、何故これ程までに面倒な生き物なのだろう。一度不安になれば、次から次へと憶測が浮かび、挙句の果てには土壺に嵌る。今の私は非常に滑稽で馬鹿らしい。

——なのに。

彼の望む人間にならなければいけない。彼に相応しい妻でなくてはならない。その思考は止まる事無く、私の頭をぐるぐると周り続ける。

「——エル？ どうした」

彼に掛けられた声に、はっと我に返る。

いつの間にか、足の手当は終わっていた。私が自分で手当てをするよりも、何倍

も綺麗な仕上がりで苦笑を漏らす。

やはり、彼は器用だ。だからこそ、繊細なアリスの歌声を引き立たせる演奏が出来たのだろう。

「——そんなに傷、痛むのか」

彼が不安げな顔で、私の顔を覗き込んだ。

手当中、特に痛みは感じなかった。——というのも、自身の胸の中を渦巻く不安で精一杯で、傷の事まで頭が回らなかったただけなのだが。

「……どうして？」

彼の質問に問い返すと、彼が不安げな表情を浮かべたまま「思いつめた顔していたから」と曖昧な言葉を漏らした。

無意識に、不安が顔に出てしまっていたのだろうか。彼には、あまり不安に思っている事を覚られたくは無かった。

「何でもないわ、大丈夫よ」

屋敷に居た十八年間で覚えた、自身の感情を隠す作り笑い。

「手当、ありがとう」

相手の気持ちを和ませる様に、相手に悪い印象を与えない様に、私はそれを必死

に習得した。一年経つても、それは衰えない。

だが何故だか、今はその笑顔を作る事がつらかった。彼には本当の自分を見せていられると、そう思っていたからだろうか。街の人達との会話で愛想笑いを作る事は、どうと言う事も無かったのに。

「——エル」

私の笑顔を見た彼が、徐に口を開いた。

「覚えてるか、”あの夜”に俺が言った事」

その言葉と共に、身体のバランスが崩れベッドに倒れ込む。突然の事に理解が追いつかず、顔に浮かべていた笑みが崩れた。

そんな私に、更に彼が言葉を続ける。

「俺がその愛想笑いを、見抜けないとも思ったのか」

目の前に広がる光景は、天井と私に覆いかぶさった彼の顔。その顔には、彼にしては珍しい程はつきりと悲愴感が滲んでいた。

そして漸く、私は彼に押し倒されたのだと気付く。

「あの、夜……」

彼の言葉を、復唱する様に呟く。

——バルコニーで、彼と出逢ったあの夜。

思わず愛想笑いを崩し、本心を出してしまった私に彼が掛けた言葉。

会話を交わす前、彼を一目見た時から心惹かれていたのは確かだ。だが、誰にも見抜かれた事の無かった愛想笑いを、彼はたった一度で見抜いた。その事実には更に彼に強く惹かれた。

それも、生まれ育った環境を捨ててしまう程に。

「お前のそんな笑顔を見る位なら、まだ泣かれた方が何倍もマシだ」
彼の指先が、私の頬を撫でる。

「お前が俺を『他人』だと思ってるみたいで、不快なんだよ」
「……他人だなんて……思っていないわ」

寧ろ、他人だと思ってるのは彼の方では無いのか。そんな不安が顔に出てしまったのか、彼が少々乱暴に私の顎を掴み、口付けをした。

「お前を不安にさせたくない」

ゼロに近い距離で、彼が囁く。

「何をして欲しい？」

彼が次にキスを落としたのは私の頬。

「何処に行きたい？」

次は、額。

「何が欲しい？」

彼は私の愛想笑いだけで無く、不安迄見抜いてしまった様だ。まるでご機嫌取りでもするかの様に、甘いキスと言葉を注ぐ。

そんな彼に不安は溶かされ、胸の中は甘心で満たされていく。私が欲しいのは一つだけ。それを彼に伝えようと口を開いた。だがそれよりも、彼が先に言葉を漏らす。

「——そんな事言って、不安になってんのは俺の方かもな」

相変わらず、彼の感情は読みづらい。だが彼も、私と同じ様に不安を抱いている事はその声音から伝わってきた。

「たったの六日間、離れただけでこんなに苦しい」

拘束する様に、彼が私の両手首を掴みベッドに押し付ける。そして私の首元に顔を埋め、小さな溜息を吐いた。

「ステージからお前の姿が見えなくなった時、気が気じゃなかった。公演を放り出して、お前を探しに行きたかった」

「……セドリック」

「お前の姿が見えなくなるだけで、自分が自分じゃなくなるみたいだ」

顔を上げた彼の表情は複雑だ。余裕が無いような、何処か焦っている様な、不安を感じている様な。

「——お前を、抱きたい」

瞳を真つ直ぐに見つめ、甘く囁かれる。

これ程、包み隠さず伝えられたのは初めてだ。耐え難い羞恥心に顔を背けたい衝動に駆られながらも、切羽詰まっているのは私も同じだと、その瞳を深く見つめ返した。

「……yesかはいで答えろ」

彼らしいとも、彼らしくないとも言えるその言葉に、思わず吹き出す様に笑みを漏らす。

「私に拒否権は無いのね」

私の腕を掴む彼の手に、力が籠った。もし此処で私が拒んだとしたら、彼は無理矢理にでも私を犯すつもりなのだろうか。彼なら理性的に行動する様に思えるが、考えてみれば言葉一つで私を屋敷から攫ってしまう様な人だ。可能性もゼロだとは

言い切れないだろう。

だが、今はそんな心配をする必要は無い。だって私は、彼を拒む気などさらさら無いのだから。

「私がNoとでも言うと思った？」

意地悪をする様に彼に問い掛けてみれば、彼がきまり悪そうな顔をして「……少し」と呟いた。

私を押さえつける拘束から逃れ、彼の首元に腕を回す。これは、私達の間での合意の合図。そのまま腕に力を籠め、彼を強く引き寄せた。

「yes」

私の返答に、伝わる彼の鼓動が速くなったのを感じた。

だが、その返事だけでは物足りない。彼を欲しているのは、私も同じ。

「——Embrace me. 《私を抱いて》」

彼の耳に自身の唇を触れさせ、注ぎ込む様に甘く囁く。いつも、彼が私にしていた様に。

——その後の事は、正直よく覚えていない。

抱いているのか抱かれているのか分からなくなる程、空白だった六日間を埋める様に、お互いの不安を掻き消す様に、ただただ深く求め合った。

XXXIII Nostalgic scent

温かい風が、髪を揺らす。

彼を仕事へ送り出し、粗方家事を終えた昼過ぎ。今にも雨が降り出しそうな空を眺めながら、食材の買い出しをすべく街へと足を向けていた。

アリスのコンサートは想像していた以上に反響を呼んだ様で、一週間が経過した今でも街はアリスの話題で持ち切りだった。

アリスの歌声を聴いた者と、聴く事が出来なかつた者。両者の間で言い争い等が起こる事は無く、瞳を輝かせアリスの魅力を語り合っている。そんな姿は、見ていてとても微笑ましい。

中には歌姫を目指すと言って、ジャックの劇場に存在する小さな劇団に入団した

子供も居た様だ。

各方面からアリスの名前が聞こえる中、私は頭の中に買い足すべき食材を並べながら、雨が降り出す前に買い出しを終えなければと一人店を急ぐ。

「——エルちゃん！」

その場に響いた、私を呼ぶ声にびたりと足を止める。私をこの様に、大声で呼ぶ人物など一人しか居ない。

近くの雑貨屋へ視線を向けると、声の主——ライリーが良くないオーラを放ちながら私を手招いていた。その姿に、呼ばれた理由の大体の想像が付く。

抑えられない苦笑いを漏らしながら、彼女の店へと歩み寄った。

「今日はどうしたの、ライリーさん」

私のその言葉とほぼ同時に、彼女の顔が怒りに滲む。

——ああ、これは長くなりそうだ。

瞬時にそれを察し、彼女に悟られぬ様彼女の背後に設置された壁時計を一瞥した。決して時間に限りがあるという訳では無いが、今日着ているドレスはこの前セドリックに誕生日プレゼントとして買ってもらったばかりの服だ。雨に濡らしたくないというのが本音である。

だが彼女はそんな気持ちなど露知らず、捲し立てるように喋り始めた。

「聞いてくれよエルちゃん！ 今日、うちの商品が子供に盗られたんだ」

「盗られたって……、万引き……？」

「ああそうだ。私がちよつと目を離れた隙にね。でも、その子供はまだ善悪の区別もつかない様な小さな子だったんだよ！」

彼女が大きな溜息を吐いて、商品台の裏側の椅子に乱暴に腰掛けた。

「盗られた物も、比較的安価な物だね。見逃してやってもいいかと思っただが……、幾ら小さな子だからといって盗みが許される訳じゃない。その子供を捕まえて、話をしたんだ」

「そうだったのね。それで、その子供はなんと？」

「小さな子供なりに罪悪感があったのか、叱るまでも無かったよ。『ごめんなさい』って繰り返して、泣きながら商品を返してくれた。どうやら街の子供がうちの商品を付けているのを見て、それが羨ましかったそうだ」

「……親に、買って欲しいと強請ねだったりはしなかったのかしら」

「そう！ それ！ 問題はその親なんだよ！」

突如スイッチが入った様に大声を出したライリーが、バンと商品台を拳で叩いた。

その音と声に、周囲の人達が一斉に此方を向く。

「小さな子供だ、善悪の区別がつかないのは仕方がない。だが、それを教育するのが親ってもんだ。だから今回の事を、その子供の母親に注意も兼ねて報告したんだよ」

「はあ……」

「もしたらその母親が、『子供のした事にいちいち腹を立てるなんて大人気ないですわね』って言ったんだ！ 信じられないよ！ あんな人間が人の親だなんて！」

「……それは、そう、ね……酷い人……」

確かにその母親の発言も問題があり、人としても、母親としても許されるものは無いだろう。だが階級制度の仕組みを彼女以上に知ってしまった私は、その話を聞いて「良くある話だ」と瞬時に思ってしまった。

貴族社会では多少の上下関係にも厳しく、常識の欠けた発言など数えだしたらキリが無い。それに、稀にマーシャから仕事の愚痴を聞く事もあり、人間のその様な発言は聞き慣れていた。

だが目の前の彼女は、それ等を「仕方無い」と妥協する事無く、良い事は良い、悪い事は悪いとはつきり言える人間だ。きっとこの世界ではとても生きづらいだろ

うが、彼女の様に真つ直ぐな人間には好感が持てる。定期的にこうして彼女から愚痴を聞き、その都度彼女の人の良さを再確認していた。

思わず漏れてしまった笑みを隠す様に手を口元へ遣り、今も止まらない彼女の愚痴に相槌を打つ。

「それで、そんな事があつたんだって話をさつき花屋の兄ちゃんにしたんだけど、そいつも子供の母親と似た所があつて——」

今の彼女は、もう店の主人をやる気が無い様だ。商品台の裏に隠してあつたであろうビスケットを頬張りながら、店主有るまじき姿で悪態をつく。

このままでは、割れたビスケットが商品台を汚してしまいそうだ。冷や冷やしなから彼女を見つめてみると、ふととある音が耳に付いた。

その音は決して変わった物では無く、何処にでもある杖を突く音。だが何故だか、それがやけに耳を付いて離れない。

「——そいつ、『まあ、商品が戻ってきたんだからいいじゃないですか』なんて易々と行って退けたんだよ。ほんつとに、最近の若い奴には碌な人間が居ないね。どんな親に育てられたんだか」

彼女は苛立ちを露わにして、今も愚痴を話すのに必死だ。その音から無理矢理意

識を逸らし、彼女の話に耳を傾ける。

——コツ。

だがどれだけ彼女の話に集中しても、やはりその音は私の耳を付く。私はこんなに神経質だっただろうか。

決してその音が煩いという訳では無い。だがその音は脳の奥に響き、何か深い記憶を呼び覚ます様で気味が悪い。

「——！」

風が吹いた拍子に、ふわりと鼻腔を抜ける柔らかな香り。心臓が早鐘を打ち、冷汗が背を伝う。

薔薇に非常に良く似ているが、香水とは少し違う、不思議な香り。まるで鎮静剤の様に心の痛みが軽くなって、私はこの香りが大好きだった。

——これは紛れも無い、“彼”のものだ。

「どうしたんだい、エルちゃん。顔が真っ青だよ」

私の異変に気付いたライリーが、話を中断し私の顔を覗き込んだ。だがその言葉に呼応出来ない程、今の私は酷く動揺していた。

何故、彼が此処に居るのか。彼は、私の存在に気付いて居るのだろうか。

——もしや、私を連れ戻しに来た？

——いいや、違う。彼は、彼だけは絶対にそんな事をしない。

「エルちゃん、本当に大丈夫かい？」

焦りを滲ませた彼女が、私の肩を揺さぶる。

彼は、いつも私を見守ってくれていた。彼は私に、*“新しい名前”*をくれた。彼は、如何なる時も私の見方だと、そう言ってくれた。

——コツ。

私の背後で鳴った、杖の音。そして大好きな香りが、最も強くなる。

「——あ……」

思わず漏れた声は、酷く震えていた。

ずっと、ずっと、心の中で、心の片隅で、彼の存在を想っていた。彼の今を知りたかった。

私の所為で、両親から酷く叱責されていないか。私の所為で、あの日のメアリーの様に暴力を振るわれていないか。

「エルちゃん！ しつかりしな！」

私の肩を揺さぶるライリーの手に、力が籠る。そして、大声で私の名を呼んだ。

「……ライリー、さん」

喉奥から絞り出した声は、変わらず酷く震えている。

「……私の、名前は、なんですか」

私のその言葉に、彼女が酷く動揺した素振りを見せた。それも当然だ。今迄普通に会話を交わしていた私が、突如顔色を変え自身の名前を尋ねてきたのだから。

青ざめた顔、止まらない震え、瞳に浮かぶ涙。今の私を見た人なら、私の名を呼ぶ前に医者を呼ぶだろう。

だが彼女は、私の問いに答えるように口を開いた。彼女が声を発するのが、やけに長く感じられる。

「——バートン」

久しく、聞いていなかった名前。

「あなたの名前は、エル・バートンだろ」

そのはつきりとした彼女の言葉と共に、ぼん、と背を優しく叩かれる感覚があった。顔は見えない筈なのに、私の背を叩いた「彼」が優しく微笑んだ様な気がして、思わず涙が零れ落ちる。

「ちよつと待てよ、エルちゃんはセドリックと結婚したんだから今は姓が変わって

……つて、エルちゃん！　なんで泣くんさい！　ちよつと！」

もう、杖の突く音は聞こえない。大好きだった香りもしない。もう、彼の気配は何処にも無い。

だが、それでも振り返る事は出来なかった。振り返って、人混みを掻き分けて、彼を探す事は出来なかった。

だつてきつと、彼はそれを望んでいないから――。

XXXIV The beginning of a nightmare

日中と夜間の気温に差が出てきた十月末。

玄関先で、仕事へ行く支度を終えたセドリックにコートを手渡し、日課である口付けを交わす。

「それじゃあ、行ってくる」

「行つてらっしゃい。気を付けてね」

普段と変わらない、朝の会話。だが今日の彼は少し、普段と違っていた。何処か名残惜しそうに私の頬を撫で、時折不安な表情を見せる。

「セドリック？」

そんな彼に疑問を抱き、彼の体温を頬に感じながら首を傾げた。

「――極力、外に出るな。特に夜間は」

「外に？ どうして？」

「どうしても、だ。日中街へ行く時も、出来るだけ人通りの多い道を選べ。……そうだな、ライリーの店がある方面だけにしておいた方が良く。間違つても、知らない道へは行こうとするな」

彼の表情は真剣で、危なっかしい私を注意する時とは少し違う。

「……ええ、分かったわ」

浮かんだ疑問は増すばかり。しかしそれでも、夫である彼の言い付けは守るべきだ。

了承の言葉と共に、こくりと頷いた。だが、それでも彼は何処か満足していない様だった。

「外出だけじゃない。戸締りもだ。玄関の鍵は閉めて、それと、窓を開けたまま昼寝なんてするなよ」

「流石に、この時期に窓を開けて昼寝なんてしないわ」

「分かってるが、念の為だ」

徐に、彼が私を抱き寄せた。彼の腕に抱かれながら、ぼんやりと先程の事を思い出す。

朝食の時間、彼はやけに怖い顔をして新聞を見ていた。もしかすると、何か良くない事件でも起こってしまったのかもしれない。

彼は私の事になるとやや神経質になり、普段からも用心深く行動する様にとわれ続けている。心配をされる事はとても嬉しい上に、愛されていると実感出来る為決して鬱陶しい等と思っている訳無いが、心配されればされる程彼を更に心配させたくなってしまうのが私の悪い癖だ。

私が危険な目に遭えば、彼の気をもっと引く事が出来るのだろうか。つついそんな物騒な事を考えてしまう。

「私は大丈夫よ、セドリック」

彼から身体を離し、彼の瞳を真っ直ぐに見つめる。そして優しく微笑んで見せれ

ば、彼が小さく溜息を吐いた。

「大丈夫って言う奴程、危なっかしいんだよな」

「……」

心の内を見透かされてしまった様で思わず言葉に詰まるが、彼は諦めた様に玄関の扉に手を掛けた。

「俺が言った事、ちゃんと守れよ」

「はいはい、分かっているわ」

「本当に分かっているんだろうな」

「分かっているって、大丈夫よ。ほら、早く行かないと仕事に遅れちゃうわ」

渋々彼が頷き、名残惜しそうな顔で家を出て行った。

扉が閉まったのを確認し、即座に踵かかとを返す。

今の私には、どうしても直ぐに確認したい事があつた。

向かう先は脱衣所。鼓動が高鳴るのを感じながら、脱衣所のドアノブを掴む。

だが、それを制す様に勢い良く玄関の扉が開かれた。

「エル！」

扉を開いたのは、怒りと呆れを顔に滲ませたセドリック。内心しまったと思った

が、時既に遅し。

「戸締り！　しろって言っただろ！」

「ご、ごめんなさい、つい」

「つい、じゃないんだよ。お前、本当に俺が言った事聞いてたのか」

「聞いていたわ、今度こそちゃんとするから、ね？」

怒りを滲ませる彼を何とか宥め、何か言いたげな表情を浮かべるセドリックをやや強引に外へ追い出し玄關扉を閉めた。そして今度こそしっかりと施錠し、再び踵を返し脱衣所へ駆け込む。

覗き込んだのは、小さな鏡。自身の髪に付けられた髪飾りを見ようと、左右に顔を揺らす。

その度に、後頭部で蝶が舞う様にひらひらと揺れるのは黒いリボン。そして、その根元に付けられた赤薔薇の造花。

「……可愛い」

それは、今朝彼が私に贈ってくれた髪飾りだ。

鏡の前でその髪飾りを堪能し、甘心に満たされたまま脱衣所を出る。そして次に自身が足を向けた先は、壁に掛けたカレンダーの前。

一際目を惹く“wedding anniversary 《結婚記念日》”の文字。それが書かれているのは、今日の日付だ。

彼が記念日を覚えていてくれて、更にはこうしてプレゼントまで贈ってくれた。言葉で言い表す事の出来ない幸福感に、だらしなくも顔を緩ませる。

そんな中、ふと先程の彼を思い出した。

彼が怖い顔をして読んでいた新聞。一体、何が書かれていたのだろうか。今朝の言葉にも、何か関係があるのだろうか。

なんと無しにそれが気になり、カレンダーから離れテーブルに乗せられたままだった新聞を手を取った。畳まれた新聞タイムズを開き、ざっと目を通してみる。

——貴族の屋敷に強盗、宝石店で盗難被害、そしてびつしりと詰めて書かれている遺失物拾得欄。書かれているのは、普段と変わらない記事ばかりだ。特別目立つた事件などは無い。

だがその中で敢えて言うのであれば、ロンドン市内で起こった婦女暴行事件だろうか。美しい女性ばかりを狙った凌辱りょうじゆくが、ここ数日で相次いでいるらしい。

死人が出ていない為あまり大きな記事にはなっていないが、ロンドン市内というだけで少々目を引いた。

まさか彼は、この事件に私が巻き込まれる事を危惧しているのだろうか。先程家を出て行った際も、外出を控える様にと言つて不安げな表情を浮かべていた。

美しい女性など、このロンドン市内にごまんと居る。こんな地味な私が狙われる事など、ある筈が無い。私を心配する位なら、明るくて愛らしいマーシャの心配をした方が余程良いだろう。彼の心配癖は重症の様だ。

だがそれも、彼の「愛情」の一つ。決して悪い気はしない。

ふふ、と笑みを零し、新聞を元の位置に戻した。

そんな事より、早く街へ買い出しに行かねばならない。

ばたばたと靴音を響かせ、食材のストックを確認しにキッチンの奥へと向かった。

*

普段と変わらない、いつも通りの街の中。

女性物のアクセサリーが並ぶ商品台の向こう側には、その愛らしい商品達に不相応である険しい表情を顔に張り付けて佇む一人の女店主。

買い出しついでに彼女と会話を交わす事は最早日課だ。最近では、彼女の顔色を

見るだけで大体何を考えているのかが分かる様になってきた。

また、何か揉め事でも起こしたのだろうか。話が長くなりそうであれば、先に買出しを済ませてからにしようかとも思ったが、その険しい顔の真相が気になり彼女に声を掛けた。

「こんにちは、ライリーさん。どうかしたの？」

声に気付き、彼女が視線を此方に寄越した。

また、「聞いてくれよ、エルちゃん」なんて言葉から愚痴が始まったりするのだろうか。そんな事を考え、一人苦笑いを漏らす。

だが、彼女は私の姿を視界に捉えるなりその険しい顔を崩した。そして無表情のまま、私の顔をまじまじと見つめる。

「……あの、ライリーさん？」

「……」

声を掛けても、反応は無い。ただ私の顔を見つめ、石化してしまった様にその場に固まっている。

一体どうしてしまったのだろうか。こんな彼女を、今迄に見た事が無い。少々戸惑いながらも、彼女の顔の前で手を振ってみる。すると、漸く彼女がゆら

りと身体を動かした。

「あんたつてき、美人だよね」

漸く口を開いたかと思つた矢先、投げかけられた言葉に顔を顰める。

「どうしたの、急にそんな事を言つて」

そう問いかけると、彼女がふいと私から顔を逸らし、うん、と小さく頷いた。

椅子に腰掛け、商品台に頬杖をつく。そして今度は、何かを深く考えこむ様な表情を浮かべた。

「今朝の新聞、読んだかい？」

「新聞……？ ええ、ざっと目を通した位だけれど」

「じゃあ、ロンドン市内で起こつてる婦女暴行事件は知つてるね？」

その問いに、先程自宅で読んだ新聞の記事を思い出した。

彼女の言つた、婦女暴行事件。確かに、新聞で目にした記事だ。小さく頷いて見せると、彼女が憂い気に目を伏せ、深く溜息を吐いた。

今日の彼女は、良く表情が変わる。今朝のセドリックもいつもと様子が違つたが、それは目の前の彼女も同じだ。

その事件は確かに、新聞の記事になつていているものではあつた。だが、ぎつしりと

様々な記事が書かれているページの隅に、小さく書かれている程度だ。それ程に、憂う事なのだろうか。

「勿論被害者の女性はさぞ苦しい思いをしたのだろう。事件を軽く捉えてはいけな
い。」

だが、今私達が深刻に捉える事件でも無い様に思えた。

「でも、ロンドン市内でしょう？ 確かにライリーさんは綺麗な方だけど、ロンドン
は広いし、心配する程の事では……」

「馬鹿だね、自分の心配してんじゃないよ！」

ぴしゃりと言い放たれた彼女の言葉に、その先の言葉を飲み込む。

先程、彼女は私を美人だと言っていた。自分の心配をしているのでは無いとす
ると、もしやライリーは私の心配でもしているのだろうか。

セドリックもライリーも、過剰に反応しすぎている様に感じる。呆れ半分で小さ
く息を吐くと、ライリーが珍しく潜めた声で話し始めた。

「——被害者は現時点で五人。これはあまり知られていない様だけど、四人目の被
害者の娘はこの街に住んでいたらしいんだ。たまたま仕事で隣街へ行っていた時に
襲われたそうだね。隣街と言っても、馬車を使わなかったって行ける場所だ。決して

他人事ひとごとじゃないよ」

「……そう、なの」

心臓が、冷たい手で掴まれた様に痛みを伴いながら冷えていく。

エインズワース家があるのも、隣街だ。事件を他人事だというつもりは決して無いが、それでも隣街の事がこの街の人の耳にも入っているという事実に畏怖を感じる。

「エルちゃん美人だから、狙われそうで怖いね」

「……そんな事ないわ。私よりも、ライリーさんの方が綺麗なもの」

「何言ってるんだい、あんたみたいな弱い綺麗な子が被害に会うんだよ」

彼女の言葉に、思わず苦笑を漏らした。すると透かさず、「笑い事じゃないよ」と声が飛んでくる。

「気にしすぎだわ」

「あんたはもう少し、危機感ってものを持った方がいいね」

もの言いたげな目で、彼女が私を見つめる。その視線から顔を逸らし、誤魔化す様に笑った。

「とにかく、気を付けるんだよ。犯人はあんたみたいな子を狙ってる。年長者の言

う事は黙って聞いときな」

「分かっているわ」

「本当に分かっているんだらうね」

今朝にも、セドリックと似た会話をした。ライリーとセドリックは、何処か似た所があるのかもしれない。

となると、この話もきつと長くなる。そう瞬時に感じ取り、どう会話を切り上げようかと頭が勝手に考え始める。

——人への心配は、その人への愛情表現だ。自身もこの事件に、ライリーやマーシャが巻き込まれるかもしれないと思うととても心配だった。守れるものなら、守ってあげたいとすら思う。

だがどうしても、他人への心配と自分自身への心配が比例する事は無かった。

「私は大丈夫よ」

上手い話の切り上げ方が思いつく事は無く、今朝セドリックに言った言葉と同じ言葉を口にし、逃げる様に彼女の店を後にした。

XXXV Mysterious question

現時刻は二十二時半。

静寂な部屋に突如鳴り響いた、乱暴に扉を開く音。

思わず肩をびくりと震わせ、玄関へと視線を向ける。

「……おかえり、なさい」

帰宅した彼の顔は、いつも通りの無表情。だがやけに帰りが遅かった事も相まって、帰宅した彼の異変は直ぐに気が付いた。

普段通りに見えるが、その瞳は何処か鋭く氷の様に冷たい。そして僅かに、酒のおいがした。

「——ただいま」

ぼつりと呟く様に返された言葉は、妙に乾いていて重みが無い。まるで無意識的に口をしている様だ。

外で、酒を飲んできたのだろうか。

彼は基本、煙草ばかりで酒を飲む事は殆ど無い。故に、今日のように酒のにおいを纏わせて帰ってきたのは初めてだった。

——怖い。

今の彼を見て、ただその感情だけが浮かんた。

それは、父に感じた暴力的なものでも、キースに感じた狂氣的なものでも無い。何処か不安定で、捕まえていないと消えてしまいそうな、そんな儚さを孕んだものだった。

「——セドリック」

キツチンの方へふらりと進んでいく彼を追い掛け、咄嗟にその腕を掴む。

触れた瞬間ぱちりと音を立て、まるで泡の粒が弾ける様に消えてしまうのではな
いかだなんて不安を抱いたが、手に感じた彼の感触と体温は確かなもので思わず安
堵の息を漏らした。

「——何か、あったの？」

彼の様子が、普段と違うからだろうか。それとも、消えてしまいそうな儚さを纏
っているからだろうか。理由は自分でも分らないが、どうして酒を飲んできたのか
と、彼に尋ねる事が出来なかった。

抽象的な質問だと、自分でも思う。もう少し彼を労う言葉等を掛けるべきだったのではと、僅かに後悔も浮かぶ。しかし他に言い換える言葉が見つからず、ただ彼をじっと見つめた。

「……」

ゆつくりと振り返った彼と、視線が絡む。

相変わらず、その視線は鋭い。目だけで人を殺せる、という言葉がしつくりくる程に冷たい瞳だ。怯ひんでしまいそうになるのを何とか堪え、彼の瞳を深く見つめ返す。

「——別に、何も無い」

無言の見つめ合いで、先に折れたのは彼の方だった。

私の視線から逃れる様に顔を反らし、独り言を呟く様に答える。

「——お前は先に寝てろ」

何処か突き放す様にそう言つて、彼がやんわりと私の手を払った。

そして一度も振り返る事無く、キツチンの奥へと消えていく。

そんな彼を、追いかける事は出来なかつた。

追いかけた所で、きつと同じ事を繰り返すだけだからだ。それに、彼の逆鱗に触

れてしまう可能性だつてある。

アリスのコンサートがあつた時だつて、休みなく練習を繰り返す彼に執拗に声を掛けてしまった事で彼を怒らせてしまった。幾らあの言葉が本心だつたとしても、それを彼に言わせてしまったのは私だ。

——余計な事は、するべきでは無い。

暫くその場に佇んだ後、僅かな胸の痛みを抱えながら踵かかとを返した。

辿り着いた先であるベッドに腰掛け、ナイトテーブルに置いてあつた本を手に取り。昨晚眠る前に読んでいて、棚に戻し忘れていた物だ。葉が挟まれている場所を開き、本を膝の上に置いた。

だが、こんな状況で物語に集中出来る筈が無い。溜息を吐き、ちらりとキッチンの方を見遣る。

キッチンから出てきた彼の手に持たれているのは、棚の奥に仕舞われていたスコッチの瓶と背の低いグラス。

酒を飲む事自体が珍しいというのに、酒を飲んで帰ってきて、更には自宅でも酒を飲むだなんて、最早珍しいなんて言葉では言い表せない。

時々、リビングのテーブルで一人酒を啣る彼に視線を投げつつ、本の文字を目で

追っていく。

だが、やはり彼の事が気になってしまい、目を走らせた文は脳に記憶される事無く全て抜け落ちて行った。

今の彼は、何かを深く考え込む様な複雑な表情をしている。

仕事で嫌な事でもあったのだろうか。何があったのかと尋ねなくとも、私も彼と同じ席に着いて、同じ酒を飲んでいれば彼の心を少しは癒す事が出来るだろうか。彼は決して愚痴を零すタイプでは無く、何か嫌な事があつたりしてもそれをライリーやマーシヤの様に言葉にはしてくれない。

今日程では無いものの、過去にも何度か機嫌の悪さを露わにして帰ってきた事があつた。その都度、極力刺激しない様に彼と過ごしていたが、結局彼を落ち着かせたのは時間であり、何に苛立っていたのかを明確に言葉にして聞かせてくれた事は無かつた。

きつと、私に出来る事は何も無い。彼らしくない行動に不安はあるが、今回も下手に刺激せず時間を頼った方が良いだろう。

再び溜息を吐き、手元の本に視線を落とした。

——最後にページを捲ってから、どの位が経過しただろうか。

睡魔に襲われ、徐々に文字を目で追う事が億劫になってきた頃合い。テーブルの方から、がたりと物音がした。

此方に歩み寄ってくる彼の気配を感じ、最早ページを捲るだけになってしまった。いた本から顔を上げる。

彼の背後に見えたテーブルの上には、スコッチの空き瓶とグラスが無造作に置かれていた。

確か、酒はボトルの半分以上残っていた筈だ。たったの一時間そこらで、残りの酒を全て飲み切ってしまったのだろうか。

普通の人間であれば、泥酔し倒れてしまってもおかしくない量だ。だが彼の足取りはそれ程の酒を飲んだ人間だとは思えぬ程しつかりとしていて、酒飲み特有の表情の乱れ等も一切無かった。彼は随分と酒に強い様だ。

「——セドリック、大丈夫？」

私の目の前で足を止めた彼が、光の灯っていない瞳で私を見下ろす。その瞳には、怒りにも悲しみにもとれる複雑な色が滲んでいて、どれだけ信頼を置いていても不

安を抱くものだった。

「——なあ、エル」

暫く私を見つめていた彼が、ぼつりと掠れた声で私の名を呼ぶ。

「なあに？」

なるべく穏やかな口調で返すと、彼の表情が僅かに和らいだ。

そして彼が、続きを話そうとゆつくりと口を開く。

「——もし俺が、殺したい程憎い奴がいるって言ったら、お前は俺を止めるか？」
突如告げられた、物騒な問い。その冷たい瞳に、決して冗談などでは無い事を覚
る。

鼓動が早まるのを感じながらも、少しの間口を嚙んだ。そしてゆつくり、その言
葉の意味を考える。

——彼がもし、人を殺したとしたら。

それは此処に来た当時、何度も考えた事だ。彼の仕事は人の命を奪うもので、彼
は殺人者なのでは無いかと。

だが私の心は、揺らぐ事は無かった。それは今も同じだ。

彼が殺人者だろうと、私は彼を愛している。その気持ちは変わる事は無い。

しかし、当時と今では考える事が少し違っていた。

それを誤解無く伝えるべく、頭の中で言葉を選びながら口を開く。

「——止めるか、止めないかの二択であれば、そうね……止めるかもしれない。だって人を殺す事はこの国では犯罪であって、見つかつてしまえば法で裁かれる。そうすれば、私と貴方は離れ離れになってしまうわ……」

人を殺せば、階級制度関係無くその人間は「犯罪者」として扱われる。

勿論、「誰を殺すか」にも依ってくる話ではあるが、殺した相手が貴族の人間であれば警察も本腰を入れて捜査する為、長くて一週間程度で犯人の特定がされる。すればその人物は身柄を拘束され、手始めに留置所へ送られる。裁判等が行われるのはその後になるが、少なくとも数年は出てこられなくなるだろう。

セドリックと私が、離れ離れになる。触れ合う事も、話をする事も、出来なくなる。それが今の私にとっては何よりも怖かった。

だが、もし仮に離れる事が無いのなら。

証拠を消し、確実に足が付かない方法で殺人を犯すと言うのなら。

私は彼が何人殺めようが、どうだってよかった。

「——でもね、セドリック」

ぱたりと本を閉じ、そつと囁くように言葉が続ける。

「——私は、貴方が人を殺めたとしても、変わらずつと愛しているわ」

彼の瞳を真つ直ぐに見つめ、ゆつくり、はつきりとその言葉を口にする。

彼の表情は相変わらず変わらぬ。だが、私のその言葉に僅かに驚いた顔をした様な気がした。

「——悪い、忘れてくれ」

彼の手が、ぼんと私の頭を撫でる。

「——ただ、いけ好かない奴がいるだけなんだ。死んでくれれば後々面倒にならないと思っただけで、本気で殺そうなんて思っただけ」

私が深く考え込んでいる様に見えたのか、彼が何処か悲しげに手を滑らせ優しく髪を梳いた。そして軽く私の顎を掬い取り、触れるだけのキスを落とす。

僅かに香るアルコールに、唇から伝わるスコッチの味。その中に混じった、煙草の苦み。

「付き合わせて悪かったな、先に寝てていいって言ったのに」

「……ううん、いいの。貴方と一緒に眠りたかったから」

本を元あつた場所であるナイトテーブルに置き、彼に微笑みかけた。

そして彼と共にベッドへ潜り込み、その温かな腕に抱かれる。

——再び訪れた静寂。暗闇の中で、彼の香りを感じながらふと考える。

私がかもし人を殺めたとしたら、彼は変わらず今のまま、私を愛してくれるだろうか。

先程彼は、「本気で殺そうなんて思っていない」と言った。きっと彼は、殺意が湧いてしまう程に苛立つ人物と出逢ってしまったのだろう。マーシヤから愚痴を聞いていても、時々彼女の口から人の死を願う様な言葉を聞く事がある。感受性が豊かな人であればある程、殺意が湧く程の苛立ちと言う物は抱きやすいのかもしれない。

——もし仮に、私がかそんな人物と出逢ったとしたら？

私は今迄、人に殺意を抱いた事は無い。だが、もし仮に抱くとしたら、どんな人物だろうか。

その答えは、自ずと導き出す事が出来た。

——セドリックと私の仲を、引き裂こうとする人物だ。

もしそんな人物に出会ったとしたら、私は真っ先に何をするだろうか。

分かってもらおうまで話し合う？ それとも、セドリックが私を愛してくれていると信じてその人物の存在を忘れる？

どちらも違う。

花に付いた害虫を駆除する様に、私はその人物を排除する。

短剣を握り、自身の首に突きつけた感触。それはきつと、生涯忘れる事は無い。その剣先を、自身では無く他者に向けるだけだ。決して難しい事では無い。

「——セドリック、先程の話だけど……」

私の身体を強く抱く彼に、声を掛けてみる。だが返答は無く、既に規則正しい呼吸が繰り返されておりこの数秒間で眠りに落ちてしまった事を覚る。

あれ程の量の酒を飲んだ後だ。入眠が早いのも当然だろう。

「——私はね、人を殺す事が悪い事だとは思わないの」

彼の腕の中で、独り言の様に言葉を漏らす。

「私だって、貴方との関係が壊す人が現れたらきつとその人を殺してしまうもの」
彼と共に居られるのなら、それがどんな手段だったとしても厭われない。

私達の仲を引き裂く人が居るとすれば、それはどんな相手であろうときつと私は躊躇なく排除するだろう。

例えマーシヤやライリーだったとしても、私の恐怖の対象だった、実の父親だったとしても。

XXXVI A different morning than usual

顔を歪める程の激しい頭痛に、張り付くような喉の渴き。ひんやりとした冬の匂いが充滿する部屋で、自身の身体への違和感を抱きながら目を覚ました。

自身を襲うのは、痛みに似た妙な倦怠感。無理矢理喉を潤そうと唾液を飲み込むが、当然そんな事で渴きが癒える筈が無い。

まるで鈍器で殴られている様な頭痛に小さく唸り声を漏らし、あまり刺激を与えない様に手で額を押さえながらゆっくりと身体を起こす。

出来る事なら、このまま再び眠りにつきたい。だが、痛みを伴う程の喉の渴きを放置して眠る事は出来そうに無かった。仕方なくベッドから足を下し、ふらふらと壁や家具に手を付きながらキッチンへと向かう。

これ程に酷い体調不良を起こしたのは久しぶりだ。

屋敷に居た頃は頻繁に体調を崩していたが、この家に来てからは一度も無かった様に思える。

私が体調を崩す原因の殆どは過度なストレスだが、ここ最近でストレスを感じた記憶は無い。それに、体調を崩すような心当たりも無かった。

視界が眩む程の不調に疑問を抱きながらも、漸く辿り着いたキッチンで溜息を吐く。

グラスは、自身の目線より少し高い位置にある食器棚の中。頭痛も倦怠感も酷く、背伸びをして取るには少し億劫だ。

しかし水を注げる物は全て片付けてしまっている為、多少無理をしてでも食器棚から取るしか喉を潤す方法は無い。意を決し、背伸びをして食器棚へ手を伸ばした。眩暈を起こしながらもなんとかグラスを取り出し、溜息を漏らし蛇口を捻る。その瞬間、蛇口から錆びた金属が擦れる音が鳴り、あまりの煩さに頭がずきりと痛んだ。

体調を崩すと、普段は気にならない生活音や物音がやけに耳に付く様になる。

蛇口を捻った音も、グラス越しに伝わる水の冷たささえもそうだ。全てが刺激になり、不調を悪化させる。

再び蛇口を捻り水を止め、早く乾いた喉を癒そうとグラスを口に近づけた。

寒い季節になったからか、水が普段より冷たく感じる。胃に不快感がある今、こ

れ程冷たい水を一気に流し込めば吐き気を催してしまふだろうか。そんな事を思いながらも、水を口に含んだ。

「――！」

口内を満たす、水道の水。それは普段と何も変わらない筈なのに、広がったのは言葉にし難い不快な味。それは異様な吐き気へと変わり、喉奥へ流し込む前にシンクへと吐き出した。

ズキズキと脈打つ頭に、収まらない吐き気。心做しか、水のニオイも普段と違う様に感じる。

グラスに注がれた水を捨て、三度みたたび蛇口を捻った。そしてもう一度水を汲み直し、口に含む。

一度その不快感を味わったからか、今度は吐き出す事無く喉奥へ流し込む事が出来た。先程よりも不快な味は薄まった様に感じるが、それでもまだ味もニオイもおかしいままだ。

それに、何故だか妙に喉も潤わない。まるで口内に膜でも張っているのかと思う程に水は浸透せず、どれだけ繰り返しても変わらない。

水道関係に、何か問題でも起こったのだろうか。もしそうだとしたら、これ以上

飲むのは控えた方が良いかもしれない。仮に水道管等の錆が原因だとしたら、少なからず身体に害がある筈だ。

——だが、心の何処かでこの不快感全てが水の所為だけでは無い気がしていた。今日のこの割れそうな頭痛と倦怠感、喉の渴きは明らかに異常だ。

体調不良を起こした際、特に風邪を引いた時など、味が感じづらくなる事があるだろう。それと同様に、この味の不快感には自身の体調不良も少なからず関わっている様に思えた。

そろそろ、セドリツクも起きてくる頃合いだろう。彼の反応を見れば分かる事だ。沸き上がる不安を掻き消す様にそう自身に言い聞かせ、新しく水を汲み直したグラスを片手にベッドへ足を向けた。

「——あら、おはようセドリツク。起きていたのね」

いつから目を覚ましていたのか、ベッドの上には何処か虚ろな表情をしたセドリツクが座っていた。

グラスを落とさない様すっかりと手に持ち、彼の隣に腰掛ける。すると彼が、表情を歪ませ私の肩に額を寄せた。

「……頭いてえ」

肩から聞こえる苦しげな声。僅かに残る酒のニオイに、彼のその頭痛は昨晚の酒の所為だと覚る。

「お酒の飲み過ぎよ。あれだけ飲めば、体調を崩すのは当然」
呆れ半分に呟き、彼の頬をそつと撫でた。

「幾らお酒に強くても、摂りすぎは毒になるから程々にね」

「……そんな飲んだ？」

「覚えていないの？」

彼の視線がテーブルの方へと向く。

テーブルの上には、スコッチの空き瓶とグラスが無造作に置かれたままだ。それ等を見て、飲んだ酒の量を察したのだろう。再び私の肩に顔を埋め、「そこまで飲むつもりじゃなかったんだが……」と枯れた声で呟いた。

「お酒の事はもういいわ。そんな事より今日の水、少し変なの」

「水？」

怪訝な顔をした彼に、手に持ったグラスを差し出す。

私からグラスを受け取った彼が、やや躊躇ためらいながらも鼻を近づけ水のニオイを嗅いだ。そしてグラス越しに色を眺め、ゆっくりと水を口に含む。

「上手く言葉に出来ないのだけど……、貴方は何も感じない？」

彼が言葉を発するまでが、やけに長く感じる。

水に問題があつては困る。日常生活に水は必要不可欠であり、料理や飲水にも支障が出てしまうからだ。

しかし、自身の体調も気がかりだった。ズキズキと脈打つ頭痛に、目が回りそうな眩暈。起き抜けからは大分良くなつたが、それでも不調は未だ自身を苛み続けている。

返事を待つ事数十秒。彼の表情に、答えは凡そ見当が付いていた。

「……特に、何も」

先程と同じ怪訝な表情を浮かべ、彼がぼつりと呟く。

予想通りと言うべきか。言葉にするのなら、「やっぱり」の一言。

首を傾げ再び水を口に含んでいる彼を尻目に、やはりこれは自身の体調不良が齎すものなのだと確信する。

咳や鼻炎などの症状が無い為、風邪とは考えづらい。この頭痛や眩暈、倦怠感も発熱時特有のものであるが、発熱といつても少々身体が火照つた様に感じるだけであまり高熱だとも思えなかつた。

先程迄は自身の体調が関わっているのではないかと見していたが、考えれば考
える程味覚に異常が出る程の不調では無い様に思えてくる。それこそ、質たちの悪い流
行病や感染症等で無い限り。

ふと、脳裏を過つたとある可能性。

一度頭に浮かんだだけに、妙に思考に絡みついて離れないそれは、結婚した
女性であればいずれ直面する事だ。

しかし、私がそれに直面するには随分と早い。

まるで物語を読んでいる様な、他人事の様な。あまりに現実的では無いそれは、
何故だか気持ちが悪いくらい程に私の頭を回り続ける。

「エル？ どうした」

彼に声を掛けられ、ふと我に返った。

彼が居た筈のベッドは空。辺りを見渡すと、いつの間にか彼は私のすぐ隣に立っ
ていて、ハンガーに掛けていたシャツに袖を通していた。

「——今日は体調が優れなくて……、もしかしたらその所為かもしれないわね」
彼の問いに曖昧に答え、ぱっと彼から顔を逸らした。

本来なら今頃、朝食の支度をしている時間だ。だが体調が芳かんばしくなく、とても朝

食の用意が出来そうに無い。

まだ此処に來た当時の事だが、彼は「朝食はあつても無くてもどちらでも良い」と言っていた。朝食を出す事が習慣化した今はどうか分らないが、今日の体調不良は決して軽くは無く、無理をしても動けそうにない。

今日だけは、彼のその言葉に甘え休ませて貰つても良いだろうか。

そんな事を考えていると、彼が徐に私の方へ手を伸ばした。優しく額に触れ、そしてその手は頬、首筋へと滑る。

「……少し、熱いな」

片手で器用にシャツのボタンを留めながら、彼がぼつりと呟いた。

彼は少々過保護な一面があり、些細な怪我也も見逃したりはしない。その為、発熱ともなれば診療所へ行く事を強く勧められるかもしれない。

「風邪かもな。今日は一日、家で大人しく寝てろ」

——しかし彼は、随分とあっさりした言葉を私に投げた。

頭の中で幾つか彼を言いくるめる言葉を用意したと言うのに、拍子抜けした気分だ。

彼の手が、私の背に触れる。そしてやんわりと、ベッドに入る様促うながした。

僅かに遣る瀬無さを感じながらも、それに応じベッドへ潜り込む。

随分と彼らしくない行動だ。普段は小さな怪我を過度に心配するというのに、こうして風邪だと一存で決めてしまうだなんて。

口元まで布団を被り、ふらふらとした足取りで脱衣所へ向かっていく彼の背を見つめる。

しかし、今の私の頭には全く別の事が浮かんでいた。パタリと脱衣所の扉が閉まったと同時に深く溜息を吐き、絡む糸を解く様に思考を回す。

それとは、先程私の脳裏を過つたとある可能性の事だ。

全く、考えていなかった訳では無い。私も彼も健康な身体をしていれば、いつかは直面する筈だった事である。

それに今は、まだこれが憶測の域を出る事は無い。真実かどうかを知るには、診療所へ行き医師の元で正しい検査を行わなければならなかった。

だが女性には、本能的にそれを感じ取る能力でも備わっているのだろうか。

自身が子を身籠った時、他でも無い自分自身が真つ先に気付くのだと、何処かで聞いた事があった。病だつて医師に診せるまで気が付く事が出来ないと言うのに、身籠った時だけは直ぐに察しが付くのだと。

もし本当に、この憶測が正しかったとしたら。私のお腹に、セドリツクと私の遺伝子を継いだ命が宿っていたとしたら。

それは書類上じゃなく、誰も否定できない愛し合った証。彼と私が夫婦だったと、愛し合っていたと、証明できる存在になる。

しかし自身を駆り立てる強い不安感に、それ等の感情が掻き消された。

——彼が子供を、望んでいなかったとしたら。

深い闇に落とされた様に、心に濃い影が掛かる。

彼の性格上、子供と接する事が得意だとはとても思えない。それに、父親になる事だつて快く受け入れてくれるとは思えなかった。

——では、子供は諦めるべきか？

彼が望まないのなら、それも仕方が無い事だ。彼と共に生きていくのなら、妥協しなくてはならない事もきつと多くある。

だが私自身が、それを易々と受け入れる事が出来なかった。宿った命を、殺してしまう事はとても出来ない。

無意識に、母親になる事を望んでいるのだろうか。ただ今は、彼をどう説得すべきかが思考の大半を埋め尽くしていた。

しかしその思考も、脱衣所の扉が開く音で遮られる。

彼の表情は、何処か暗い。昨晚の酒が残り体調が優れないのだろうが、今はそれとはまた違った、何かを深刻に考えている様な顔をしていた。

脱衣所から出てきた彼は一直線にテーブルへと向かい、テーブルの上に置き去りにされていた昨晚の夕刊紙イブニング・スタンダードを手に取った。そしてやけに真剣な面持ちで夕刊紙を開き、隅から隅へと目を走らせている。

彼があれ程真剣に新聞を読んでいる事が、過去にあっただろうか。

彼は街の事に無頓着であり、暇潰し感覚で新聞を眺めている事が殆どだ。仮に殺人事件が起こったとしても、顔見知りの人達がトラブルを起こしたとしても、何処か他人事のような顔をしている事が多かった様に思える。

何か、彼の気に障る様な事件でも起こったのだろうか。しかし、彼が特別食いつくような事件であれば私もある程度は把握している筈。どれだけ記憶を辿っても、何も思い当たるものはない。

それよりも今は、体調不良を訴える私に目もくれず、新聞を読み耽っている彼に何だかもやもやと言葉にし難い感情が沸き上がるのを感じた。

そう思ったのも束の間。突如彼が舌打ち交じりに溜息を吐き、夕刊紙を乱暴にテ

「ブルへ叩き付けた。整えたばかりの髪をぐしゃぐしゃと掻き乱す彼は、随分と機嫌が悪い様だ。」

「——セドリック、大丈夫？」

そんな姿を黙ってみている事が出来ず、思わず彼の背に声を掛けた。

私の声に気付いた彼が振り返り、私を見て僅かに表情を崩す。そして乱れた髪を手櫛で整えながら此方に歩み寄り、ベッドの隅に腰掛けた。

「昨日から、ずっと怖い顔してる」

彼の眉間に付いた、深い皺。このままでは、その皺が残って消えなくなってしまういそうだ。

それに、最愛の人にはなるべく穏やかな表情で居て貰いたいものである。そんな願いから、布団から手を出し指先で彼の眉間を突いた。

そこで、とある事に気付く。

普段なら、彼はまだ着替えすらしていない時間である。日によっては、まだベッドの中に居てもおかしくはない時間だ。なのに今日の彼は、早々に着替えを済ませ出掛ける支度をしていた。

今日は普段より早く、家を出るのだろうか。

彼が仕事へ行つてしまえば、私はこの家に一人になる。それは普段通りの事であり、日中彼が居ないのは最早当然の事なのに、何故だか急激に寂しさに襲われた。

「——もう、お仕事行つちやうの？」

再び布団から手を出し、彼のシャツの裾を掴む。

すると彼が私の手を優しく包み込み、慈しむ様に私の髪を撫でた。

「——なるべく、早く帰る」

彼の声も何処か切なげで、先程新聞に向けていた鋭い瞳はとろりと蕩^{もよ}け、夜の優しさを思わせる程に柔らかくなる。

その視線を独り占めしたいと思うのは、今に始まった事では無い。だが、今日自分でも戸惑う程にその独占欲が強く表れていた。

「そういつた日に限つて、早く帰ってきてくれないじゃない……」

我儘だと分かっているながらも、彼のシャツを掴む手に力を籠める。

「——今日は、ちゃんと帰ってくるから」

そんな私を見て、彼は僅かに口元を緩めた。

今の私は、我儘な子供そのものだ。もし本当に子を身籠っていたとしても、私のように幼稚な人間ではすっかりとした母親になれない。

かつてライリーが言っていた、酷い母親の様になってしまう可能性だって十分にあり得る。

もっと、しっかりとしなければ。

頭ではそう思っているのに、何故だかシャツを離す事が出来なかった。

「後で、マーシヤに様子を見に来させる」

「——だめ、貴方が来て」

「来れたらな」

「——来られたらじゃだめ。絶対」

不毛と化した押し問答は続く。

此処まで来ると、最早意地だった。仕事よりも私を優先して欲しいという、子供じみた意地。

そんな事、出来る筈が無い。それは、分かっている。だが今はどうしても、セドリックと離れたくなかった。

「——眠るまでは、傍に居るから」

彼はやや困惑を滲ませた顔をして、私にキスを落とした。

子供に言い聞かせる様な、優しい彼の声。そんな声で言われてしまつては、もう

これ以上我儘が言えなくなってしまう。

渋々彼の言葉に頷き、シャツから手を離れた手に自らの手を重ね、弱々しくも握り返す。

マーシヤが来てくれたら、少しは気が紛れるだろうか。彼女は不思議な人で、話をしていると嫌な事や寂しさ等が忘れられる事が多かった。

しかし彼女の瞳は深海の様に深く、時々怖くなる事があった。私の心の中まで見透かされている様な気分おぼに陥り、隠し事が出来なくなる。

人と長く関わっていると、その人の性格や思考が読めてくる事も多いだろう。ライリーを含めた街の人達の性格も、大体の事は把握している。

だがマーシヤだけは別だ。どれだけ話しても、彼女が何を考え、何を抱えているのかがまるで分からなかった。時々私を見つめる瞳が何処か寂しげに見えてしまうのも、言葉の節々に感じる僅かな違和感も、だ。

そんな事を考えているうちに瞼は重くなっていき、自然と瞳が閉じていく。

夢の中に落ちていく感覚の中、最後まで感じていたのは掌から伝わるセドリックの体温だった。

XXXVII Strange dream

——それはとても、奇妙な光景だった。

自身の瞳に映るのは、お屋敷の一室である広い書齋^{ライブラリー}。天井まで届く無数の棚に、圧迫感さえ覚える程びっしりと並べられた無数の書物。ダマスク柄の壁紙によく合うボルドーのカーテン。

見間違える筈が無い。此処は、確かにエインズワース家の書齋^{ライブラリー}だ。

そして自身が座っているのは、書齋^{ライブラリー}に置かれていたお気に入りのおアームチェア。少々古びた見た目をしているが作りはしっかりとっていて、多少力を籠めても壊れそうにない頑丈な椅子だ。

この椅子に座っていると、読書に明け暮れていた日々を思い出す。

『——お嬢様』

ふと遠くから、声が聞こえた。耳に心地よく届く、懐かしい声だ。

『——エルお嬢様、どうなさいましたか？』

その声は徐々に鮮明になっていき、今度は自身の近くではっきりと聞こえた。

『——お嬢様、しっかりしてください』

私の顔を覗き込む人物と、視線が交じり合う。その人物は、私がかつて友人として慕っていた相手。

その顔に、漸く意識がはっきりとする。

「メアリー……？」

白と黒のコントラストが印象的な、皺の無い衣服。美しいブラウンの髪を丁寧に纏め、ブリムで留めた清潔感のあるその姿。

それは最後に見た時から、何も変わっていない。

『先程からずっとお声掛けしているのに、お嬢様だったらずっと宙を見つめたまま動かないから……、心配しましたよ』

彼女が愛らしく笑い、テーブルに積まれていた数冊の本を手を取った。長い間見ていなくとも分かる。その笑顔は紛れも無く、私がつつと見てきたメアリーのものだ。

あの晩彼女をこの屋敷に置いてきてしまった事を、後悔してしまう程の優しい笑み。自身の感情が揺れ、じわりと瞳に涙が滲む。

だが今は、感傷に浸っている場合では無い。

「——メアリー、どうして、此処に居るの？」

何とか口に出した言葉に、彼女が手を止めゆつくりと振り返った。そして怪訝な瞳を私に向ける。

『どうして……とは？ 私が此処に居るのが、そんなに珍しいですか？』

「——いえ、そ、そうでは無くて……、それよりどうして、私も此処に……？ だって私、先程迄ベッドで眠っていた筈なのに……」

『——？ お嬢様は先程からずっとその椅子に座っておられましたよ。今日のお嬢様はなんだか変ですね』

彼女がくすくすと笑いながら、棚に書物を一冊一冊丁寧に戻していく。そんなメアリーを眺めながら、立ち上がろうと足に力を籠めた。

だが、まるで自分の足では無いかの様に力が入らず、椅子から立ち上がる事が出来ない。

「——どうして……どうして私、此処に……。先程まで、本当にベッドで眠っていたの、熱を出して、それで……セドリックが……」

『あら、何を仰おっしゃっているのですか？ もしかして、座ったまま眠っていたのかし

ら。変な夢でも見ていたのでは無いですか？』

「——そんな、筈は……」

此方を見て笑う、メアリーの顔。テーブルやソファ、棚の位置、積み重ねられている新聞さえも、全て変わらない。何もかもがそのままだ。

まるで、私が屋敷から抜け出した事さえ無かった事になっている様な——。

そこで、はたと気付く。

セドリックやマーシヤは、何処へ行ってしまったのだろう。

勿論セドリックが、この屋敷に居る筈が無い。それは確かな事だが、それと同時に、私もこの屋敷に居る筈が無かった。

まさか、メアリーの言う通り全てが夢だったのだろうか。屋敷から抜け出した事も、セドリックやマーシヤ、街の人達と過ごした約一年半もの時間も、全て幻だったのだろうか。

「——なんで……そんな……」

どうにかして、この屋敷から再び逃げ出さなければ。そしてセドリックやマーシヤを探して、本当に全て夢だったのかを、幻だったのかを、確かめなければ。

そう思い、再び足に力を籠めた。

だが、今度は手首に絡まった何かが私を引き止める。それは重くて冷たい、嫌な感触。

一体何が、私の行く手を阻むのか。焦燥感に駆り立てられながらも、自身の右手首に視線を落とした。

「な、なに、これ……」

幾重にも重なる、太い銀のチェーン。それがまるで拘束でもするかのように、椅子のアームごと自身の右手首にきつく巻き付けられている。

何故、先程までずっと気付かなかったのだろう。どれだけそのチェーンを動かさうとしても、石化した様に動かない。

『——だめですよ、お嬢様』

不意に、メアリーの手が私の右手に重なった。その手はやけに冷たくて、陶器に触れている様だ。それが何よりも気味悪く感じ、吐き気が込み上げる。

『折角また、こうしてお話出来ているのに……』

彼女の顔には、もう先程の笑顔は無い。今はただ、泣き出しそうな程の悲愴感だけが滲んでいた。

「——なに、言っているの……？」

『お嬢様は私のただ一人の大切なお友達。でも貴女は、見ず知らずの男とこの屋敷を去ってしまった。私はお嬢様と、共にこの屋敷を去りたいと思っていたのに、貴女は私を置いて別の人を選んだ』

「そ、それは……」

『でも私、怒っていませんよ。どれだけ苦しくても、どれだけ旦那様から痛めつけられても、貴女がまた此処へ帰ってきてくれると信じていたから』

彼女が声を弾ませ、花が咲いた様に笑う。先程迄の悲愴感はもうどこにも無く、ころころと表情の変わる彼女の瞳は狂気染みた何かを孕んでいた。

私は、こんな場所に戻ってきた覚えなど無い。戻ってくるつもりだって無かった。

——これは夢だ。

私の長年の不安が、恐怖が、夢になって表れただけ。そうに決まっている。

だが、彼女が私の思考を遮る様にずいと顔を寄せた。

『夢じゃありませんよ、お嬢様』

触れそうな距離で、囁かれた言葉。それは、私を絶望へ追い遣るには十分なものだった。

『貴女は要らぬ物を身籠ってしまった。知らぬうちに体内で育ったそれは、貴女が

大切で、大切で仕方が無かったあの男にとっては「余計な物」だったのです。可哀想なお嬢様。それさえ無ければ、あの男からまだ愛して貰えたのに」

「何を、言っているのメアリー……、私が、身籠っているだなんて……そんなのまだ分からない事で……、でも、セドリックは私を愛していると言ってくれたの、あれは、嘘なんかじゃ……」

口から零れる、支離滅裂な言葉。酷い動悸に、言葉が上手く出てこない。

『お嬢様はまだ、「愛してる」なんて言葉を信じていらつしやるのですか？ 旦那様から、奥様から、愛して貰えなかったのに？ お二方は、お嬢様に見向きもしなかったのに？』

「——それは、」

『あの男も、お嬢様を愛してなどいなかったのです。都合のいい家政婦ハウスマイが欲しかっただけ。貴女は捨てられたのですよ』

彼女がひらりとスカートスカートを翻ひるがえし、私から離れる。そして徐に手に取ったのは、壁際に置かれていた木の丸椅子。

『——でも、大丈夫。私が居ます。私がいつまでもお嬢様の「友人」で居て差し上げましょう』

彼女が普段通りの優しい笑みを浮かべながら、その丸椅子をゆっくり持ち上げ、そして頭上へ振り上げた。

『でも、そうですね……。友人で居るには、邪魔な物が多すぎる様です』

「まって、まってメアリー、話を聞いて頂戴！」

視界が歪み、そしてぐるぐると回る様な眩暈に襲われる。それは恐ろしくて、おぞましくて、このまま死んでしまうのではないかという恐怖に苛まれた。

どれだけ逃げようとしても、右手首に巻き付いたチェーンが邪魔をする。

「——メアリー、メアリー、聞いて、お願い」

スローモーションの様に、ゆっくりと自身に向かって振り下ろされていく丸椅子。咄嗟に、空いた左腕で自身のお腹を庇い身を丸めた。

その瞬間。

腕に巻き付いていたチェーンから、カチ、と妙な音が聞こえた気がした。

*

額や背中など、全身を濡らす汗。張り裂けそうな程早鐘を打つ心臓に、乱れる呼吸。

瞳を開いた先は、見慣れた天井だった。そして視界の隅に映る、良く知った女性の姿。

「——マーシャ？」

息も絶え絶え声を掛けると、その女性が振り返った。

普段と変わらない彼女——マーシャの顔に、心中が安堵で満たされる。

「ああ、エルちゃん起きた？ 随分と麗うつくされてたけど、大丈夫？」

優しく、穏やかな声。私の髪をふわりと撫でるその手に落ち着きを取り戻しつつ、瞳を閉じ小さく頷く。

酷く、苦しい夢だった。まるで現実の出来事なのでは無いかと思ってしまう程、鮮明な夢。

メアリーの事は、もうずっと前から考える事をやめていたと言うのに、何故こんな時に彼女の夢など見てしまったのだろうか。

彼女の笑顔も声も脳裏に強く焼き付き、まるで本当に彼女と会話を交わしている様だった。これ程鮮明な夢を、今迄に見た事があっただろうか。未だ、夢だという

事が信じられない。

そんな事を悶々と考えていると、ひんやりとした手が額に触れた。

「熱はまだ少しあるみたいだけど、思ってた程じゃないな。良かった」

まるで私の思考を断ち切ってくれる様に、マーシヤがふふ、と優しく笑う。その笑顔を見ていると、徐々に脳があれはただの夢だったのだと理解し、動悸も呼吸の乱れも落ち着いてくる。

「私じゃなくて、セディの方が良かったよね。ごめんね、来られなくって。ちよつと急ぎの調べ物があつてさ」

「——調べ物……？ 仕事では無くって？」

思わずその疑問を口にすると、彼女の顔色が僅かに変わった。

「ああ、そう、仕事。仕事関連でね、ちよつと調べ物……」

「……マーシヤは？ その調べ物、手伝わなくて大丈夫なの？」

「私は……これから、街に出て調べるから大丈夫」

笑みを浮かべたまま、彼女が不自然に私から視線を逸らす。

マーシヤの様子が、何処かおかしい。妙に会話が噛み合わないのを、彼女が必死に取り繕っている様に見えてしまつて仕方が無い。

だが今は、まだ夢の余韻があり頭もぼうつとしている為、不自然な彼女を追求する気にはなれなかった。

右手首に感じた、冷たい感触。それだけは、夢から覚めた今もはっきりと残っている。今もメアリーに強く拘束されている様に感じ、思わず右手首を摩さすった。

「どうしたの？ 手、痛い？」

椅子をずるずるとベッドの傍まで引き摺ってきたマーシャが、不安げな表情を浮かべ私の顔を覗き込んだ。

自身の些細な行動に食いつくなど、やはり今日のマーシャはおかしい。右手を隠す様に布団の中に入れ、「特にそういう訳では……」と誤魔化しつつ身体を起こした。

「体調はどう？ 大丈夫？」

「ええ、朝よりかは大分良くなったわ」

「そっか、良かった。——それよりさ、セディの事なんだけど」

椅子に腰を掛けたマーシャが、複雑な表情を浮かべ声のトーンを落とした。何か言いづらい事でもあるのか、ううん、えっと、等と言い淀んでいる。

「昨日の夜、セディ変な事しでかさなかった？」

「――変な事？」

彼女の不可解な問いに疑問を感じながらも、ぼんやりと昨晚の事を思い出す。

彼は帰宅してから、ずっと一人酒を飲んでいた。何処か様子が変ではあったものの、彼女が言うような「変な事」は特に無かった筈だ。

だがそこで、眠る直前にされた妙な質問が脳裏に浮かぶ。

「――何故？」

その質問は彼女の言う変な事に入らない事柄だとは思うが、何処と無く彼の問いを彼女に話す気になれず、誤魔化す様に問い返した。

「んつと、昨日、セデイと一緒に酒場バブに行つたんだけど……、その、セデイがまあちよつと色々あつて、機嫌が悪かつたみたいで……、帰つてからエルちゃんに八つ当たりとかしてないかなあつて、思つて」

彼女の言葉に、すぐさまセドリックが機嫌が悪かつた理由に察しが付く。恐らく、昨晚彼が言っていた「いけ好かない奴」というのが根源だろう。

彼女に、昨晚の彼の問いを話すべきだろうか。彼女の口ぶりからするに、マーシヤもその「いけ好かない奴」の存在を知っている可能性が高い。

だが、彼に「忘れてくれ」と言われた事柄を勝手に話して良いものだろうか。

ううん、と唸り頭を悩ませていると、マーシャが私にずいと顔を寄せた。

「何？ 何かあった？ 何かあったなら何でも言つて」

今迄に見た事が無い程の、深刻な彼女の表情。その表情に圧倒され、思わず「気になる質問をされて」と言葉が漏らす。

「気になる質問？ どんな？」

私の言葉に、すぐさま彼女が食いつく。

やはり、彼女の様子がおかしいのは気の所為では無い様だ。セドリックも、昨晩から今朝に掛けてずつと様子が変わった。

私の知らぬ所で、何か大きな問題でも起こっているのだろうか。だがそれを彼女に尋ねても、今の様子じゃきつと彼女は何も答えてくれない。なんでもない、なんて言つて私の問いを誤魔化すだろう。

悶々と考えながらマーシャを黙つて見つめると、彼女が少々焦りを感じさせる表情を浮かべばつと私から顔を背けた。

「ごめん、あんまり詮索するのは良くないよね」

普段何を考えているのか分からない様な彼女が、此処まで動揺を顔に出すのは珍しい。徐々に心中が不信感で満ちていくのを感じ、どうせ何も答えないだろうと分

かっつていながらも「何かあつたの？」とマーシャに尋ねた。

すると、やはりと言うべきか、彼女が誤魔化す様に「何でもないよ」と言つてぎこちない笑みを浮かべた。

「ところで、セディとは上手くやれてる？ あいつデリカシーとか微塵も無いし、相手への配慮も常に欠けてるから、私生活だけじゃなく夜の方とかも大変じゃない？」

無理矢理話題を変えられた事を感じ取りながらも、彼女の問い掛けについてセドリックとの情交を思い出してしまい、一気に顔に熱が上る。

女性同士ならではの話題ではあるが、相手がマーシャとなると少し気恥ずかしい。

「——その、セドリックにはとても……大切にしてもらっていると思うし、沢山、愛して貰っているから……」

曖昧に言葉を濁すが、マーシャはにやにやとした顔で食い下がる。

「愛して貰ってる、なんて生々しいなあ。あいつが女の子相手に優しくしてる姿とか全然想像出来ないけど、でも乱暴な事とかはされてない様で安心したよ」

「乱暴な事なんて……！ そんな事、一度もされた事無いわ、大丈夫よ」

「そう？ たまにあるじゃない、家庭内の性暴力とか。特殊性癖とか、アブノーマ

ルな事求められたりとか……」

「セドリックはそんな人じゃないわ」

彼との情交。それはとても甘く、熱く、何度交わしても飽きる事等決してない行為。

彼の性格を考えるとどうしても淡泊な情交を想像してしまいがちだが、彼は毎回痛みを感じさせない様長い時間を掛け、気が触れそうな程の快樂をくれる。時々、私ばかり善くして貰っているのではないかと感じる事もあるが、その都度彼は、私が快樂を得ている姿を見るだけで満たされる、なんて言葉をくれた。

「——なんか、厭らしい事考えてるでしょ」

マーシヤがこれ以上ない程下劣な笑みを浮かべ、私の顔を覗き込む。

「な、何も、何も考えていないわ……！ 貴女が、変な事を言うから……」

「変な事言うから、何？」

「もう！ マーシヤってはいいつもそうやって擲揄って！」

ポン、と彼女の肩を叩くと、マーシヤは楽しそうに声を上げて笑った。

——それから、約数十分。

普段とは少し違った会話を楽しみ、丁度時計の針が十二時を指した頃。マーシャが徐に椅子から腰を上げた。

「私、そろそろ行かなきゃ」

彼女が、何処か猫を連想させる様に腰を反らしながら大きく伸びをし、短く告げる。

「あら、もう行つちやうの？」

「うん、エルちゃんも大分顔色良くなったし、私も色々調べ物あるし」

「……そう」

体調は、朝に比べたら大分良くなった。夕飯の支度等の家事も、今の調子であれば熟せるだろう。だが、なんだか彼女が帰ってしまう事が少しだけ寂しく感じた。

「なあに、寂しい？」

そんな私の心を見透かした様に、マーシャがふふ、と笑う。

「一人になるのが、少しだけね」

そう笑って返すと、彼女が切なげな表情を見せた。

「そんな事言われたら、行きづらくなるなあ」

「私は大丈夫よ。わざわざ来てくれてありがとう」

ベッドから足を下し、ゆっくりと腰を上げる。

危惧していた眩暈も、倦怠感も無い。想像していた以上に、回復した様だ。後で少し気分転換にでも、街へ散歩に出ても良いかもしれない。

名残惜しそうに去っていくマーシャを見送り、ぱたりと玄関扉を閉める。そしてしんと静まり返った部屋に、小さな溜息を吐いた。

玄関扉に凭れ掛かり、そっと自身の下腹部を摩る。

今日の体調不良は、少々気味の悪いものだった。あれ程の酷い不調だったというのに、少し眠っただけで回復してしまうだなんて妙だ。

それに、夢の中のメアリーの発言。

“貴方は要らぬ物を身籠ってしまった”

本来であれば、ただの夢だと直ぐに切り替える事が出来る。だが、何故だかその言葉だけがやけに心に残って離れない。

それはメアリーが発した言葉だからか、それとも“思い当たる節”があるからなのか。

今の私には、それを深く考える事が出来なかった。

XXXVIII Jealousy and superiority

灰色に濁った空の下。

見慣れた街並みを眺めながら、ふらふらと石畳の道を歩く。

マーシヤが帰ったあの後、思った以上に体調が回復していた為ある程度の家事は難なく熟す事が出来た。そしていつもの様に、セドリックが帰宅するまでの時間を読書に充てようと思いい光の入る窓際で本を開いていた。だが、困った事に今日は読書に集中する事が出来なかった。

その理由は、今朝感じたものと同じ寂しさや心細さ、そして漠然とした不安である。

私の心を苛み続けるそれ等の感情は、何をしても治まる事は無かった。それどころか、徐々に不安や恐怖が大きくなっていき、しんと静まり返った部屋に響く秒針

の音さえ刺激になる程であった。

その静寂に、飲み込まれてしまうのではないか。そんな非現実的な恐怖に駆られ、じっとしている事が出来なくなった私は逃げる様に街へ繰り出した。

——ライリーと立ち話をしたり、普段は寄らない花屋や紅茶専門店に寄ってみた。いつも通りであって、何処か少し違った街の散策は、負の感情の浄化だけでなく良い気分転換にもなった。

だが、気が紛れるのは人の中に居る時だけ。人通りが少なくなり、一人になるとやはり漠然とした不安に襲われる。

不安というのは、非常に厄介な感情だ。自分の意志では取り除く事が出来ず、次第に心を病んでいく。

今にも雨が降り出しそうな空を見上げ、湿った空気を吸い込んだ。それを溜息に変え、深く吐き出す。

そっと、右の掌をお腹に触れさせた。

もし、夢の中のメアリーが言った通り、彼との子を身籠っていたとしたら。それを知った彼は、なんというだろうか。快く、受け入れてくれるだろうか。

今は何を考えてもマイナスな事ばかり浮かんでしまう為、そんな彼の姿を想像す

る事はとても出来ない。

人と関わる事を得意としない彼が、人の親になるだなんて。それは彼にとつて、あまりに酷な事なのではないだろうか。重荷に、なってしまふのではないだろうか。今は彼と二人で慎ましく暮らして居るが、子供が出来ればそうもいなくなる。お金だつて掛かる上に、生活だつて真逆と言つていい程に変わつてしまふだろう。勿論、まだ事実と決まつた訳では無くただの憶測に過ぎない。だが、考えれば考える程心は重くなる一方だつた。

再び溜息を吐き、足を引き摺る様にして家の方へと歩を進める。

「——！」

突如、背に感じた衝撃。ぐらりと身体が前に傾き、状況を飲み込む前に足元に出来た大きな水溜りの中に倒れ込んだ。

身体も服も水浸しだ。膝や腕などに痛みを感じながらも、身体を起こす。

自身の背に衝撃を与えたのは、人の手だつた様に感じた。それに衝撃を受ける前、誰かの足音が背後から聞こえていた様な気がする。

地面に倒れて数秒が経つた頃、漸く自身は誰かに突き飛ばされたのだと理解した。

——一体誰が、何の為に。

ゆつくりと振り返り、その正体に視線を向ける。

「……」

私をきつく睨みつけながら見下ろすのは、ブラウンの髪を愛らしいリボンで纏めた、まだ子供と言ってもいい程に若い少女。ブルーの瞳に、頬に散ったそばかすが印象的な娘だ。

そういえば、時々街でこの娘を見かける事があった。その都度妙な視線を感じるとは思っていたが、自身の知らぬ間に、突然背後から突き飛ばされる程の恨みを買ってしまったのだろうか。

だが、それを彼女に問う事は叶わなかった。

「——どうして、貴女なの」

低い声で唸る様に、言葉を発した彼女の瞳が僅かに揺れる。

「私の方が、彼の事をずっと愛していたのに！」

「……彼？ 彼って……セドリツクの事？」

「気安く名前を呼ばないで！ 貴女、彼と結婚したんでしょ。ライリー姉さんかから聞いたわ。どうやって彼を物にしたの！ どうやって彼を取り込んだの！ 見た目しか取り柄が無い貴女みたいな人が、彼を魅了する事なんて出来る筈が無いの

よ！」

彼女の捲し立てる言葉は止まらない。その瞳には涙が滲んでいて、今にも零れ落ちてしまいそうだ。

「私はずっと、ずっと彼を想ってた。彼が私の想いを受け入れてくれる事は無かったけれど、それでも諦めなかった……。綺麗な女性になれる様に努力したし、料理だって頑張つて覚えたし、私は貴方より何倍も努力したのよ！」

悲痛な彼女の叫びが、響いて周囲に反響する。幸い人通りが少なかつた為多くの注目を浴びる事は無かつたが、これはあまり良くない状況だ。今は反論するよりも、彼女を落ち着かせる方が先だろうか。

しかし困つた事に、どれだけ考えてみても彼女を落ち着かせる言葉が見つからない。

だがそれも当然と言えるだろう。私と彼女が会話を交わすのはこれが初めてであり、彼女の人柄や性格は把握していない。そんな彼女を、言葉一つで落ち着かせる事など出来る筈が無いのだ。

どうしたものかと、彼女を見つめながら頭を捻る。すると彼女が、徐に口を開いた。

「——彼の事、私に返して」

先程の悲痛な叫びからは想像も出来ない、静かな声。冷めきった瞳。

そして、耳を疑う彼女の言葉。

「いいでしょう？ 別に彼じゃなかったって。私知ってるのよ。貴女はその綺麗な容姿から街でも評判が高くて、貴女に好意を抱く男性が多くいるって事」

「……………」

「だから、いいじゃない。彼を返して頂戴」

彼女の言葉を、私以外の人が聞いたとしたら一体なんと言うだろうか。

私は当事者であるからか、彼女の言葉を上手く理解する事が出来ない。故に、彼女の主張が正しいものなのか間違っているものなのかさえ分からなかった。

想いを寄せる相手から、拒絶をされる。それ程に苦しい事は無いだろう。悲しい事は無いだろう。だが、それでも諦めず彼を想い続け、努力を重ねた彼女はとても強い心の持ち主だ。

見知らぬ女に奪われたと、返して欲しいと、主張したくなる気持ちも分からない訳ではなかった。

——だが。

セドリックは彼女を拒絶した。彼の事だ、きつと彼女を相手にすらしなかっただろ。彼の記憶に、彼女が残っているかすらも怪しい。

だって彼女は、何処にでも居るような普通の少女だ。それこそ、街中で擦れ違っても記憶に残らない程の。

「——ふふ」

思わず漏れてしまった、嘲笑に似た笑み。慌てて、口元を手で覆い隠す。

「……な、なんで、貴女、今笑って……」

「ごめんなさい、違うのよ」

慌てて否定の言葉を述べる。だが、顔に浮かんだ笑みを剥がす事が出来ない。

セドリックは彼女を拒絶し、私の手を取った。私を選んだ。他の誰でも無い、この私を。

そして恋に破れた彼女は、怒りの矛先を私へと向けた。その事実が、おかしくて堪らない。

——私は、この感情が正しいものなのか、間違っているものなのかを判別する事が出来なかった。それは彼女の言葉が理解できなかったのと同じ、当事者だからだ。笑いを必死に堪えようとしても肩は震え、脳内には醜く歪んだ言葉が幾つも浮上

する。

毎日同じベッドで眠り、仕事へ送り出し、帰宅すれば口付けを交わして、時に深く求め合う。彼は何度も私に愛の言葉を囁いてくれて、まるで私しか見えないとも言ふような熱の籠った瞳で私を見つめてくれる。

彼女が恋焦がれた人は、別の女性と、他でも無いこの私と深く結ばれた。

脳内を回るそれ等の言葉に、ぐっと唇を噛み締める。そうでもしていないと、今すぐにでもそれを口にしてしまいたいそうだった。

「何、何よ、何がおかしいの」

彼女は動揺を隠しきれない顔で、一步二歩と私から後退る。

そんな彼女に優しく微笑みかけ、ゆっくりと口を開いた。

「——憐れねえ」

子供を諭す様に、優しい声で。そつと囁くように告げる。

「彼は一度でも貴女の物になった事があつたかしら？ その答えは貴女が一番よく知っている筈よ。それなのに、彼を返して欲しいだなんて……、勘違いも甚だしいわね」

「なっ——……」

「良く聞いて頂戴。彼を世界で愛しているのは私よ。決して貴女じゃないわ。そして、彼が愛しているのも貴女じゃなくて私なの」

「——！」

彼女の顔が、悲痛に歪む。そして、勢い良く彼女の手が振り上げられた。

恋焦がれた相手に拒絶された、憐れな少女だ。平手打ちの一つ位は受けてあげるべきだろう。

黙って、彼女に身を委ねる。

だが、幾ら待ってもその手が私の頬を打つ事は無かった。

「——ちよつと、やりすぎなんじゃない？」

彼女の手を掴んで止めたのは、見知らぬ青年。歳も背も、セドリックと同じ位だろうか。

細身の体に、すらりと長い手足。顔立ちも整っている方で、女性受けが良さそうな青年だ。

突如自身の行動を止められた事に驚いたのか、少女が動揺を滲ませた顔で青年の手を振り払う。そして青年の胸を突き飛ばし、そのまま踵かかとを返し何処かへと走り去ってしまった。

その場に残された、私と青年。

驚いたのは、あの少女だけでは無い。青年の行動に驚き、加えてこの場を立ち去りたいと思つたのは私も同じである。

見ず知らずの人だとはいへ、彼に助けられたのだ。お礼の一つ位言うべきだろうか。

だが、私はあのまま平手打ちを受け入れるつもりだった。助けて欲しいと言つた覚えも無ければ、それを望んだ訳でも無い。お礼を言うには少し違う気もする。

そんな事を考えながら青年を見上げると、ぱちりと視線が交わつた。そして気まぐずい空気を破る様に、青年が口を開く。

「随分と派手にやられたね」

青年が苦笑いを浮かべ、此方に手を差し出した。

その手を見て、私はまだ水溜まりの中に尻餅を付いたままだという事に気付く。

「——私の夫は、女性から好かれる事が多いから……」

なんと無しにその手を取る事が憚^{はばか}られ、石畳に手を突いて自力でその場に立ち上がつた。

この街では見た事の無い顔だ。何処か、別の街から来た人なのだろうか。服に染

みた水を両手で絞りながら、青年の顔を盗み見る。

「高そうな服だけど、大丈夫？ 汚れてない？」

彼の視線が、私の服に止まる。それに釣られて自身の服に目を遣ると、目立ちはしないものの所々に泥が付着していた。水溜りの中に倒れてしまったのだから、汚れてしまうのも当然だ。

汚れる原因を作ったのはあの少女だが、私がもう少し周囲を気に掛けていれば防げた事である。セドリックに買ってもらった服をこの様な形で汚してしまった事に罪悪感とほんの少しの苛立ちを感じながら、深く溜息を吐いた。

「大切にしていた服なのだけど……残念ね……」

目の前の青年に曖昧に返答すると、彼が僅かに困惑の表情を浮かべた。慰めの言葉を探してくれている様だが、彼に慰めて貰った所でこの気持ち晴れる訳では無い。

青年に向かってぺこりと小さく会釈をし、自宅へ戻ろうと踵かかとを返した。

「——あ、待って」

突如、強く掴まれた右手首。メアリーの夢を思い出す、妙に冷たい奇妙な感覚。拘束される様な不快感に、思わずその手を振り払った。

「い、いめん」

「……いえ、此方こそごめんなさい。少し、驚いてしまつて」

右手首を摩りながら、青年の視線から逃れるように顔を背けた。

動きを封じる様な拘束は、されて気分の良いものでは決してない。相手がセドリツクなら話は別だつただろうが、少なくとも目の前の青年にむやみに触れられて何も感じない程の愚婦では無かつた。

「——僕はアルフレッド・ガーランド。君は？」

彼が此方に手を差し出し、握手を求める。

「——エル・アンドールよ」

差し出された手を一瞥し、名を告げた。

握手に応じるには、右手を出さなくてはならない。今は例の夢の事もあり、右手を誰かに触れられる事は極力避けたかつた。

だが、握手に応じないのは失礼にあたる行為だ。少々悩んだ末に、躊躇いながらも彼の手を取つた。

先程引き止められた時にも感じた事だが、彼の手はやけに冷たい。

なのに、何処か生温かさを感じて気味が悪い。一刻もその感触から逃れたくて、

思わず手を引いた。

しかし、彼が私の手を離す事は無かった。

強引に引き寄せ、そして紳士の真似事でもするかの様に私の右の手の甲にキスを落とす。

その瞬間、虫が背筋を這う様な気妙な不快感を覚えた。キスをされた場所から、何か嫌なものが広がっていく様な。そんな感覚に、恐怖さえも感じる。

振りほどく様にやや乱暴に彼から手を離し、右手を自身の背後に隠した。そしてそっと、濡れたスカートで手の甲を拭う。

「アンドール……?」

彼がぼつりと私の姓を呟き、その表情を曇らせた。

てつきり手を振りほどいてしまった事を咎められるかと思っただが、彼は何やら考え込む表情を浮かべたまま黙り込んでしまった。

「どうかしたの?」

なんと無しにその言動が気になり、彼に問い掛ける。

「——ああ、いや。何でもないよ」

だが彼がそれ以上何かを言う事は無く、「じゃあ、僕はここで」と短く告げ踵きびすを

返した。

腕を掴んでまでして引き止めて置いて、随分と呆気無い別れだ。一体彼が何を目的として私を引き止めたのかが分からず、彼の背を見つめながら首を傾げた。

「ああ、そうだ」

まるで私の心情を読み取ったかの様に、タイミング良く彼が足を止める。

そして再び私と視線を交わらせた彼が、何処か不自然な笑みを浮かべた。

「これ、君にあげるよ。さつき花屋で貰ったんだけど、僕はこういうの必要無いから」

差し出されたのは、一輪の赤い薔薇。薄いクラフト紙で巻かれたそれは、確かに私の知る花屋の物だ。

だが、花屋で花を貰う、なんて事があるのだろうか。私も先程花屋を訪れたが、花を配る様な事はしていなかった。

——もしや、この薔薇には何か特別な意味が込められているのではないだろうか。薔薇には、「愛」を意味する花言葉が複数存在する。

この街の花屋は確か、まだ若い兄妹が両親の代わりに経営していたと記憶している。妹の方は年頃の愛らしい娘で、もしかすると目の前の青年に気があり個人的に

贈った物なのかもしれない。

そんな物を、私が受け取ってしまったても良いのだろうか。

そもそも、必要無い物なら最初から受け取らなければ良かった話だ。見ず知らずの私に押し付ける事が出来るのなら、拒絶をするという事も出来ただろうに。

差し出された薔薇を受け取れずに居ると、私の心中を察したのか彼が苦笑いを浮かべた。

「受け取ってくれると嬉しいな。僕は花の手入れに詳しくなくて、直ぐに枯らせてしまうから」

クラフト紙に包まれた薔薇は、美しく咲き誇っている。こんなにも美しい薔薇を枯らせてしまうなんて、あまりに花が可哀想だ。

「——そういう、事なら」

枯らせてしまうだなんて、いい脅し文句である。そんな事を言われてしまえば、受け取らざるを得ない。

仕方無く差し出された薔薇を受け取ると、彼が満足げに笑った。

「じゃあ、今度こそ僕は行くよ。もしかた何処かで会えたら、その時はセドリッ、君も交えて食事でも」

「ええ、是非」

自身も踵きびすを返し、彼が行く先の反対側へと足を向ける。

——だが、僅かな違和感に気付きその足を止めた。

「……セドリックを、含め？」

振り返り、遠目に見える青年の背に視線を向ける。

彼には夫が居ると話しただけで、セドリックの名前は教えていない筈だ。それに、少女と口論になった際も少女はセドリックの名を出していない。

もしや彼は、セドリックを知っている人物なのだろうか。

ふと、既視感に似た奇妙な感覚に苛さいまれる。

何処かで、聞いた事のあるような名前だ。何処かで会った事があつただろうか。だがどれだけ考えてみても、その答えが出る事は無い。

「——ガーランド……」

呟いたその名前は、ふわりと吹いた風に掻き消された。

「1巻〜3巻共通参考文献」

- ・ 図説 英国貴族の令嬢 村上リコ (河出書房新社)
- ・ ヴィクトリア朝英国人の日常生活 貴族から労働者階級まで
ルース・グッドマン著 小林由果訳 (原書房)
- ・ 図説 英国のインテリア史 トレヴァー・ヨーク著 村上リコ訳 (マール社)
- ・ 図説 英国貴族の城館 カントリーハウスのすべて 田中亮三 (河出書房新社)
- ・ 図説 英国メイドの日常 村上リコ (河出書房新社)
- ・ ヴィクトリア時代の室内装飾 女性たちのユートピア (L I X I L 出版)

本書は、2021年6月13日発行の「Dachura 1st story-ivy-」に修正を加え、再編集したものです。

[DachuRa 1st story-ivy- II]

2023年6月17日 第1刷発行

著者：白城 由紀菜

カバー：白雪

印刷所：株式会社ブックフロント

ご意見・ご感想お待ちしております。

●宛先

https://odaibako.net/u/w_yuki_1601

